

博士学位論文

複文表現の意味的カテゴリー

—「目的」「付帯状況」をめぐって—

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

日本語文化専攻

梶川 克哉

平成 24 年 9 月

目次

第1章	序論	1
1.1	はじめに	1
1.2	本論文の構成	2
第2章	理論的背景	4
2.1	はじめに	4
2.2	複文について	5
2.3	従属句分類	6
2.3.1	従属句の分類方法	7
2.3.2	A類従属句とB類従属句について	10
2.4	カテゴリー観	13
2.4.1	プロトタイプ・カテゴリーの特性	14
2.4.2	スキーマ	16
2.5	意味分析の方法論	17
2.5.1	文脈的作業原則	18
2.5.2	対照的作業原則	19
2.6	本章のまとめ	20
第3章	「目的」を表す複文表現	22
3.1	はじめに	22
3.2	先行研究について	22
3.3	比較・分析	24
3.3.1	「～に＋移動動詞」と「～ために＋移動動詞」の比較	24
3.3.1.1	先行研究について	25
3.3.1.2	移動動詞の規定	27
3.3.1.3	移動の着点について	30
3.3.1.4	目的実現の確実性について	32
3.3.1.5	目的の重大性について	35
3.3.1.6	意味記述	36
3.3.2	「目的」と「原因」を表す「～ために」の意味的共通性	36
3.3.2.1	先行研究について	37
3.3.2.2	主体について	39

3.3.2.3	「目的」の「～ために」の意味記述	40
3.3.2.4	「原因」の「～ために」の意味記述	44
3.3.2.5	共通する意味特徴	46
3.4	本章のまとめ	48
第4章	「付帯状況」を表す複文表現	50
4.1	はじめに	50
4.2	先行研究について	51
4.2.1	「付帯状況」について	51
4.2.2	動詞の「過程」について	54
4.2.3	「文体」について	58
4.3	文脈的作業原則による分析	60
4.3.1	依拠するプロセス論	60
4.3.2	先行部分について	61
4.3.2.1	動態プロセス	62
4.3.2.2	状態プロセス	62
4.3.2.3	経過的プロセス	64
4.3.2.4	瞬間的プロセス	64
4.3.2.5	意志性	65
4.3.3	後件について	66
4.3.4	まとめ	67
4.4	対照的作業原則による分析	67
4.4.1	類義表現の認定	68
4.4.2	動態プロセス	68
4.4.3	状態プロセス	71
4.4.4	経過的プロセス	74
4.4.5	瞬間的プロセス	75
4.4.6	意味記述	77
4.5	本章のまとめ	78
第5章	「目的」要素と「付帯状況」要素を持つ複文表現	81
5.1	はじめに	81
5.2	先行研究について	81

5.2.1	「主」と「従」による意味記述	82
5.2.2	「機会」による意味記述	85
5.2.3	類義表現による意味記述	88
5.2.4	先行研究の問題点	89
5.3	文脈的作業原則による分析	90
5.4	対照的作業原則による分析	96
5.4.1	「～がてら」と「～をかねて」	96
5.4.1.1	「～をかねて」の先行研究	96
5.4.1.2	類義表現としての認定	97
5.4.1.3	比較分析	98
5.4.2	「～がてら」と「～かたがた」	102
5.4.2.1	「～かたがた」の先行研究	102
5.4.2.2	類義表現としての認定	103
5.4.2.3	比較分析	105
5.4.3	「～がてら」と「～ついでに」	109
5.4.3.1	「～ついでに」の先行研究	109
5.4.3.2	類義表現としての認定	111
5.4.3.3	比較分析	112
5.5	意味記述	119
5.6	「～がてら」の意味に内在する「目的」要素と「付帯状況」要素	121
5.7	本章のまとめ	122
第6章	結論	124
6.1	本研究のまとめ	124
6.2	本研究の意義と課題	129
6.3	展望	133
	用例の出典	138
	参考文献	140
	謝辞	144

本論文の第 3 章から第 5 章は、以下の論文及び研究発表に基づいており、その後の研究によって明らかになった内容を新たに加筆、修正したものである。

第 3 章：2012 年 6 月 「「目的」を表す「～ために＋移動動詞」「～に＋移動動詞」の比較」『KLS Proceedings』32, pp.49-60 (関西言語学会)

第 4 章：2011 年 12 月 「「～ながら」で示される事態の構成要素的解釈—「～つつ」との比較を通して—」日本語文法学会第 12 回大会研究発表

第 5 章：2010 年 5 月 「「～がてら」の意味分析」
『日本認知言語学会論文集』第 10 巻, pp.77-87(日本認知言語学会)

＜本稿における表記法＞

- (1) 引用例の出典は例文の後の()内に示す。詳細は本稿の末尾に用例出典として挙げる。例文の後に出典が示されていないものは筆者による作例である。
- (2) 例文の文頭に示される「*」は、その表現が非文であることを表し、「?」は非文ではないが容認されにくいことを表す。
- (3) 引用例文の中で、考察対象とする表現については下線(_____)で示す。また、考察対象以外の部分で問題とする表現には破線(_____)を施す。
- (4) 先行研究から引用した文中における下線(_____)は全て引用者によるものである。
- (5) 例文や意味特徴、その他特記事項には各章ごとの連番を付す。図表についても各章ごとの連番を付す。
- (7) 引用文中、筆者によって省略した箇所は(略)、(...)で表す。
- (8) 注は、各ページ末に記し、各章ごとに連番を付す。
- (9) 各表現の意味特徴は抽象度のレベルを問わず < > で括って記述する。

第1章 序論

1.1 はじめに

文というのは、一語から成るものもあれば、文中のいずれかの要素が修飾表現を伴うことによって、さらに拡大したものまである。その拡大した部分は、語のようなレベルから、文のようなレベルまで様々である。そういった連続的な拡大レベルのうち、文のようなレベルの修飾表現を伴った文は、「複文」と呼ばれる。本論文で考察の対象として扱うのは、そのうちの一部の表現形式である。具体的には、いわゆる「目的」を表すとされる「～ために」及び「～に＋移動動詞」、「付帯状況や同時動作(以下、「付帯状況」)」を表すとされる「～ながら」及び「～つつ」、そして、そのどちらにも解釈され得る「～がてら」である。

本稿で分析の対象とする、これらの表現形式は、従来の考え方而言えば、例えば「主節の目的を表す」というように、文中での機能を示すとされる。また、類似の機能を持ついくつかの表現形式をまとめて「目的表現」というように括られてきた。従来の研究で行われてきた、このような文法的機能の整理は、複数の表現形式間に何らかの共通性を見出すという点で、大きな貢献を果たしたと言える。しかし、本稿の中で議論を進めるにつれて、こういった「目的」や「付帯状況」といった術語は、そもそも抽象的共通性に付けられた「ラベル」に過ぎないということに気づく。なぜなら、実際の用例を観察していくと、表現形式一つ一つに独自の意味を認めなければ解釈できないものがあるからである。例えば、ある主体の移動(「来る」という事態を「遊ぶ」という概念と関連付けて言い表すのに、少なくとも次のような文が考えられる。

- (1) 遊ぶために来ました。
- (2) 遊びに来ました。
- (3) 遊びながら来ました。
- (4) 遊びつつ来ました。

これらは前件と後件は同一であるが、文全体として表される事態、話者の捉え方は異なっている。(1)、(2)で描写される事態と(3)、(4)で描写される事態はもちろん異なる。それでは、(1)と(2)、(3)と(4)については、意味的に何が共通していて、何が異なるのか。この点に関して、従来の記述をさらに進めて、用例を比較しながら各形式の意味を厳密に記述する必

要がある。これが本研究の中心的課題である。

ところで、現代日本語には、上に挙げた典型的な「目的表現」や「付帯状況表現」と呼ばれる表現形式もあれば、そのどちらにも取れる表現形式として「～がてら」がある。

(5) 遊びがてら来ました。

これはそもそも独自の意味が十分に記述されてこなかった表現形式であるが、用例から抽出された意味記述を観察すると、目的表現とも、付帯状況表現とも考えられる。このように境界が明確でないところに位置する表現についても、導き出された意味記述から論じていきたい。

1.2 本論文の構成

本論文は以下の構成で進められる。

まず、第2章では、本研究の基盤となる理論的背景について概観する。具体的には、いわゆる「複文」の定義及びその一成分たる従属句(節)の階層性に関する先行研究の議論を提示する。また、本研究は、類義表現間には典型性の程度差があり、かつ、類義表現を統べる共通の意味特徴が存在するという見通しに立つため、認知言語学のカテゴリー観を援用する。したがって、この考え方についても確認する。そして章の最後には、本稿の中心的な作業となる意味分析の手法を示す。

第3章では、「目的」を表すとされる「～ために」の意味の記述を行う。まず、「～ために+移動動詞」の形で、類義表現「～に+移動動詞」との比較を行う。続いて「原因」の「～ために」との比較から「目的」の「～ために」の意味を記述する。そして再度、「～に+移動動詞」の意味と比較して、共通の意味特徴、すなわち、「目的」を定義づける。

第4章では、「付帯状況」を表すとされる「～ながら」と「～つつ」の意味記述を行う。分析の前提として、前件部分の過程性を「動態」「状態」「経過的」「瞬間的」に分け、それぞれで表される意味特徴を記述し、「付帯状況」とは何か、その内実を示す。その上で、両表現を比較し、相違点を見出す。そこで示された相違点を踏まえ、両表現の違いとして従来言われてきた文体差について、その由来は意味の面から説明され得るということを提案する。

第5章では、先行研究で様々に論じられてきた「～がてら」の意味を分析し、記述する。まず、前件部分で表される内容、後件部分で表される内容を用例に基づき記述する。続い

て、類義表現「～をかねて」「～かたがた」「～ついでに」との比較を行い、意味の精緻化を図る。結果得られた意味特徴には「目的」に通じる意味特徴、「付帯状況」に通じる意味特徴が認められると論じ、それを以って、「～がてら」が「目的」「付帯状況」それぞれのカテゴリーの周辺の成員であると主張する。

最後に、第6章では、第3章から第5章までの分析の結果を総括し、今後の課題と展望を示す。

第2章 理論的背景

2.1 はじめに

本稿で分析の対象としている各表現は、動詞や名詞など、豊かな意味構造を持つ内容語とは区別され、一般的に「複文」を形成する機能語と呼ばれることが多い。それらの具体的な分析に取り掛かる前に、この章ではまず、議論の土台となる理論を示しておく。

最初に、複文とはそもそもどのような文なのかという問題について論じている先行研究を取り上げる。それに基づき、単文と複文というのは厳密に区分できるものではないという、本稿の立場を示す。

単文らしい単文から、複文らしい複文まで連続的であると同時に、「文に似た部分」(南1993:74)の内部構造にも連続的な階層性が確認されている。このような文の階層性に関する従来の研究も意味を考える上で重要である。というのも、段階性が認められること自体、何らかの意味的まとまりが反映されていると考えられるからである。文の階層性については、すでに多くの先行研究で議論されてきたが、それらを「従属句の階層性」という形で示した南(1993)の「従属句分類」は、各従属句で表される内容の概念的枠組みを捉えるのに非常に有効である。

本研究では、類義表現間の「抽象的な共通性」を論じることが一つの大きな課題である。これは認知言語学で提唱されるプロトタイプ・カテゴリー論によって得られる知見である。言語表現の意味というのは、表現自体にもともと自律的に定まっているモジュール的なものではなく、ゆるやかな連続体を成しているという見方は、言語の本質を捉えるのに有効であると考えられる。

本研究は類義表現の個別的な意味を、多くの使用事例からボトムアップ的に共通的特徴を抽出して記述することを第一の目的としている。しかし、文の成分と成分を関連づけるという機能語の性質上、名詞や動詞のように、自己充足的に意味を記述することはできない。つまり、機能語を挟んだ従属句(節)と主節との関係性を見ていき、全体を組み込む形で記述する必要がある。この点において、意味分析の方法として、服部(1968)、國廣(1982a)で提唱されている分析方法が有効だと考え、採用する。

¹ 内容語(content word)とは、それ自体で意味を持ち、単独で存在しうる語であり、モノや行為や属性などを記述する。典型的には名詞、動詞、形容詞などがこれに当たる(河上 1996:208)。機能語(function word / grammatical word)とは、単独では存在できず、内容語に付属したり、文と文を結合したりするなど、文法的役割を果たす語で、接続詞や助詞などがこれに当たる(河上 1996:204)。

以上の理論的な背景を、分析に先立って概観することにする。

2.2 複文について

本稿では、便宜上、「複文」という表現を用いることがある。しかし、そもそも「複文」とはどのような文を指しているのであろうか。野田他(2002:5-10)によると、複文とは単文の中の一部が拡張するとき、その部分が節になった文としている。では、節とは何かというと、述語を中心とした格成分のまとまりからなる部分である。ただし、単文と複文は、文として本質的に違うものではなく、単に、文に近い形をしている部分を含んでいるかどうかの違いであると指摘している。例えば次の二つの例で例(1)は単文、例(2)は複文とされる。

(1) 渋滞でバスの到着が遅れた。(野田他 2002:6 の例(21))

(2) 高速道路が渋滞していたために、バスの到着が遅れた。(同 2002:5 の例(18))

そうすると、次の例(3)は単文、例(4)は複文ということになる。

(3) 散歩がてら、郵便局へ行った。

(4) 散歩しがてら、郵便局へ行った。

例(3)と例(4)の違いは、「する(し)」がついているかどうかということである。この点は同書でも以下の例で取り上げられている。

(5) 彼女は夏にはサーフィン、冬にはスキーをする。(野田他 2002:10 の例(44))

(6) 彼女は夏にはサーフィンをし、冬にはスキーをする。(同 例(45))

例(5)の「夏にはサーフィン」という表現の中に述語がないため、単文とみなされやすく、例(6)は述語があるため複文とみなされやすいとしている。単文と複文は連続していて、もっとも基本的な単文らしい単文から、複文らしい複文まで様々な段階があり、連続していると考えるのがよいとしている。本稿もこの考え方が妥当であると考え。例えば「がてら」は例(3)、(4)のように名詞、動詞両方に接続する場合があります、単文か複文かと分類することはできない表現である。むしろ、野田他(2002:7-8)で「単文と複文の分類にはそれほど大きな意味はない」と考えられる表現である。この連続性は、次項で詳しく取り上げる「従属句の段階性」の、句的な構造からより文的な構造へという流れにも引き継がれていると

思われる²。以上を鑑み、本稿では、(典型的には複文的な形式で表されるが)単文か複文かの違いにとらわれず、分析対象語を含む文全体としての意味を記述する。なお、後章での分析の際には、文の中で分析対象語を含み、意味的にまとまっている先行部分を「前件」、後続する部分を「後件」と呼ぶことにする。

2.3 従属句分類³

日本語の文の階層性については多くの先行研究で盛んに議論されてきた⁴。中でも、日本語の従属句の階層性とその特徴をまとめあげた南(1993)は、従属句全般について、段階的な一般的特徴を形式的な面から明らかにしている。南は「従属句」について次のように述べている。

なんらかの点で、またなんらかの程度で「文に似た部分」(文に近い構造を持っている部分)が、一つの文の中に現れることがある。これにはさまざまなものがあるが、ここでいう「従属句」もそれに含まれる(南 1993:74)。

そして、その範囲として次の三形式を対象としている。

- I 末尾が用言(または助動詞)の連用形で終わっているもの。
- II いわゆる接続助詞で終わっているもの。つまり、ガ、カラ、ケレド(モ)、シ、タラ・ダラ、テ・デ、テハ・デハ、テモ・デモ、ト、ナガラ、ナラ、ノデ、ノニ、バなどで終わるもの。
- III 形式名詞、たとえばアゲク、タメ、トコロ(トコロガ、トコロデ)などで終わるもの。

以下、従属句の分類方法と、それぞれの段階で表される特徴を見ていこう。

² 南(1964:88)は、従属句のA類、B類、C類という段階性について、「文に近い性格をもったものを含む文」を複文とするならば、C類は間違いなくそれに当たるが、B類はそうとは決められず、A類に至ってはむしろ連用修飾語に相当するのではないかという考えを述べている。A類を「語」と同列に扱うことが妥当なのかどうかはともかく、語から文らしきものへ発展する中間的な段階であることは確かである。

³ 南の言う「従属句」は「従属節」に相当するが、本稿では特に必要のない限り、「従属句」という呼称を踏襲する。

⁴ 従来の研究のあらましは南(1993:21-52)に詳しい。

2.3.1 従属句の分類方法

南(1993:242-246)は文の構造を4つの段階に分類し、それぞれの性質を次のように記述している。

描叙段階

言語表現の内容として取り上げられる対象となるものごと自身、ものごとの動き、状態、属性、程度・量、ものごととの間の関係などについての情報が処理される段階。それらはすべて抽象的、一般的な枠組みとして扱われるのであって、つぎの判断段階で問題となる内容特性、たとえば定／不定、個別／一般、確定／未定、実現／非実現の対立(選択)はまだ問題にならない⁵。

判断段階

描叙段階の内容のさまざまな面(①主格と述語の区別と関係付け。②定／不定、個別／一般、確定／未定、実現／非実現の選択。③空間・時間的限定。④特定／不特定／一般的問題化。⑤認定根拠、認定条件(順接、逆接)、原因・理由、認定のしかた(断定、推定)の選択。⑥各種の強調、評価を含んだ表現)について認定する。

提出段階

描叙、判断段階の処理を経てきた内容に対する主体の態度を示す。

表出段階

実際のコミュニケーション行動、そのコミュニケーションへの参加者に関わる程度が大きい。提出段階と同様、言葉の外側の世界の実態と直接的な関係を持つと考えられるが、提出段階とは異なり、即時処理が可能である。

この階層性を明らかにするために、南はまず従属句内部の述語と各成分との共起関係から従属句を3つに分類し、A類、B類、C類とした。そしてそれらは一般的な文の構造上の段階(階層)を反映しているものと考えた(1993:44-45)。つまり、描叙段階の性質は従属句A類の性質から、判断段階の性質は従属句B類の性質から、提出段階の性質は従属句C類の性質から導かれたものである⁶。

⁵ 存在／非存在(欠落)はこの段階で問題になるが、これは肯定／否定の対立ではないとしている。

⁶ 表出段階は従属句の内部の構成要素としては現れない要素に関わる段階であって、相手に対する働きかけ、感情・感覚の直接的表現である(南 1993:44-45)。

分類手順は次の通りである。まず従属句の内部構造を「要素」と「成分」に分けて、その内部要素の現れ方に基づき従属句をA類、B類、C類というように段階的に分類した。「要素」とは、従属句内の述部内部の構成要素であり、「成分」とは、述部そのものや、その他の各修飾語などを表す。南は段階と構成要素を次の表1のとおり示している⁷。

⁷ 南はさらに構成要素を細かくした実例分析の結果、この表の結果にいくつか修正を加えている。中でも大きな修正点と考えられるのは、場所的修飾語がA類の句にも現れていると指摘していることである。他に次の点が指摘されている。

- ① B類に現れないのは<主題>の～ハで、その他(<対比>など)の～ハはB類に現れることができる
と予想していたが、どんな～ハもB類に現れることがすくないこと。
- ② ～ハがC類に多く現れること、また～ガはC類にもある程度まで現れるが、B類に集中的に現れる
結果は予想以上に顕著だったこと。
- ③ 時間的修飾語はB類よりもC類で多く現れる傾向が顕著であったこと。
- ④ A類で現れる成分は語順の点では述部に近く(N+ヲ、状態副詞など)、ついでB類ではじめて現れる
成分(N+ガなど)、そしてC類で現れる成分(陳述副詞など)と述部から離れる。
- ⑤ 状態副詞はA類の句に集中的に現れる。一方、程度副詞のA、B、Cの3類の句における現れ方
はかたよりが無い。
- ⑥ ～ナガラ<非逆接>に、主格とされる成分が現れている例が少数ながらあった。

表 1

構成要素	述語的部分以外の成分											述語的部分の要素 ⁸												
	C類従属句	タブン・マサカの種類	ハ(提題)	B類従属句	評価的意味の修飾語	ジツニ、トニカク、ヤハリの類	時の修飾語	場所の修飾語	ガ主格など	A類従属句	程度副詞	状態副詞	名詞+他格助詞	ニ	ヲ	動詞	ク(サ)セル	ク(ラ)レル	授受の形	尊敬の形	マス	ナイ	マイ、ダ	ダロウ、ウ・ヨウ
従属句																								
A ~ナガラ<平行継続>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	
~ツツ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	
~テ1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	
連用形反復	-	-	-	-	-	-	-	-	-	⊕	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	-	
B ~テ2	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	
~ト	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	
~ナガラ<逆接>	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	+	-	-	
~ノデ	-	-	⊕	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	
~ノニ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	
~バ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	
~タラ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	
~ナラ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	
~テ3	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	
~連用形	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	-	
~ズ(ズニ)	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	⊕	-	-	-	-	
~ナイデ	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	-	-	
C ~ガ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
~カラ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
~ケレド	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
~シ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	
~テ4	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-	-	

⁸ 南(1993:97)で示されている要素の判断について、南氏は私信により以下の修正をしている。本稿ではこの修正を反映したものを記載した。

修正点1. B類の「~ナガラ」の要素「~マス」は空欄だったが、「-」判断。

修正点2. B類の「~ノニ」の要素「尊敬の形」は「-」だったが、「+」判断。

⁹ 陳述副詞のいくつかのもので、オソラク、タブン、マサカ、ヨモヤなど(南 1993:90-91)。

¹⁰ 陳述副詞の一部で、ケッシテ、ロクニ、ジツニ、トニカク、ヤハリ、モシなど(南 1993:91)。

従属句分類によって示された各段階の特徴はかなり抽象度の高いものであるが、それでも、各類に属する表現形式に共通して内在する意味と捉えることができるだろう。このように、語のレベルにとどまらず、ある言語的まとまりを一つの意味を持つ単位として捉える考え方は、取りも直さず、語(lexicon)と文法(grammar)は連続的だとする認知言語学の言語観と共通している¹¹。

2.3.2 A類従属句とB類従属句について

本稿で分析対象としている複文表現の意味に関わってくるのはA類とB類である。この2つの段階の違いについて、さらに南(1993)の記述を引用する。

描叙段階と判断段階について考えられる問題として、言語研究(とくに文法の研究)でしばしばいわれる「命題」(proposition)との関係がある。格文法の研究において、C.J.Fillmoreは、文の基本的な構造を modality と proposition からなるものとして、proposition を a tenseless set of relationships involving verbs and nouns と述べている¹²。ただ、時以外の点に関しての限定(非限定)の問題については明らかではない。益岡隆志も、文の基本的構成を命題・モダリティの2つの要素の結合としているが、～ナイ〈否定〉や～タ〈時制〉はそのどちらに属するか分らない、という(益岡 1987)¹³。Fillmoreのように tenseless ということを1つの基準にするならば、ここでいう描叙段階の構造を命題と呼ぶことになる。そして、判断段階は「命題以後の構造」とでもいうことになるだろう。一方、判断段階を命題とするならば、描叙段階は「命題以前」である。言語表現の構造が、もともと論理学で用いられてきた命題の概念にぴったりあてはまる性格を持つものかどうか

¹¹ 統語的樹形構造(syntactic tree structures)の末端に語が当てはめられていくという従来の考え方に対して、Langacker(2008:18-19)は、例えば慣用句のように、語(item)がいくつも連なって一つの意味単位を成し、独自の意味を持つようになるということを述べている。従属句も複数の語から成るという点では類似しており、各類で抽出された概念的特徴というのも意味に相当すると考えられる。

¹² Fillmore(1968:23)は次のように述べている。

In the basic structure of sentences, then we find what might be called the 'proposition', a tenseless set of relationships involving verbs and nouns (and embedded sentences, if there are any), separated from what might be called the 'modality' constituent.

文の基本的な構造においては、「命題」と呼ばれる、動詞と名詞(及び、あるとすれば埋め込み文も)を取り込んだ関係の、無時制的集合が認められ、「モダリティ」要素と呼ばれるものとは分けて考えられる。(日本語訳は引用者による)

¹³ ただし、この点について益岡(1997:90)は「テンスを命題レベルに属するとみなす」というように修正を加えている。

は、筆者にはよくわからない。が、しいて命題ということばを使い、またその内容を常識的な意味での論理学の用法になるべく近づけるならば、ここでいう判断段階の構造の方がより適当ではないかと、筆者は考えている。そのおもな理由は、主語(主項)と述語(述項)の分化と結合がはっきりした形になっていること、各種の(ここでいう内容特性で特徴付けられるような)認定作業が行われること、そして各種の条件が示されることである。(下線は引用者による)

この記述を見るかぎり、南は文の基本的構成を成す「命題」は、描叙段階ではなく判断段階であるとする立場をとっている。では、「命題」とは異なる「命題以前」とはどのようなことを指しているのであろうか。南はこの点については言及していない。そこで、南の「文の構造の段階性」とは次元の異なりがあるものの、その4つの段階性(描叙段階、判断段階、提出段階、表出段階)に対応する益岡の「文の概念レベル」の考えを援用し、A類従属句の性質について考えてみたい。

益岡(1997:79-80)は、文を客体としての対象にかかわる概念の領域に、主体にかかわる概念の領域が加わって成立するものと見ている。この二つの領域をそれぞれ「対象領域のレベル(命題のレベル)」、「主体領域のレベル(モダリティのレベル)」¹⁴としている。「対象領域のレベル」はさらに、「事態の型の命名レベル(事態命名のレベル)」と「個別的現象のレベル(現象のレベル)」に分けられており、前者が南の描叙段階、後者が判断段階に当たる。そして、その区別の指標は「テンス」であると明言している。

「事態命名のレベル」と「現象のレベル」を区別するわかりやすい指標は、「テンス」の関与・不関与である。特定の時空間での事態の実現を捉える「現象のレベル」の方には「テンス」が関与するわけである(p.81)。

このテンスの扱いについては、南の従属句分類によっても述語部分の要素として「～タ・ダ」はB類以降にならないと現れないことが導き出されていて、共通した考えであると言える。ただし、南が描叙段階の文の成分として現れないとしたガ格は、益岡では、事態命名のレベルから現れるとされる(pp.88-89)。両者を比較すると表2のようになる。

¹⁴ 「主体領域のレベル」はさらに「判断のレベル」と「表現・伝達のレベル」に分けられる。前者は事態に対する表現主体の判断を表し、後者は、ある事態及びそれに対する判断を表現・伝達するという主体の発話行為にかかわるものである(益岡 1997:81)。

表 2

南	文の段階性 (従属句分類)	描叙段階 (A 類従属句)	判断段階 (B 類従属句)	提出段階 (C 類従属句)	表出段階
	基本的構成 ¹⁵	命題以前	命題	モダリティ	
	テンス	関与しない	関与する		
	ガ格について	現れない	現れる		
益岡	文の概念レベル	事態命名 レベル	現象 レベル	判断 レベル	表現・伝達 レベル
	基本的構成	命題		モダリティ	
	テンスについて	関与しない	関与する		
	ガ格について	現れる			

南と益岡の考えの争点となるガ格についてであるが、これは描叙段階を完全に A 類従属句に対応させようとするため生じるものであろう。確かに、描叙段階の性質を持った A 類従属句にはガ格は現れないということは南によって実証されており、すでに表 1 で示した。しかし、従属句ではなく、描叙段階の文であればガ格出現の可能性があるのでないだろうか。南(1993:142)で次のように記述されている。

描叙段階の内容面に関する、もう一つの特徴をあげる。それは、この段階には、それ以外の判断段階、提出段階、表出段階にくらべて、相対的な意味で、いわば非限定的(一般的)な性格が見られるということである。ここで(内容面についての)限定というのは、つぎのような意味である。たとえば、「子ども」と「遊ぶ」という 2 つの語彙項目を単に結びつけただけの構造(?)を考えるとすれば、つまり、「子ども遊ぶ」という形だが、それは<子ども>という対象と<(おそらく、子どもが、あるいは子どもと)遊ぶ>という動作からなる内容を漠然と指定するだけである。それを、子どもが遊ぶ、子どもと遊ぶ、子どもヲ遊バセルなどとすれば、その内容がそれなりに限定されて、はっきりしてくる。(子ども=動作の主体、子ども=動作の共同者など)。ただ、ここで考えている描叙段階の構造に参加する要素、成分の範囲から考えると、描叙段階の内容についての限定は、おおざっぱに いってそのあたりのところまでである。(下線は引用者による)

¹⁵ 「基本的構成」という術語は、先に引用した南(1993:243-244)を踏襲したものである。

南は文の階層性を考える際に、まず、従属句の階層性を明らかにし、そして、その性質と対応する形で文の4つの階層性を導き出した。表2を見るとわかるように、南はもともとA類従属句の成分としてはガ格を認めていなかった。ところが、描叙段階の文にA類従属句の性質を反映させる段階で、この記述を見る限り、「子ドモガ」というガ格を認めている。描叙段階でのガ格の使用を容認しているということは、結局、「文の概念レベル」で考えている益岡と、同じ結論に至るということになる。すなわち、A類従属句と描叙段階の文は、性質の面では共通するものの、ガ格が現れないという特徴はA類従属句にしか見られないものである。以上から、A類従属句の性質を判定する形式的な基準は次のように考えられる。

- (7) ガ格をもたない。
- (8) 時空間(テンス)を特定しない。

これはA類従属句の意味が顕在化した形式的特徴であると考えられる。すなわち、主体もテンスも主節に依存している。A類従属句の部分に限ってその表す内容を考えると、主節の主体を念頭に置いた、話者の概念上の事柄ということになる。このことから、A類、B類従属句を成分としてもつ各複文表現の意味は、次のような趣旨の記述で示されると予想される。

- (9) A類従属句を含む文：話者が、主節で表される具体的な事態や行為を、自身の概念上の事柄とどのように関連づけているか。
- (10) B類従属句を含む文：話者が、主節で表される具体的な事態や行為を、別の具体的な事態や行為とどのように関連づけているか。

2.4 カテゴリー観

人が日々の生活で実際に認識する行為事例には、当然のことながら、まったく同一の事例というものはない。しかし一方で、複数の具体事例に何らかの共通性を見出し、それらをカテゴリー化して捉えようとする。

Whenever we intentionally perform any *kind* of action, say something as mundane as writing with pencil, hammering with a hammer, or ironing clothes, we are using categories.(...)that is, it is in a particular category of motor

actions. They are never done in exactly the same way, yet despite the differences in particular movements, they are all movements of a kind, and we know how to make movements of that kind. (Lakoff 1987 ch. I)

われわれが、意図的に何かある種の行為を行う場合は、例えばそれが鉛筆で書いたり、金づちで叩いたり、衣服にアイロンをかけたりするようなありふれた行為であっても、例外なくカテゴリーを働かせているのである。(略)つまり、その行為は、様々な運動行為の中のある特定のカテゴリーに属している。これらの行為がまったく同じように繰り返されることはないが、細かい動きの違いにもかかわらず、みなある同一種の動作であり、われわれはその種の動作をどのようになすべきかを心得ている。(池上他訳(1993:6))

以上のカテゴリー観に従い、本研究は、分析の対象としている各類義表現は、「目的」や「付帯状況」という意味的なカテゴリーの成員であるという見通しに立つ。しかし、「目的」を表すいくつかの複文表現のうち、「～ために」がもっとも想起されやすいというように、カテゴリーの成員の地位は同等ではなく、その内部は、プロトタイプとよばれる典型事例を中心に放射状に広がるカテゴリーと考えられる。さらに、「～ために」や「～ながら」といった表現で表される意味ですら一つのカテゴリーで、その用例間にも典型性の差があるだろう。そして、そういったカテゴリーの成員に共通する意味特徴(スキーマ)こそが本研究で目指すべき意味と考える。以下では、このようなプロトタイプ・カテゴリーと、抽象的な共通性について見ていく。

2.4.1 プロトタイプ・カテゴリーの特性

カテゴリーは必要十分条件の集合によってその成員が決定づけられる、という古典的なカテゴリー観への代案として、Wittgenstein(1953)の「家族的類似性」によるカテゴリーや、Berlin and Kay(1969)の色彩カテゴリー、Rosch(1978)のプロトタイプ理論と基本レベルカテゴリーなどが提唱された。プロトタイプ理論の言うところのプロトタイプとは、あるカテゴリーのもっとも典型的な成員である。例えば、(英語圏の一部など)ある共同体においてコマツグミはニワトリ、ペンギン、ダチョウに比べて、もっとも鳥らしい条件(例えば、<羽毛がある><翼がある><足が 2 本ある><くちばしがある><卵を産む><空を飛ぶ>などを備えていると考えられ、「鳥」のカテゴリーの典型と判断される。しかし、ペンギ

ン、ダチョウなどはそういった条件を十分に備えておらず、鳥カテゴリーの周辺の成員と認識される。つまり、鳥のカテゴリーの成員はプロトタイプの成員を中心に段階的にカテゴリー内に位置しているのである。しかし、カテゴリーの成員というのは、ある生物個体が厳密な境界をもって鳥のカテゴリーに属する、というように峻別されるものばかりではなく、境界がはっきりしないものもある。そのような、境界が曖昧なカテゴリーにもプロトタイプの存在を見出した Labov の実験について見てみよう。

Labov(1973)は、家庭で用いられる容器が、カップ(cup)、マグ(mug)、ボール(bowl)、花瓶(vase)というようにカテゴリー化される要因について、興味深い報告をしている。以下、実験の詳細が紹介されている Taylor(2003³ 辻他訳 2008:78-86)を要約して引用する。まず、実験は、いくつかの異なる形の容器の絵を被験者に見せ、その名前を言わせていく手法をとった。結果、丸い水平な断面を持っていて、底に向かって細くなり、一番幅の広い部分(直径)が深さに等しく、取手がついている容器は、すべての被験者がカップと呼んだ。しかし、口が広くなり、深さに対して幅が広くなればなるほど、被験者は対象をボールと呼ぶようになった。つまり、両カテゴリー間に明確な境界線がないのである。また、形状だけでなく、容器の内容物によってもカテゴリー化に影響が生じるとされる。コーヒーで満たされていると考えればカップという反応が増え、マッシュポテトが容器に入っていると考えればボールと判断する人が増えたと言う。この実験から、次の点が主張されている。

- ① それぞれのカテゴリーには、それと認められる最適な幅と深さの範囲が存在する。
- ② そのカテゴリーの属性は、対象自体の内在的な性質と関係しているのではなく、特定の文化の中におけるその対象の役割と関係する。
- ③ あるカテゴリーと別のカテゴリーを区別するために必要不可欠な属性ないし属性集合は存在しない。

①によって、様々な事例をカテゴリー化する際の参照点となるプロトタイプの存在が認められる。②からは、意味というのは、その対象自体の属性ではなく、それを解釈する人の捉え方であると言える。③はカテゴリーとカテゴリーの間に明確な境界線が存在するものばかりではなく、カテゴリーの周辺部分が曖昧である場合があるということを示している。ここで挙げた Labov の実験は物体のカテゴリー化に関するものであったが、物体ではなく、対象に対する人の評価というものも曖昧にカテゴリー化される。舩山(2006:160-161)は、ある書き物を、「論文」と見なすか、「報告」と見なすかというカテゴリ

一化について論じている。例えば、「学術的な研究に値するテーマを取り上げている」「独自の明示的な仮説が提示されている」「仮説が適切に検証されている」といった条件をより満たしているものは、ほとんどの人が「論文」と認めるが(プロトタイプの論文)、そうではないものは「論文」のカテゴリーでも周辺に位置づけられるか、「報告」のカテゴリーに入れられる。いずれにしても、両カテゴリーの間に明確な境界はないということがわかる。

以上のように、カテゴリー化は人の活動全般において、ごく自然に行われていることがうかがえる。同様にして、複文を用いて話者が何を伝えようとしているのかという、伝達意思にもカテゴリー化が適用されると考えられる。この見方が妥当であるということ、本稿での各表現の分析を経たのち、改めて議論をする中で確認していきたい。

2.4.2 スキーマ

前項ではプロトタイプによるカテゴリーを取り上げた。これはカテゴリーの中心性、すなわち成員がカテゴリー内でどのような位置にあるのかを考えるものである。続いて、カテゴリーの構造を特徴付けるスキーマについて見ていく。Langacker(1987:371)はプロトタイプとスキーマについて以下のように述べている。

A prototype is a typical instance of a category, and other elements are assimilated to the category on the basis of their perceived resemblance to the prototype; there are degrees of membership based on degrees of similarity. A schema, by contrast, is an integrated structure that embodies the commonality of its members, which are conceptions of greater specificity and detail that elaborate the schema in contrasting ways.

プロトタイプはカテゴリーの典型例であり、他の例はプロトタイプとの知覚上の類似に基づいてカテゴリーに同化される。つまり、類似性の度合いによって、さまざまな段階の成員性が存在するわけである。それに対して、スキーマは、それが定義するカテゴリーのどの成員にも当てはまる抽象的な特徴付けである(したがって、成員性に程度は関わってこない)。スキーマは成員の共通性を取り入れた統合構造であり、成員はそれとは逆のやり方でスキーマを精緻化した、より特定の、詳細な概念である。(日本語訳は Taylor(2003³ 辻他訳 2008:115)による)

カテゴリー形成の一例を見てみよう。Langacker(1987:374)は、人が *tree* のカテゴリーを形成していく過程を以下のように図示している。

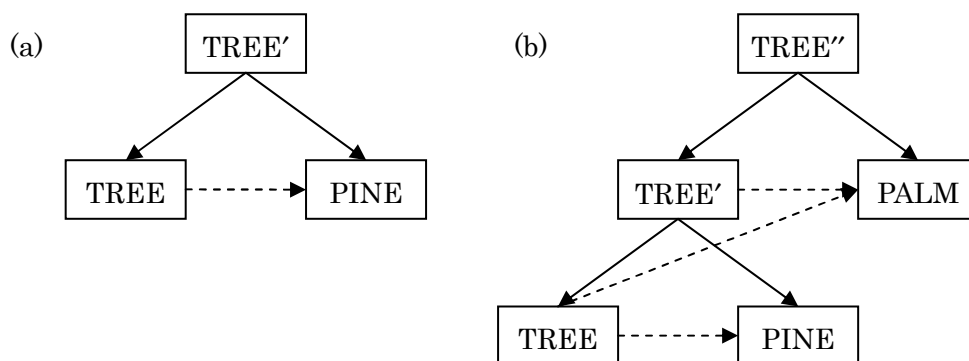


図 1

言語習得過程にある子どもは、大きくて落葉性の葉のついた植物の具体例に共通する部分(スキーマ)を抽出する。これがプロトタイプとして想定される([TREE]/[tree]¹⁶)。その後、初めて *pine* を目にしたとしよう。*pine* は広葉を持たないなど、[TREE]と完全には両立しない特性があるものの、プロトタイプとの類似性に基づいてこのカテゴリーと結びつけられる。そのとき、真ん中に高い幹があり、そこに枝がついているといった、[TREE]と[PINE]との共通点を表示する[TREE']という別のスキーマが抽出される(図 1 (a))。さらに、*palm* を目にした子どもは[TREE']との間で同じ操作を繰り返して[TREE'']という別のスキーマを抽出する(図 1 (b))¹⁷。このように、スキーマはプロトタイプと相補的に、カテゴリーを形成する上で重要な役割を担っている。本研究における「目的」「付帯状況」といった、言わばカテゴリー名の実質的な意味は、このような手法によって詳述されるものであると考える。

2.5 意味分析の方法論

本研究で分析対象としているような、機能語と呼ばれる文法形式も語(lexical items)と同様、意味の記述が可能であると考えられる。Langacker(2008:22-23)は、文法形式は意味的に内容が乏しいと考える伝統的な見方に対し、語と文法的標識(grammatical markers)¹⁸で

¹⁶ 意味と音韻の結びついた言語単位を表す。[TREE]は意味極、[tree]は音韻極である。

¹⁷ [TREE]からの関連づけの可能性もあり、図中の[TREE]から[PALM]への点線で示されている。

¹⁸ 例として、英語の *for, to, at, like* などの前置詞、*may, can, will, shall, must* などの法助動詞、*someone*,

は、後者のほうが次第に抽象度は高くなるものの、どちらも十分な意味を持っているとしている。日本語研究においても、同じように文法形式に意味を認める立場のものとして、服部(1968)、國廣(1982a)が挙げられるだろう。ここで示されている方法論は、本稿の意味分析にも適用できると考え、以下、その方法について見ていく。

2.5.1 文脈的作業原則

服部 (1968:4-5)は意味の分析方法を立てる際に、まず、対象とする語が「自由形式(自立語)」か「附属語」かについて議論している。そこでは、附属語を、音声的に単独で発話できる点、形式的に様々な自由形式に結びつくという点で接辞と区別し、自由形式に準ずる形式としている。本稿の分析対象語は他の語に後続する形で現れ、音声的に単独で発話可能な「かたち」を有している。また、一つの語(自立語)に後続するだけでなく、格成分を含んだ従属句にも後続する。したがって、この説明に従えば、接辞とは異なり、自由形式(自立語)の一種、つまり附属語に属する。それでは、附属語の意味についてはどのように考えたらよいか。服部は続いて次のように述べている。

単語の一種と見做しうる附属語の意義も、自立語のほどははっきりしないが、上記の記号素¹⁹のそれほどではないので、仮りに「意義素」と呼ぶことにする。

(服部 1968:39-40)

つまり、自立語ほど明瞭ではないが、機能語にも何らかの意味(意義素)があるということである。以上を踏まえて、語義の分析作業原則として次の二つを挙げている(服部 1968:62)。

- I 同じ自立語と同じ統語型・文型によって統合される自立語は同じ語義的意義特徴を共有する。
- II 互いに統合され得る自立語は、互いに呼応する語義的意義特徴を有する。

國廣(1982a:202-204)では、Iを「同位置の作業原則」と、IIを「呼応の作業原則」と略称している。以下に英語の動詞 *shed* についての分析例を挙げる。ここでは〔主語＋動詞＋目的語〕という文型で次のような語と共起するとしている。

anywhere, everybody, whatever, who といった不定代名詞、及び *be, do, of* 不定詞 *to* を挙げている。
¹⁹ 服部は従来「形態素」と呼ばれていたものを「記号素」という名称で呼んでいる。具体的には、/saku/(咲く)の/sak/と/u/、/ciru/(散る)の/cir/と/u/のように、単語より小さい単位を指している。

- (11) A tree *sheds* its leaves. <木は葉を落とす>
- (12) A stag *sheds* its horns. <シカはツノを生えかわらせる>
- (13) A snake *sheds* its skin. <へびは脱皮する>
- (14) A crab *sheds* its shell. <カニは殻をぬぐ>
- (15) A hen *sheds* its feathers. <ニワトリは羽を生えかわらせる>
- (16) A flower *sheds* its petals. <花は花びらを落とす>
- (17) A person *sheds* his hair (skin).

<人の髪は抜けかわる(皮膚はあかとなって取れる)>

まず、同位置の原則により、*shed* の動作主体は<成長物>であることがわかる。そして、対象物全体に見られる共通の特徴は<主語に来る成長物の本体の一部をなすもの>である。さらに、場面の観察により、一部の離脱は動作主体の成長の自然な一過程であり、本体に何の傷も欠損も負わせないということがわかる。また、離脱したものは不要となっているが、離脱後、同じものが再生されてくる。これらが同位置の原則に基づいた意味特徴である。そして、呼応の作業原則により、主語、目的語にそれぞれ認められた特徴は動詞の意味特徴の一部を構成し得ることになる。これらの意味特徴のうち、どこまでを意義素として認めるかを定める基準は社会的文化的に妥当かどうかとしている。

この二つの原則は分析対象を自立語に限っているように感じられるが、服部は自立語、附属語に関して、以下のように述べている。

「自立語」というのは「自立語と附属語と結合した自立形式」でもよいが、自立語2つ以上から成る自立形式は、パロルの要素が多くなるから除外される。

(服部 1968:62)

つまり、本稿で扱う [自立語+機能語] という形式は「附属語と結合した自立形式」に当たるため、この二つの作業原則を適用することが可能ということがわかる。この作業原則による分析によって、その形式が持つ意味の大まかな特徴をつかむことができるだろう。

2.5.2 対照的作業原則

ある語の意味を分析しようとするときに、その語のみを対象とするのではなく、意味・用

法がわずかにずれていると感じられる他の語(類義表現)と比較対照して分析しようとするのがこの作業原則である。対比語を見つける手段として国広は「直感」と「文脈的同義」²⁰を挙げている(國廣 1982a:242)。適当な類義表現が見つかったら、具体的な比較作業を行う。そこでは、一方の語は用いられるが、他方の語は用いられないという「対照的文脈」を見つけ出す。それにより、意味特徴が浮き彫りになってくるのである。また、対照する二語の間の意味の差がすでに直感的に感じられているときは、そのずれを浮き彫りにするような文脈を特に考案する方法もある。国広はその具体例として「ニギル」と「ツカム」を取り上げている。以下に引用する(pp.242-243)。

「ニギル」は「ぐっと圧力を加える」感じで、「ツカム」は「手をさっと伸ばしてとらえる」のような感じがあると思われたならば、次のような対照的文脈を作って、その点を確認することができる。

(18) ニギリしめる。

(19) ×ツカミしめる。

(20) ×ニギリかかる。

(21) ツカミかかる。

本研究では、この作業原則に沿って分析することで、類義表現(文脈的同義)間の意味的な違いを浮き彫りにすることができると思う。

2.6 本章のまとめ

この章では、次章以降で行う各表現の意味分析の前提となる理論的背景を概観した。要点をまとめると次のようになる。

- ① 文、節(句)には形式的な段階性がある。
- ② 各段階に特徴があり、それは意味を記述する上での枠組みとなる。
- ③ カテゴリーは必要十分条件で明確に区別されるものばかりではなく、カテゴリー間の境界が曖昧な場合もある。

²⁰ 國廣(1982a:173-174)では次のように定義されている。

「同義」には「一般的同義」と「文脈的同義」が区別される。「刷ル」と「印刷スル」はほとんどすべての文脈で同義であるが、「ミル」と「診察スル」は「医者が患者ヲー」に類する文脈でのみ同義である。これを「文脈的同義」と呼ぶ。

- ④ カテゴリーの成員は均質ではなく、プロトタイプ的な成員を中心に段階的に位置している。
- ⑤ 機能語も有意味な語であり、カテゴリーを成している。
- ⑥ 文脈的作業原則、対照的作業原則は機能語の意味分析にも有効である。

このような考えをもとに、分析を始めることとしたい。

第3章 「目的」を表す複文表現

3.1 はじめに

いわゆる「目的」を表す複文表現の基本的な形式としては「ために」「ように」「に」がある(日本語記述文法研究会編 2008:233 以下「研究会」と略記)。本稿では一貫して「同一主体の動作、状態」とされる表現を分析対象としているため、この三表現のうち、主語を同一に限定しない「ように」は分析対象から外すこととする。

第一のテーマとして、後件を移動動詞に限定した「～ために」と「～に」について論じ、両表現固有の意味を記述する。また、「～ために」に関しては、同形式で「原因・理由」(以下「原因」)を表す用法もあることは注目すべき点である。「目的」と「原因」との意味的共通性は先行研究でも指摘されていることであり、この観点は「目的」の「～ために」の意味を記述する上でも有用だと考え、第二のテーマとして検証する。検証を経て得られる一般的な「～ために+動詞」の意味は、先に行った「～ために+移動動詞」の形式の意味と整合するはずであり、その意味記述の妥当性を検証する。

本章の最後では、「～ために」の意味と「～に+移動動詞」の意味からスキーマを抽出し、「目的」カテゴリーを特徴付ける。

3.2 先行研究について

この節では、「目的」という語がどのように使われ、その意味範疇に入る表現としてどのようなものが挙げられているか見ることにする。

國廣(1982b:109)

ヨウが一見「目的」を表わすように見える場合も、それは間接的・消極的なものである(略)。「A タメに B」の A は、B の動作主の意志に左右され得る動作を指していることから、タメの「目的」は<積極的>なものであることが考えられる。一方 B の方にも意志動作が現れたり、あるいは目的を果たすのに役立つ状況が描写されたりするが、自然的経過を表わす表現は用いられない¹。

¹ 例として以下のものが挙げられている。

- ・この本を書くタメに山荘にこもった。
- ・×この本を書くタメに一年たった。

石川(1988:19)

「ために」というのは「自分の意志で直接コントロール出来る目的」を表わし、「ように」は「自分の意志で直接コントロール出来ない目的」を表わすと考えることが出来る。

益岡・田窪(1992:196-197)

動作の目的を表す副詞節には、「動詞基本形+「ために(は)」、「ように」、「のに(は)」、「べく」」、「動詞連用形+「に」」、等がある。

前田(1995)

主節が表わす動作や事態の「目的」を表す表現として、スルタメ(ニ)、スルヨウ(ニ)、シニ、スルノニという形式がある。(p.451)

四形式の用法には、構文・形態的な違いがいくつかあり、それが、四つの「目的」表現の意味的な違いと関わっていることを見てきた。四形式が表わす「目的」は、主節と主に関わり、表している意味も微妙に異なっている。そうした「目的」としての意味を簡単にまとめると、次のようになる。

タメニ＝同一主体による動作や、「必要だ・有用だ」という判断を表わす。述語の、目的を表わす。

ヨウニ＝ある動作の後に結果的に生じてくる事態を提示する。

シニ＝移動動作とその目的を同時に表現する。

ノニ＝必要・使用・有用を表わす述語の補語として、目的を表わす。(p.458)

研究会 (2008:233)

主節の動作を行う目的、あるいは主節の状態が存在する目的を表す従属節を目的節という。目的節に表される事態は、主節より時間的に後で成立する事態である。したがって、目的節には過去形が現れることはない。(過去形の場合は)原因・理由を表す。

以上から、目的節を形成する言語形式にはいくつかあることがわかる。ただ、主体の意志の制御性の度合い、事態生起の前後関係といった基準以外、類義表現間の違いは明確に示されていないことがわかる。特に、目的節の意味を示すのに、どの記述も「目的」という語を用いている。形式別に意味を記述している前田(1995)も然りである。しかし、そもそも

「目的」とは何かを論じた先行研究はない。恐らく自明のことと認識されているのであろう。しかし、先行研究で挙げられている通り、目的表現に属するものは複数あり、それらが完全に同一の事柄を指して「目的」という語を使っているとは思えない。この点を明らかにする類義表現との比較は次節以降検討していく。

また、「目的」以外との意味的な関連性を指摘している先行研究がある。例えば、國廣(1982b)は「～ために」の「目的」と「理由・原因」の関連性を指摘している。どちらの読みがなされるかは専ら、内容的な時間関係であるとしている(「目的」の場合は、前件が後で後件が先、「理由・原因」の場合は前件が先で後件が後)。この問題については、3.3.2で議論する。

3.3 比較・分析

ここからは、「目的」を表す代表的な表現形式「～ために」の意味を記述することを第一の目的とする。前段階として、形式を「～ために＋移動動詞」に限定して、類義表現「～に＋移動動詞」との比較を行い、その形式での意味を記述する。次に、「原因」の「～ために」との比較を行う。この比較によって國廣(1982b)が指摘するところの、「目的」と「理由・原因」の関連性を見出す。

3.3.1 「～に＋移動動詞」と「～ために＋移動動詞」の比較

まず、次の例から見てみたい。

- (1) 本を借りるために図書館へ行った。
- (2) 本を借りにに図書館へ行った。

(1)、(2)の前件「本を借りる」は「図書館へ行く」という移動の「目的」であり、その共通性において両表現は類義表現であると言えることができる。しかし、以下の例(3)と(4)、(5)と(6)を比べると次第に容認度に差が生じることがわかる。

- (3) 学生時代の自分を思い出すために図書館へ行った。
- (4) ?学生時代の自分を思い出しに図書館へ行った。
- (5) (読書嫌いの子どもが)親を安心させるために図書館へ行った。

(6) *親を安心させに図書館へ行った。

したがって、ひとくちに「目的」といっても、それは二つの形式が共有する抽象的意味に過ぎず、個々が持つ意味についてはさらに追究しなければならない。本研究では、このような相違点は「移動の着点」と「目的実現の確実性」及び「目的実現の要素」という点にあると論じ、そして、それを踏まえて個別的に意味記述を行うことを目的とする。まずは、従来の意味記述を概観し、その限界を指摘することから始めよう。

3.3.1.1 先行研究について

従来の、いわゆる目的を表す「～ために」の意味は、國廣(1982b)、佐治(1984)、石川(1988)、益岡・田窪(1992)、前田(1995、2006)、研究会(2008)などによって研究されてきた。これらは「動作を行う目的を表し、意志的な動作を表す動詞に付く」(益岡・田窪 1992:196)という記述に集約される。一方、「～に+移動動詞」に関しては佐治(1984)、益岡・田窪(1992)、前田(1995)、研究会(2008)などで取り上げられているが、「移動の目的を表し、主節には「行く」、「来る」、「帰る」、等の移動の動詞が用いられる」(益岡・田窪 1992:197)という記述にまとめられる。これら以外に注目したいものとして川越(2002:57)の記述がある。川越は、「「買い物に行く」「散歩に行く」はどこかへ行ってそこで買い物をする、散歩をするということであり、そこへ行ってはじめて実現する行為である」と述べている。このわずか2例に基づいた指摘であるが、本稿の結論は最終的にこの川越の見通しを実証する形で示されることになる。

形式的な面については、研究会(2008)によると、「ため(に)」は基本的に動詞の肯定の非過去形に接続するが、否定の非過去形にも接続する²。一方「に」は動詞の語基に接続し、動きを表す名詞に直接つくこともあるとされる。ここでは「動詞の基本形+ために+移動動詞」と「動詞の語基(連用形)+に+移動動詞」の形を比較の対象として扱う³。

佐治(1984:13)は両表現を比較して以下の(7)、(8)のような場合は、「～に」ではなくて、「～ために」の形によって、目的を表すのが普通であると述べている⁴。

² 否定の非過去形に接続する例としては以下のようなものがある。

・運動不足にならないために、毎日ジムに通う。(研究会 2008:234)

・「過去を繰り返さないために、何ができるか」を話し合う。(前田 1995:453 例(9))

³ 「散歩に行く」「修理に来た」といった動作性の漢語名詞、及び「スキニに行く」のように「～する」の形になり得る名詞も「動詞の語基」に含めることとする。

⁴ 前田(1995:456)も両表現の違いとして佐治(1984)の記述を引用している。また、研究会(2008)も『に』は目的節が主節のすぐ前にある場合や、身近で日常的な事態を目的とする場合にふさわしく、そうでない

(7) 文脈が込み入っていたり、目的の意を表す部分とそれを受ける移動動詞の間にある
ような成分が介在している場合⁵

(8) その目的や行為が非日常的で重大な意味を持ったものである場合

以上の先行研究による記述に対しては、少なくとも以下の点でさらに検討の余地がある。

- ① 「～に+移動動詞」で使用可能な移動動詞の規定が不十分である。
- ② 両表現の意味記述に共通する「目的」という用語の指す内容は同一か⁶。
- ③ 目的が重大か否かという、程度の問題が、両表現を使い分ける指標となり得るか。

まず①の問題についてであるが、益岡・田窪(1992)によると「行く」、「来る」、「帰る」、等の移動の動詞」とされ、前田(1995)においては「行く・来る」を中心とした移動を表す動詞(出かける・伺う・戻る・帰国する・(飲みに)つきあう)、研究会(2008)では「主節の述語が移動を表す場合には、「に」が用いられる」といった言及にとどまっている。しかし「～に+移動動詞」になる「移動動詞」とはどのような動詞を指すのか明確でないため、厳密性に欠ける。例えば後で取りあげる松本(1997)において、方向性や様態を包入(語彙化)した移動動詞とされる「進む」や「泳ぐ」、そして文字通り移動を表す「移動する」などは、この形式をとりにくい⁷。

(9) ?大晦日の門前町は、お参りしに境内の方へ進む人で溢れている。

(10) ?溺れている人を助けに泳いだ⁸。

(11) ?もうすぐバス停に着くので、料金を払いに移動する⁹。

場合には『ため(に)』が用いられる」(p.236)と述べているが、これも同様の記述と考えられる。

⁵ 庵他(2000:216)も、両者の違いとして、「～に+移動動詞」の方は、前件と後件が密接に結び付いたひとつなぎの動作のように扱われるため、前件と後件の間に他の要素が入ると不自然になると述べており、以下の例文を根拠に挙げている。

・昼食を{○食べるために/ ?食べに} わざわざ出かけた。

確かに、「釣りに行く」「買い物に行く」といった表現は慣習的に一つの固定した表現として使用されるが、「アジを釣りに御前崎沖まで船で行った」という表現も十分許容される。

⁶ 國廣(1982b)、佐治(1984)、前田(1995)、研究会(2008)は、後件が意志動詞ではない場合(「ある」「要る」)の<存在理由>の用法についても触れている。

・道標は道を知らせるためにある。(佐治(1984:15)の例)

この問題は3.3.2.3で検討する。

⁷ ニ格で着点を表さない「泳ぐ」は移動ではなく、移動の様態を表すとする主張もあるが、本稿は松本(1997:143)の、「様態を包入した移動動詞」という規定に従う。脚注8参照。

⁸ ただし、「溺れている人を助けにボートの転覆地点まで泳いだ」のように着点を明示すると自然な文になる。これは、本来方向性を持たない「泳ぐ」という動詞が方向性を獲得することに起因すると思われる。方向性に関しては次に取り上げる。

したがって、どのような「移動動詞」が「～に+移動動詞」を形作るのかという点について、さらに検討して規定する必要がある。

次に②に関しては、両表現の意味を説明するのに「目的」という用語が先行研究で多く用いられている。しかしながら、その内実に目を向けた研究は管見の限り見当たらない。

「移動」は「動作」の一つであるため、先行研究のように「目的」という、同一の用語で両表現の意味を記述すると、後件を同じ移動動詞で揃えたとき、両文の表す事態は一致することになる。だが、実際には、言い換えると容認度が下がる場合が数多く存在する(例えば(4)、(6)のような場合)。したがって、両表現の意味記述で言うところの目的とは、同一ではないと考えられる。

次に、③の「目的が日常的か非日常的(重大)か」という違いを使い分けの基準とする妥当性についてである。佐治(1984:14)によると、「日本へ留学しに来た」の例が、しっくりこないのは、「留学のための渡来」ということが、非日常的で重大だという、(8)の理由によるものであり、逆に言えば、日常的で軽い行為は、「～するために」で表すにはふさわしくないということである。しかし、次のような例はどうだろうか。

(12) 私は日本へ経済の仕組みを研究しに来ました。

「経済の仕組みを研究する」というのが日常的かどうかは人によって異なるだろうが、この例は自然な文であろう。となると、先の「留学する」が「～に来る」と結びつきにくいのは、そもそも「留学する」自体が移動性を含意しているからではないだろうか¹⁰。とはいえ、「～ために」の方が確かに「大仰な目的」という印象を受けるのは、やはり何らかの意味の違いを反映しているからだと考えられる。以下、移動動詞の規定と両表現の比較を行うことによって①から③の課題を解決したい。

3.3.1.2 移動動詞の規定

前節の例(9)から(11)のように、「～に+移動動詞」の形式をとる「移動動詞」は限定的

⁹ この例は人によって容認されるかもしれない。ただ、「KOTONOHA (現代日本語書き言葉均衡コーパス)」を用いて、「に移動」の形式で検索した結果、500例中、動詞に接続するものは1例のみであった。したがって、本稿では「動詞連用形+に移動する」の形式は典型的な用法ではないと判定した。

¹⁰ 前田(1995:455)は、目的節の制約として、「移動以外の動作になる必要がある」と述べている。目的節が移動動詞の場合は、次のように、目的を表さないとされる。

・帰りに本屋に寄って行こう。

移動動詞が「～に+移動動詞」の前件になれないという点は本稿も同じ主張だが、その理由については後述するように、前件行為の場所的制約によるものだと思われる。

なようである。しかし、「～ために」の方は、幅広く用いることができ、「～に+移動動詞」の形式では不自然になるものも問題なく言うことができる。以下の例は先の(9)から(11)を「～ために」で言い換えたものである。

(13) 大晦日の門前町は、お参りするために境内の方へ進む人で溢れている。

(14) 溺れている人を助けるために泳いだ。

(15) もうすぐバス停に着くので、料金を払うために移動する。

「～に+移動動詞」になり得る「移動動詞」にはどのような特徴があるのであろうか。まずは移動動詞というものについて考えてみたい。

松本(1997:128-130)は「移動」を「時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化である」としている。そして、移動には「移動物」「移動の経路」「移動の継続時間」という3つの要素が必須であると述べている。これら以外に様態¹¹、付帯状況¹²、付帯変化¹³、原因といった要素が付随して、移動(位置変化)という1つの事象複合体を形成するとされる。また経路は、基準物に対する経路関係+位置関係、及び基準位置に対する方向関係から構成されている。そして移動動詞のうち、方向性を包入した(語彙化した)と考えられるもの((16)の動詞群)と¹⁴、起点、着点、通過点といった経路あるいは基準物との位置関係を動詞内に包入したと考えられるもの((17)の動詞群)を次のように挙げている。

(16) 行く、来る、登る、下る、上がる、下がる、降りる、落ちる、沈む、戻る、帰る、
進む

¹¹ 松本(1997:141)は、英語と日本語の移動動詞の比較を通して、英語は移動の様態を動詞に包入している場合が多いが、日本語の場合は、様態は後置詞句などによって表され、むしろ移動の経路の方向性や経路位置関係を動詞に包入する機会が多いと指摘している。英語ほど多くはないが、様態を動詞に包入しているものとして、次の例が挙げられている。

様態を包入する移動動詞：歩く、走る、駆ける、這う、滑る、転がる、跳ねる、舞う、泳ぐ、飛ぶ、
潜る、流れる、急ぐ

¹² 歌いながら歩く場合の「歌う」がこれに当たるが、日本語においては付帯状況を単一形態素の移動動詞に包入することはできないと述べている(松本 1997:143)。

¹³ 付帯変化の「分離」と「付着」を包入する移動動詞として以下のものが挙げられている。

分離：取れる、ちぎれる、はがれる、抜ける、脱げる、散る、もげる、分かれる、分離する
付着：付く、くっつく、つながる、刺さる、はまる、付着する

また、これらの動詞には変化を生じさせる行為、すなわち原因をその要素に含むものとされる。根拠として、例えば「その釘は、その釘抜きでは(板から)抜けなかった」というように道具を表現できるという点が挙げられている。

¹⁴ 英語の go と come も方向性を包入した移動動詞である。例えば、They come toward us という文では移動の着点に「私たち」がいるわけではなく、移動の方向(経路の延長線上)に「私たち」がいるのである(松本 1997:136)。

- (17) 越える、渡る、通る、過ぎる、抜ける、横切る、曲がる、くぐる、回る、巡る、
寄る、通過する、入る、出る、至る、達する、着く、到着する、去る、離れる、
出発する

これを見ると、先行研究で「～に＋移動動詞」の「移動動詞」として挙げられていたものは全て(16)の「方向性を包入した動詞」であることがわかる。しかし、この動詞群が全て「～に＋移動動詞」の形式をとるというわけではなく、「下がる」「落ちる」「沈む」「進む」は「～に＋移動動詞」の形にはなりにくい。理由として、「下がる」には「もう少し後ろに下がってください」「先発ピッチャーがベンチに下がった」「出番まで楽屋に下がっていた」のような用例があるが、どれも主体の別の地点への移動というより、「起点空間に空きを作る」という意味を表すからだと考えられる。また「落ちる」「沈む」は、意志的な移動ではないということが考えられる。「進む」の場合は、他の動詞と異なり、方向性はあるものの、それはあくまで移動の過程だけを意味しているからだと考えられる¹⁵。一方、(17)の動詞群の中でも、「渡る」「寄る」「入る」「出る」は「～に＋移動動詞」が可能である¹⁶。

- (18) あの離島へは、週に1回、配達員が郵便物を届けに渡る。
(19) 病院へ行く前に、あの店へ花を買いに寄りました。
(20) 金を盗みに社長宅に入った。
(21) ごみを捨てに出たついでに新聞を取ってくる。

(18)が表すのは「離島」という着点までの海上移動、(19)は「店」という着点までの現地点(外部)からの移動、(20)は「社長宅の敷地外」から着点である「社長宅(家屋)内」までの移動、(21)は自宅から自宅外にある着点「ごみ捨て場」への移動を表す。この四語の意味は、もちろん(17)の動詞群に共通する「基準物との位置関係」に関連するが、これらの例からわかる通り、それだけでなく、移動行為の結果としての着点となる、何らかの「場所」を意味内容に含む。

以上から、「～に＋移動動詞」を形成する「移動動詞」は<ある場所から別の場所への、

¹⁵ 例えば「行く」は「行っている」の形式で、移動途中にあることを示すだけでなく、移動を終え、その到達地点に留まっている状態をも表すことができる。したがって「行く」は、ある場所への到達も意味の中に含まれていると考えられる。一方、「進む」の場合は、「進んでいる」の形で移動の途中(継続状態)にあることしか示すことができない。

¹⁶ (17)の動詞群のうち、「越える」は、山田(1982:25)が「渡る」との比較によって示しているように、<到着点>ではなく<対象の限界>に注目し、<その上を通過する>ことを示す語である。それゆえ、「～に＋移動動詞」にはなりにくい。

主体の意志的な移動(位置の変化)>に限定できる。この規定に適合する動詞群は松本(1997)のリストの中では、以下の動詞となる。

(22) 行く、来る、登る、下る、上がる、降りる、戻る、帰る、渡る、寄る、入る、出る
以上から、本稿は「～に+移動動詞」を形成する典型的な「移動動詞」を(22)の動詞群と規定して論を進めることにする¹⁷。また、「～ために+移動動詞」もこれらの動詞に限って検討することにする。なぜなら、両表現の移動動詞を揃えて比較することによって、前件と後件の関係性の違い、すなわち目的の差異を明確にできると考えるからである。

3.3.1.3 移動の着点について

ここでは、移動の着点が表現形式の意味にどのように反映されているかを見ていく。

(23) a. 男から離れるために、控室へ続く階段を降りた。(『一瞬』)

b.*男から離れに、控室へ続く階段を降りた。

(23)a の前件行為「離れる」は、(17)の動詞群に含まれていた移動動詞である。3.3.1.1でも触れたが、前件に移動の意味を含む動詞の場合、「～ために+移動動詞」の形式は可能だが、「～に+移動動詞」の形式にはならない¹⁸。まずその理由を考えることから始めたい。(23)a では、「降りる」行為の開始前に主体自身は「男」の近くにいる。そして、主体は「自分が男から離れる」という事態の実現を望み、「階段を降りる」。すなわち、「降りる」という移動そのものが前件行為を実現に近づけている。これがなぜ(23)bのように「～に+移動動詞」で表すことはできないのだろうか。このことを検討するために、引き続き以下の例と比較する。

c. 選手を呼びに、控え室へ続く階段を降りた。

後件はそのままに、前件を「(控え室にいる)選手を呼ぶ」に入れ替えると、問題のない文に

¹⁷ 「赴く」や「参る」、「伺う」等もこの範疇に含まれるだろう。前田(1995)で挙げられていた動詞「出かける」は「出る」の起点を「自宅等」に限定したものであり、「帰国する」は「帰る」の着点を「母国」に限定した動詞で、ともにこの動詞群に含まれる。「(飲みに)つきあう」といった表現については、移動性が確かに感じられるものの、それは背景化されていて、むしろ<同伴する>という特徴が中心的ではないだろうか。それから「(買いに)走る/急ぐ」といった表現も可能だが、これも移動というより、その様態に焦点が当てられている。したがって、「(飲みに)つきあう」「(買いに)走る/急ぐ」という表現は本研究の対象からは外しておく。

¹⁸ ただし、次の例のように移動した先の範囲内で完結する移動であれば可能である。

・今年の夏はハワイへ泳ぎに行こう。(「ハワイ」圏内での遊泳を表す)

なる。(23)b と異なる点は、実現を望んでいる行為が、「移動した先で果たされる行為」ということである。このことから、「～に+移動動詞」の方の目的は、移動の着点でなされる行為でなければならない、ということが想定される。もう一つ、前件が移動動詞の場合を次の例でも確認しておこう。

(24) a. 帰国するために空港へ行った。

b.?帰国しに空港へ行った。

c. 帰国する友人を見送りに空港へ行った。

(24)a の「帰国する」は主体が実現を望む行為であり、「帰国する」は「帰る」を意味的に限定した移動動詞である。そして、「空港へ行く」という移動によって作り出される主体の状況(空港内に存在する)が、「帰国する」という行為を実現に近づけるということを表している。これは(24)b のように「～に」で言い換えると、容認度が下がる。理由は(23)での比較と同じく、離脱を表す「出国」を意味に含める「帰国する」は、「空港」という、移動先で実現する行為ではないからだと考えられる。実現を望む行為が「友人を見送る」というように、「空港内」で果たされるのであれば言い換えることは可能である。

以上から、前件で示される目的部分が移動動詞の場合、その着点からの離脱を暗示するため使えないということがわかる。それでは、前件が移動動詞ではない場合はどうだろうか。同じように「移動の着点で実現される行為」でなければ「～に+移動動詞」の形式は使えないのだろうか。

(25) a. 身体を鍛えるために、藻岩山に登りました。(読売新聞、2007年10月13日)

b.?身体を鍛えに、藻岩山に登りました。

c. フクジュソウの写真を撮りに、藻岩山に登りました。

(25)a は身体を鍛えようと思っていた主体が、藻岩山のふもとから頂上までの移動に伴って生じる負荷によって、「身体を鍛える」ということを実現させようとしているのである。もちろん、(山頂など)移動の着点でトレーニング行為を行うと捉えることもできるが、通常、想起されるのは前者の方である。これを(25)b のように「～に+移動動詞」で言い換えると不自然さが残るが、「移動の着点でトレーニング行為を行う」としてなら解釈可能である。

「～に+移動動詞」の形で自然な用例としては、例えば(25)c の「フクジュソウの写真を撮

る」のように、必ず移動の着点(山腹のある地点や山頂)で行う行為の場合である。

このように考えると、次の(26)b が非文になるのも、「生きる」という行為は場所の制約を受けないからだと思われる。

(26) a. 帰郷は生活のためだった。東電や国の補償はあてにできず、働かなくては生きられない。Uターンの流れが生じた。(略)そこから生きるために戻ってる。

(AERA、2011年8月8日号)

b.*そこから生きに戻ってる。

以上の比較から、「～ために＋移動動詞」の目的には、実現の場所に関する制約はないが、「～に＋移動動詞」のについては、やはり<移動の着点で実現される>という制約がその特徴として認められる。この違いを例文の地理的設定を操作することで明らかにしよう。

(27) a. (名古屋から)富士山を見るために新幹線で東京へ行こうと思う。

b.?(名古屋から)富士山を見に新幹線で東京へ行こうと思う。

c. (仙台から)富士山を見に新幹線で東京へ行こうと思う。

(27)a では、富士山を見たいと思っている名古屋在住の主体が、「新幹線で東京へ行く」という移動によって富士山を見るということを期待している。この場合、新幹線の車窓から見る状況でも、東京の高層ビルから見る状況でも、ともに可能だが、いずれにしても目的の実現の場所にはこだわっていない。一方、(27)b の場合は、「東京に着いた後、そこで富士山を見る」という解釈がされやすい。目的の実現は不可能ではないとしても、不自然さを感じられるのは、名古屋から東京までの間には、よりはっきり見える地点があるにもかかわらず、東京を眺望に最適な場所として移動の着点にしているからである。したがって文脈として特別な事情を示さない限り容認しにくい。しかし、(27)c のように、仙台を出発点とするならば、移動先の東京は、仙台からは見られない富士山が見える最適な場所と考えられるため、容認度が上がる。

以上から、目的実現の着点の扱いについて両表現に差異があるということが確認できた。

3.3.1.4 目的実現の確実性について

ここでは、話者が「目的」を、移動を経て確実に実現されると捉えているか、あるいは実現に近づくと捉えているかという点に注目して考察する。

(28) a. 追っ手を振り切るために近くの小屋に入った。

b.*追っ手を振り切りに近くの小屋に入った。

(28)a は、「近くの小屋に入る」という移動によって「追っ手を振り切る」という、主体の望む行為が実現に近づくことを表している。しかし、「追っ手を振り切る」ということは現実問題として、例えば「息を潜める」「人ごみにまぎれる」など、動作主体の存在を消す様々な行為をいくつも試みることによってはじめて実現されることである。「小屋に入る」というのは、その目的実現に必要な要素であるとしても、その移動だけで確実視されるものではない。これを(28)b のように「～に」で言い換えることはできない。しかし、次の「金を盗む」という行為の場合、移動の着点に達すれば、その場で実現は可能という捉え方もできるため、自然な文となる。

(29) a. 金を盗むために社長宅に入った。

b. 金を盗みに社長宅に入った。(=例(20))

この例からわかるように、「～ために+移動動詞」は、移動が前件で表される行為実現には必要ではあるものの、それだけでは決定的ではないということを暗に示している。以下の例の容認度の違いもそのことに起因すると考えられる。

(30) a. アリバイを作るために、行き付けの飲み屋に寄った。

b.?アリバイを作りに、行き付けの飲み屋に寄った。

c. 元気な姿を見せに、行き付けの飲み屋に寄った。

(31) a. 一流の料理人になるために海外へ行く。

b.?一流の料理人になりに海外へ行く。

(30)a は、飲み屋への入店によって「アリバイを作る」という、主体の望む行為が実現に近づくことを示している。これは(30)b のように「～に」で言い換えると不自然になる。なぜなら、(30)c の「元気な姿を見せる」といった、主体の意志で「移動先で確実に実現できる」と考えられる行為であれば問題ないが、「アリバイを作る」というのはすなわち、「店内の人に自分の来店を記憶してもらう」ということであり、実現の成否は他人に依存せざるを得ず、不確定な要素があるからである。また、(31)a の「一流の料理人になる」という

のは、移動先の「海外」でなり得るとしても、そこで修業などを積んだ結果、到達できる境地である。ゆえに、移動を経て確実に実現できるとは考えられないため、(31)b は容認度が下がる。しかし、「海外へ行く」という移動行為は「一流の料理人になる」ことを決定づけはしないものの、少なくとも、主体の希望行為の実現に必要な要素であることは確かである。したがって「～ために+移動動詞」の形は可能である。ただし、同一の動詞を使っている、捉え方によって両形式との共起が可能な場合もある。

- (32) (白鵬の失態について某横綱審議委員が「両陛下がいらっしゃるからあがっていたんじゃないか。それだけ日本人になったということ」とコメントしたことに対して)白鵬も横綱になるためには日本に来たけど何も日本人になりに来たわけじゃなかろうに。(http://blogs.yahoo.co.jp/ketchup_pp/30907648.html)

話者は、白鵬の「日本に来た」という移動を、「横綱になる」という行為の実現に必要な要素と見ている。それと同時に否定しているのは、「日本に場所を変えることで実現可能な、日本国籍への帰化やアイデンティティの転化」という、「横綱になること」よりは実現の確実性が高い来日の目的である。(31)b の「一流の料理人になる」は容認度が低く、(32)の「日本人になる」という言い方が可能なのは、後者の方が望めば確実にできると見られる転換だからである。

このように考えてくると、最初に見た以下の用例の差異についても説明が可能となる。

- (33) a. 学生時代の自分を思い出すために図書館へ行った。(=例(3))

b.?学生時代の自分を思い出しに図書館へ行った。(=例(4))

- (34) a. (読書嫌いの子どもが)親を安心させるために図書館へ行った。(=例(5))

b.*親を安心させに図書館へ行った。(=例(6))

(33)a の「思い出す」というのは、意識的にコントロールしきれものではないため、実現を確実視することはできない。そのため、「～ために」で表すことは可能だが、「～に」では言い表しにくい。また、(34)a の「親を安心させる」というのも、いくら子どもが図書館へ行っても、他者である親の気持ちを決定づけることはできない。このように、目的として前件で表される行為が有する、実現の確実性に関わる意味的特徴は、「～ために+移動動詞」の文としては自然だが、「～に+移動動詞」としては不適切になる理由を示している。

以上の検証から、目的実現の確実性に関して、次のような相違点が見出される。すなわち、「～ために＋移動動詞」を用いる場合、移動は前件行為の実現には必要な要素ではあるものの、それだけでは実現が保証されないため、確実視はされていない。一方、「～に＋移動動詞」の方は、移動を経たその着点での、前件行為の実現を確実視しているということである。この違いは、次に観察する、「目的の重大性」ということに関わってくる。

3.3.1.5 目的の重大性について

3.3.1.1で、先行研究に関する解決すべき課題③として、「目的が日常的か非日常的(重大)か」という点を使い分けの基準となるか、と提起した。しかし、「本を借りるために図書館へ行った」(=例(1))のように、日常的な行為でも「ために」とは問題なく共起できる。逆に、非日常的(重大)な目的でも「～に＋移動動詞」が使われる場合もある。

(35) 来週は、入学試験を受けに大学へ行く予定です。

「入学試験を受ける」というのは非日常的な目的であるが、「～に＋移動動詞」の形が可能である。しかし、実際に比べてみると「～ために」の方が「大仰な目的」と感じられるのではないだろうか。その理由を次の用例が表す状況をもとに考えてみたい。

(36) a. レポートを書くために、国立国会図書館へ行った。

b. レポートを書きに、国立国会図書館へ行った。

(36)aは、主体が「レポートを書く」という目的を実現するのに必要な要素の一つとして図書館へ移動することを表している。つまり、実際に国立国会図書館で行うことは、レポートを書くというより、資料を探すなど、レポートを書くのに必要な行為であると推測される。一方、(36)bの方は国立国会図書館へ移動し、その場所で実際に筆記行為を行うことを表している。二つの状況を比較すると、移動先で行為の実現が確実視される(36)bの「～に＋移動動詞」よりも、移動は行為実現の一要素であると考え(36)aの「～ために＋移動動詞」の方が実現は難しい。言い換えると、「～ために」を用いるということは、ある行為の実現は移動だけでは成り立たず、それ以外の何らかの要素も満たす必要があるということであり、「大仰な目的」と感じられるのは、この意味的特徴から生じる感覚とすることができる。

3.3.1.6 意味記述

前節での比較から、両表現には以下の弁別的特徴が見出された。

(37) 「～に＋移動動詞」の「目的」は、＜移動の着点で実現される＞という制約があるが、「～ために＋移動動詞」の方にはそういった制約はない。

(38) 「～ために＋移動動詞」は、移動が前件行為の実現には必要な要素だが、それだけでは実現が保証されない(ゆえに「～ために」の方が実現の難易度が高く、大仰な目的と感ぜられる)。一方、「～に＋移動動詞」の方は、移動を経て、その着点での前件行為の実現を確実視している。

これらを踏まえると、両表現の意味は次のように記述することができる。

(39) 「～ために＋移動動詞」：＜ある行為の実現に必要な要素である移動を行うこと＞

(40) 「～に＋移動動詞」：＜ある行為の実現が可能な場所への移動を行うこと＞

3.3.2 「目的」と「原因」表す「～ために」の意味的共通性¹⁹

前項では「～ために」を類義表現と比較して検討したが、より一般的な「目的」の「～ために」の意味を記述するために、「原因」の「～ために」との比較を試みたい。まず、以下の二例から見てみよう。

(41) ウィキリークスは一方で、アサンジュ氏や内部告発者を守るためにあらゆる策を講じている。(AERA、2010年12月13日号)

(42) 部下らしいその男は、途中でポイントの故障で電車が止まったために遅れたと、素早く雄一郎に説明(略)。(『照柿』)

¹⁹ 「に」の有無に関して益岡(1997:139-155)は、寺村(1992)を発展させ、原因節「～ため」と「～ために」の違いについて言及している。その中で、節が格助詞「に」を持つと、それは格成分となって主節が表す事態の原因を特定し、その事態のあり方を限定するという役割を担うと述べている。一方、「に」を持たない場合は、状況成分として事態の叙述にとって前提となる情報を表すとしている。例えば下の例(i)は例(iii)の読みを許容して、例(ii)は例(iii)の読みを許容しないとされる。

(i) 雪が降ったために新幹線が止まったのだ。

(ii) 雪が降ったため新幹線が止まったのだ。

(iii) 新幹線が止まったのは、雪が降ったためだ。

この問題に関しては更なる考察を必要とするが、本稿においては「ために」の形式に限って分析を行うこととする。

従来、「～ために」には「目的」と「原因」を表す用法があるとされてきた。例えば(41)の「アサンジュ氏や内部告発者を守る」は「策を講じている」の「目的」であり、一方、(42)の「電車が止まった」は「(到着が)遅れた」ことの「原因」である。しかし、両用法は意味的にまったく関係がないわけではない。先行研究でもその意味的共通性について言及されてきた。例えば、寺村(1984:213)は、検証は行っていないものの、「原因」と「目的」とはどこか深いところで共通の意味内容を持っていると述べている。また、國廣(1982b:111)は、「～ために」という言語形式は「目的」と「原因」を包含した1つのものと考え、前件と後件の意味関係によって決まるとし、包括的な意味として次のように表している²⁰。

(43) タメ <後件の行動・状態を引き起こす理由を示す>

さらに、寺村(1984:213)でも指摘されているように、「名詞+の+ために」の形式の場合、「目的」と「原因」の境界が一層曖昧となる。例(44)の「橋を架ける」は、「一軒の家」の有益性を考えた行為なのか、「家」の存在が原因となって発動された行為なのか定かではない。

(44) 村内には(略)一軒の家のために架けた橋もあるという。

(朝日新聞、2010年6月1日)

このように、「～ために」には「目的」を表す場合と「原因」を表す場合とがあり、両義間に何らかの関係性があるということは確かであろう。しかし、それぞれの意味を「目的」や「原因」といった表現で個別に記述している限り、その共通性は明らかにならないし、類義表現との違いも明確に捉えきれない。そこで本稿では、両義をさらに詳しく記述することで、その共通性が抽出できるのではないかという見通しに立ち、「～ために」が表す「目的」とは何か、「原因」とは何かということについて、個別に意味を詳述する。それを踏まえて、両義に共通する意味特徴を明示することを目的とする。

3.3.2.1 先行研究について

「目的」を表す「～ために」の従来の意味記述及び用法は、3.3.1.1で取り上げたが、概ね「動作を行なう目的を表し、意志的な動作を表す動詞に付く」(益岡・田窪 1992:196)という内容である。この、先行研究で用いられる「目的」という語については、研究会

²⁰ 前田(2006:47)も、「ため(に)」の表す「目的」の意味は、「原因・理由」との関連から考える必要があるだろうと、その意味的関連を指摘している。

(2008:234)がさらに詳しく検討しており、「その動作を行うことで主体が実現させようとしている事態」としている。前件部分に関するこの主張には、本稿も沿うところが大きい。それはあたかも、後件行為を行うことは、そのまま前件の事態実現に結びつくといった直接的な因果関係に感じられる。確かにこのような解釈が可能な例もある(=例(45))。しかし、その実現性は、実際には程度問題で、(46)のような例の場合、後件の行為遂行だけでは前件の事態の実現には結びつかない。

(45) さあ、帰ってくれ……。そんな自分の意思を伝えるために立ち上がりかけると (略)。
(『約束』)

(46) 潤介は風呂を沸かすために立ちあがった。(『約束』)

(46)は例えば「風呂を沸かしに立ちあがった」というように、移動の目的を表すとされる「～に」で言い換えても同一の事態を表すことができるが、(45)を「意思を伝えるために立ち上がりかける」とすると、研究会の言う「主体が実現させようとしている事態」も異なってくる。したがって、先行研究のように「目的」という用語による記述だけでは「～ために」の特徴的な意味が捉えられているとは言い難い。

次に、「原因」の「～ために」をめぐる議論を概観する。益岡・田窪(1992:190)は「ある個別の事態を原因として、別の事態を説明するときに使われる」としている。また、前田(2009:149)は「客観的な事態」間の因果関係を示すと述べている。前件の事態と後件の事態は客観的な事態であるということは、用例を観察すると確かに認められる。しかしながら、田中(2004:379)が指摘しているように、後件にはおしなべて不都合な結末が示される²¹。また、前件の原因事態は「～ために」で示されることで、典型的には話者の負の評価が付されている。その評価的側面は「～ために」の特徴的な意味であり、後述するように本稿の主張の基盤となる「あるべき状態」との隔たりに由来するものと考えられる。ゆえに、話者がそれをどう捉えているかという要素も取り入れることで、充足した意味記述が成し

²¹ 全ての用例で不都合な結末が示されるわけではなく、田中(2004:379-380)は以下の例によって、意外な事態の出現や、場合によっては好都合なこととして述べられることもあるとしている。

a. 暖冬のためにいつもより梅の花が早く咲いた。

b. 一台待って乗車したために、座席にゆったりと座ることができた。

鈴木(2008)によると、人は通常、事態を「予測通り」に進行・展開するものと考えており、かつ、「望ましい」内容のものであることを好むが、それとは異なる事態について述べるときは、有標の形式を用いて「予測と違って驚いた」、あるいは否定的な感情・評価的意味を表すとされる。「～ために」の用例は後者の感情・評価的意味を表すことが多いが、上の例については、前者の「予測との違い」からの意外性、好評価が表されていると考えられる。

得ると考える。

形式的な現れに関する先行研究も見ておきたい。第2章で従属句(節)の階層性について取り上げた。南(1993:201)は「原因」の「～ために」をB類に分類している。一方、その従属句分類法に従えば、「目的」を表す「～ために」はA類に属すると考えられる²²。二つの階層を分ける指標の1つはテンス表示である(2.3.2参照)。先述の國廣(1982b)は、「～ために」という言語形式は、(43)で言うところの「理由」が後件より以前であれば「原因」となり、以後であれば「目的」になるとしている²³。包含した1つの意味を求めることでは中畠(2000:23-26)も同様で、「原因・理由」も「目的」も含め、タメニが広く「なぜそうする(なる)のか」を表す」と述べている。しかし、分化基準についての用語が國廣(1982b)とは若干異なっている。中畠(2000)は、前件の事態が「既定(確定)か、未実現か」に基づいていて、それは形式的な面からも裏付けられるとされる(「原因」となる事態は既定であるためル形・タ形接続であるのに対し、「目的」の事態は未実現であるためル形接続のみ)²⁴。本稿は、「原因」の「～ために」においては、前件と後件の事態生起に時間的前後関係があると認めるものの、「目的」の「～ために」の場合の前件は、中畠(2000)や田中(2004)、前田(2009)が指摘しているように、発話時点において未実現(不確定)の事柄、すなわち概念上のことであると考え²⁵。

3.3.2.2 主体について

次に前件と後件の主体について確認しておく。(47)は研究会(2008:233)の例であるが、このように「目的」の「～ために」の場合は、前件と後件の主体は同一であるとされる(前田1995、研究会2008など)。

(47) 映画を録画するために、新しいビデオを買った。

²² 南(1974、1993)の従属句分類基準に照らせば、「目的」の「～ために」は、「(従属句内でおさまる)ガ格(主格)が現れない」、「動詞の「タ・ダの形」に接続しない」といったA類としての特徴が観察される。しかしながら、後述するようにナイの形に接続する場合もあるため、A類の中でもB類に近い位置にあると言えるだろう。

²³ 時間的前後関係の違いにより両義が区別されるという観点は、研究会(2008)も同様であり、目的節に過去形が現れないのは時間的に後で成立する事態であることに因るとされる(p.233)。

²⁴ 佐治(1984:15)も「～ために」が「目的」を表すには、「まだ実現されていなくて、同時に実現しよう(と主体が考えている)ことがらでなければならない」と述べている。

²⁵ 南(1993:243-244)は、B類(判断段階)で表されるのを命題とするならば、A類(描叙段階)で表されるのは「命題以前」と述べている(2.3.2参照)。本論内で示した先行研究の議論を重ね合わせると、この「命題以前」というのは、概念上の事柄を指していると考えられる。

一方、「原因」の「～ために」は、B類従属句の特徴を有しており、従属句(節)内の主体がガ格となって表される。つまり、従属句(節)の主体と主節の主体は(48)のように同一の場合もあるが、田中(2004)が言うように異なる場合が多い。

(48) 悪いものを食べたために、彼はおなかを壊した。
(「悪いものを食べた」「おなかを壊した」のは「彼」)

(49) 山田が休んだために、わたしが残業しなければならない。(田中 2004:380 例(36))

3.3.2.3 「目的」の「～ために」の意味記述

「目的」を表す「～ために」は、さらに下位的な意味として二つ想定される多義的表現であると考えられる²⁶。以下、順に見ていくことにする。

(50) (元米沢市議の川野裕章氏は)「脱官僚の日本を作るために立ち向かわなければ」と公募に応じた。(朝日新聞、2010年6月1日)

(51) 勉強をするというより自分たちが学生であることを確認するために学校に行くようなものだった。(『日輪』)

(52) 男から離れるために、控室へ続く階段を降りた。(=例(23))

「目的」を表す「～ために」が動詞に接続する場合は、基本的にル形に接続する。各例が表す内容を考えてみよう。例(50)は、「脱官僚の日本を作る」という理想的な行為の実現を望み、それに必要だと考えられる「立ち向かう」という行為を行うことを表している。例(51)は、「自分たちが学生であることの確認の実現を望み、それを果たし得ると考える、登校行為を行う」ことである。例(52)で表されているのは、「男から離れることを期待し、その実現につながる、「階段を降りる」行為を行う」ことである。以上の例における共通の意味特徴を考えると、前件については<(後件行為を行う時点では実現できていないが)主体が実現を望む行為>となる。後件に関しては<前件の行為の実現に必要な要素と考えられる行為>とすることができる。ここで注意しておきたいのは、後件の行為の遂行が前件の実現を保証するものではなく、あくまでも実現に必要な一要素という関係である。この前

²⁶ 國廣(1982a:97)は多義語について次のように定義している。

「多義語」(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う。

本稿における「目的」の「～ために」の多義性についてもこの定義に従う。

件と後件の関係性は、3.3.1.4において示した「～ために+移動動詞」の意味特徴と共通する。以上は前件、後件とも「行為」の場合であるが、次の例のように、前件は主体の意志のコントロールが完全には利かず、典型的な「行為」とは考えられない場合もある。

(53) 一流の小説家になるために、たいへん努力をしたのだよ。(『ブン』)

例(53)の前件で示されている事態は「一流の小説家になるという、実現を望む主体自身の状態変化」である。そして後件が表しているのは、それが必要とする「たいへんな努力」を行うことである。先行研究でも言われているように、前件には程度の差こそあれ、主体の意志が影響する(石川 1988、前田 1995 など)。つまり、行為にしろ、状態変化にしろ、その実現には何らかの意志的に関与できる部分があるということである。このことから、前件の意味は<(後件行為を行う時点では実現できていないが)主体が実現を望む自身の行為・状態変化>となる。そして、実現に必要な意志的に関与できる部分として後件の行為を述べているのだと考えられる。

ところで、「目的」の「～ために」としては周辺的な事例になるが、動詞のナイ形に接続することもある。

(54) 彼らは、(略)ただ、ディレクターや社員たちに忘れられないために、毎日そこに顔を出しているのだった。(『風』)

(55) 原告側は(略)「組合による団体交渉をさせないために秘匿していた」と主張している。(朝日新聞、2010年6月1日)

前田(1995:453)は、「ように」との比較を通じ、否定述語で表される「～ために」の先行動詞は、自己制御性がある動作であると指摘している。上例を見ると、確かにその指摘は適切である。同時に、「毎日顔を出す」「秘匿する」というのは、それぞれ「忘れられない」「団体交渉をさせない」という、主体が望む抑止行為を実現化する行為であるため、先に述べた前件の意味にも合致する。以上から、「目的」の「～ために」の基本的な意味は次のようになる。

(56) <主体が実現を望む自身の行為・状態変化を、その要素となる後件の行為を行うことで果たそうとすること>

さて、ここまで主に前件について見てきたが、後件の場合も必ずしも典型的な意志行為とは限らない。例えば「ある」「要る」など、後件が意志動詞ではない<存在理由>の用法

が、既に先行研究で触れられている(國廣 1982b、佐治 1984、前田 1995、研究会 2008)。

(57) 道標は道を知らせるためにある。(佐治(1984:15)の例)

(58) このプロジェクトを成功させるために、おまえの力が必要だ。

(57)の主体は「道標」という、人工物である。人工物というのは、人に何らかの作用を及ぼすよう、その存在に託されている。「道標」を作ったのは人であり、本来何らかの行為を行えるものではないが、(57)の発話者は道標を行為の主体に見立て、「主体(道標)は、通行人に有益な情報を提供したいと望み、それが必要とする存在状態の維持を行っている」という解釈をしている。つまり、(56)の意味を起点としたメタファーにより²⁷、あたかも人工物が何らかの「行為」を人に向けて行っているかのように描写しているのである。また、(58)の例では、後件の「お前の力が必要だ」と述べることで、実際には主体(話者)が「おまえの力を求める」ということを表している。そう考えると、これも「行為」として認めることができる。こういった用法の後件は、「ある」「必要だ(要る)」など一部の意志的ではない表現に限られるという使用上の制約があり、中心的な用法とは考えられないが、(56)の意味に含めることができるだろう。

次に、「名詞+の+ために」の形式についても考えてみよう。この場合の名詞は人やグループであることが多い²⁸。

(59) マッカーサーが疲れた部下たちのために用意したレクリエーションは、彼らにとって儀式のようなものであった。(『日輪』)

(60) 昨年のクリスマス、前橋市で子どもたちのために使ってほしいと漫画「タイガーマスク」の主人公「伊達直人」名義でランドセル 10 個が置かれた

(AERA、2011年1月24日号)

(59)の動作主体である「マッカーサー」は、レクリエーションを用意することによって、「部下たち」がより心身面でリラックスした状態に至ることを望んでいる。(60)の動作主体は、自分が送ったランドセルを「子どもたち」に使ってもらうことで、その子らがより満たさ

²⁷ メタファーについては、「二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表わす形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩」という靑山(2002:65)の定義に基づいている。

²⁸ 動作性の漢語名詞、動詞の連用形派生の名詞に後続することもあるが、これはむしろ動詞に属すると考えられる。

・風呂場のガラス戸の修理のために、きょう業者が来るんです。(『約束』)
・(フィギュアスケートで)さらに表現力のある滑りのために、バレーの練習もした。

れた状態に至ることを期待している。つまり、この形式の「～ために」は、後件によって、前件で表される「ある人」が<より良い状態に至ることを期待する>ということを表している。しかし、<より良い状態に至ることを期待>されるのは<人>とは限らない。

(61) 一緒に被服支廠へ入った国民学校の同級生は宇品(現・南区)で被爆し、18歳で亡くなった。「将来は傷痍軍人と結婚するんよ」。国のために戦った軍人を思いやる優しい子だった。(朝日新聞、2010年6月2日)

(62) 自然を満喫し、野生動物との出会いを楽しみながら、自然のためにチョットだけ力を貸していただく、グリーンな(自然にやさしい)休日をご提案します。

(<http://www.wbsj.org/event/greenholiday.html>)

(63) 小巻は(略)今夜のために天井の梁から吊るしたと思える太い紐に結んであるランプの芯の長さを調節した。(『約束』)

(61)の「国」は「国民」、つまり<人>と解釈することも可能であろう。しかし、(62)になると、主体の行為によってより良い状態になるのを期待されるのは、山や川、野生動物の状態である。また、(63)のように、ある時間帯の空間的状态についても述べることができる。以上のことから、この形式の意味は次のように記述することができる。

(64) <それによって、ある対象がより良い状態に至ることが期待される、後件行為を行うこと>

この意味の<より良い状態に至る>は、田中(2004:398)が言及している名詞「ため」の意味<当該対象にとって何らかの益するところがある>と意味的なつながりがあると言えよう。

ここまで、目的用法の「～ために」の形式に関して、二つの意味を記述した((56)、(64))。これらの意味を見てみると、後件で示される主体の行為というのは、前件内容の実現に必要な要素として認識されているということがわかる。その前件内容とは、<主体が実現を望む自身の行為・状態変化>、そして<(主体の行為によって期待される)ある対象のより良い状態>という話者の概念上の事態である。前者は主体自身に関する事態であるが、後者は、主体を含んだ、より一般的な対象を受益者として想定している。以上から、前件の共通的な特徴は、<主体が実現を望む、ある対象の行為や状態>ということになる。全体としてまとめると次のように記述される。

(65) <主体が実現を望む、ある対象の行為や状態を想定し、その実現に必要な要素だと

考えられる行為を行うこと>

これがいわゆる「目的」用法の「～ために」の意味として示されるものである。先行研究の言う「主体が実現させようとしている事態」とは、すなわち「主体の行為が実現に必要な要素となって機能する事態」ということとなろう。(45)と(46)のような実現の程度差の問題も、後件行為がどれほど実現に重要な要素なのかということの説明できる。

3.3.2.4 「原因」の「～ために」の意味記述

ここからは「原因」の「～ために」について考察する。

(66) 最初のクラスコンパをスルーしたために、友人ができない。

(AERA、2010年11月8日号)

(67) 「東電の配電網は電柱で管理されていて、行政区画とは一致しません。配電網を下敷きにグループ分けしたために無用な混乱が起きたのです」

(AERA、2011年3月28日号)

(66)、(67)はともに、「ために」が動詞のタ形に接続している例である。前件では「クラスコンパをスルーした(欠席した)」「グループ分けした」という、実際の事態を示しており、その結果、「友人ができない」「無用な混乱が起きた」という、話者が好ましくないと考えられる別の状況が現れたことを表している。このような感覚は3.3.2.1で触れた田中(2004)の「不都合な結末」という記述に沿う。

次は動詞のル形に接続した用例である。

(68) バネは、ゼンマイ状にしろ板状にしろ、特殊な焼入れを繰り返して加工するために、守山工場では作ることの出来ないものの一つだった。(『李歐』)

(69) 生産量の伸びを消費量の伸びが上回るために、世界の在庫量は12%減少すると予測している。(田中 2004:378 の例(25))

(70) 睡眠時無呼吸症候群(SAS)

睡眠中にのどや舌下部の筋肉がゆるんで垂れ下がり、気道をふさぐために呼吸ができなくなる病気。(田中 2004:380 の例(35))

(68)の「加工する」は繰り返される作業行為を表している。そして、「特殊な焼入れを繰り返

返して加工する」という作業の難易度から、「作ることが出来ない」という好ましくない状況を生じさせている。(69)の前件は、見通しの結果という、既定事項を表していて、それが世界の在庫量減少を引き起こすことを示している。(70)は「筋肉が下がって気道をふさぐ」という原理が「呼吸ができなくなる」状態を引き起こすことを表している。

以上の三例は、前件はル形ではあるけれども、定型化した行為や既定事項、原理といった、現実世界に認められる事実であり、「目的」のル形とは異なる。この点は前田(2009:34)でも言及されているが、さらに言えることは、話者は後件の事態に対して好ましくない、あるいは普通ではないという感覚を抱いているのと同時に、前件で示される現実の事態に対しても、「～ために」の形式を取ることで、話者は好ましくない、あるいは特殊なことと考えることである。この点は、次の例の「成功した」「守った」のように、一般的にプラスの印象を受ける動詞でも、「～ために」の形を取ることで、好ましくないと感じられることから支持されるだろう。

(71) なまじ上昇気流に乗って飛行が成功したために、鳥に食われて死んでしまう蜘蛛のほうが多い(『約束』)

(72) ところが、その命がけで守った船が、いま逆に船方たちの首を絞めている。原発事故による放射性物質の海への流出で、操業再開のメドが立たないのだ。船が港に乗り上げて「廃船」となれば、保険金がおおりる。なまじ守ったために船は港に係留されたままだ。(AERA、2011年7月25日号)

これらの例は、希望が叶った事態であるにもかかわらず、「なまじ」という、「しなければよかった」という評価を下す語と自然に共起することからもわかるとおり、それを「余計なことをした」と捉えている。この感覚は、例(67)や次の(75)、(77)の前件についても認められる。例(66)の場合は逆に、「するべきことをしなかった」という感覚が表されている。

以上の例は行為や事態の生起に「ために」が後続したものであったが、引き続き状態性の表現に後続する例について検討してみたい。

(73) 彫刻家イサム・ノグチは(略)アメリカ人であるために選に漏れるなど、日米両国に小突き回されるような運命をたどった人ですが(略)。

(AERA、2010年11月22日号)

(74) 昔、圧倒的なシェアを誇ったバナナの品種が、あるカビのために全滅したことがあ

りました。(AERA、2011年1月31日号)

(75) 人気歌手に似ているために、いつもサインを求められる。

(76) ベランダから見える風景は(略)高いビルが一つもないために平坦で漠々とした視界が開けているばかりだった。(『照柿』)

(77) 人より仕事が早いために、次々と仕事を頼まれる。

例(73)は、主体には選考で選ばれる可能性もあったが、「アメリカ国籍」という特殊な属性を持っていることで選ばれなかった事態を表している²⁹。例(74)が表しているのは、主体に寄生したカビの存在が、主体が全滅するという状況に至らしめたということである。例(75)は、主体の外見に「人気歌手に似ている」という特徴が認められ、それによって「サインを求められる」という事態が起こっている。例(76)の後件は、ベランダから見える殺風景なさまを描写しているが、それは、本来あって然るべき「高いビル」の欠如が作り出す景色であることを述べている。例(77)は、主体には仕事の処理速度が他人よりも優れているという特徴があり、そのことが後件の「次々と仕事を頼まれる」という状況を生み出している。いずれの例も、後件で表されているのは、話者が好ましくない、あるいは想定外と感ずる状況であるが、それを生み出す前件の状態も「～ために」という形式を取ることで、たとえばある観点から好ましい状態であっても、好ましくないという感情が付されている。これは先に見た、前件が行為や事態の生起である場合と同様の感覚である。

以上から、「原因」の「～ために」は次のように意味が記述できる。

(78) <話者が好ましくない、特殊だと感ずる、現実のある事態や状態が、別の好ましくない(あるいは想定外の)事態や状態を引き起こすこと>

従来、単に「原因を表す客観的な事態」とされてきた「～ために」の意味も、これにより特徴的に捉えることができた。それと同時に、意味の特徴を動機づける「目的」との共通の意味特徴も見出すことが可能になる。

3.3.2.5 共通する意味特徴

前節で導いた「目的」と「原因」の意味をそれぞれ再掲する。

²⁹ 田中(2004:376)において、「～ために」は当該対象物、主題の属性(性格附与)、特徴を提示することが多く、<属性定義>といった特徴を持つと述べられている。

- (79) 「目的」の「～ために」：＜主体が実現し得る、ある対象の行為や状態を想定し、その実現に必要な要素だと考えられる行為を行うこと＞
- (80) 「原因」の「～ために」：＜話者が好ましくない、特殊だと感じる、現実のある事態や状態が、別の好ましくない(あるいは想定外の)事態や状態を引き起こすこと＞

両義を比べると、一方は未実現の行為・状態を「望ましいもの」としており、他方は、ある事態・状態を「好ましくない、特殊だ」と考えていることがわかる。つまり、方向性としては異なる感覚を「～ために」に付していることになる。ここで言う「行為」「事態」というのは、主体の意志が関与するか否かという違いはあるものの、実現されれば一つの状態である(例えば例(41)の「守る」という行為も、実現されれば「守っている」という状態になる)。そうすると、「目的」の場合の「望ましい」という感覚も、「原因」の場合の「好ましくない、特殊だ」という感覚も、「対象のあるべき状態」という、話者の意識の中にある概念を基点とした感覚であると言えることができる。その上でまず、「対象のあるべき状態」と現実との間に「隔たり」が存在し、かつ、主体にはその部分を埋め合わせる能力があると認められたとき、話者は前件でその状態を明示し、主体はそれに近づこうと何らかの行動を起こすのだと解釈する。その、未実現の「対象のあるべき状態」と現実との隔たりこそが「目的」を表す「～ために」の後件行為の動機として捉えられていて、(43)で示した國廣(1982b)の「理由」の一つと考えられる。この観点で先に示した例を見直してみる。(50)、(53)、(54)、(57)、(59)、(61)の話者は、「脱官僚の日本を作っている(作った)」「一流の小説家になった」「社員たちに忘れられない」「道を知らせた」「部下たち(がより良い状態になった)」「自分たち(がより良い今夜を迎える)」を未実現の「対象のあるべき状態」と想定している。しかし、話者がそれを認識した時点の現実はその実現できていない(例(57)については、往来者に有益な情報を提供しなければ、その現実というのは、単なる「木材」ではない。ゆえに、話者が「道標」に期待するあるべき状態とは、有益な情報を提供している状態である)。そして各例の後件からは、主体が、現実をその「あるべき状態」に近づけようとした行為であるという点が認められる。

一方の「原因」の場合はどうか。前件で表されるのは、既に現れた現実である。ところがこの現実というのは、「～ために」の形によって話者が考える「対象のあるべき状態」からの「過不足」の状態として示される。ゆえに、「原因」の「～ために」の用例に共通する、

「好ましくない、特殊だ」という感覚は、この「対象のあるべき状態」に比べて「余計なこと、想定外のことだった」、あるいは「それに至らなかった」という、いわば「想定する状態からの隔たり」に起因としていると考えられる。言い換えれば、「対象のあるべき状態」と既に確定した現実との隔たりに後件事態の出現の理由を求めている。先に挙げた例(66)、(68)、(73)、(74)、(75)、(76)、(77)で確認すると、言語化はされていないが、それぞれ「コンパに出席する」「一般的な焼入れを繰り返して加工する」「アメリカ人という属性を持たない」「カビが付着していない」「人気歌手に似ていない」「高いビルがいくつか存在する」「仕事の速度は人並みだ」という状態を、話者が「対象のあるべき状態」と考えていることが読み取れる。そして、現実には前件で描かれたとおりで、「余分、特殊」あるいは「不足」を感じさせる。結果として後件で表された状態は、それが原因で引き起こされた、好ましくない状態であるという点で一貫している。

以上の検討から、「目的」の「～ために」と「原因」の「～ために」の意味的共通性として、次の特徴が抽出できる。

(81) <話者が考える、対象のあるべき状態と現実との隔たりが、後件の行動・状態を動機付ける>

この、<話者が考える、対象のあるべき状態>というものを共通項として認めることで、従来の研究で言及されつつも、明確に示すことができなかった「目的」と「原因」のつながりが明らかになった。

3.4 本章のまとめ

この章では目的を表す代表的な複文表現である「～ために」を中心に、類義表現「～に+移動動詞」との比較、及び「原因」を表す「～ために」との比較を行った。結果、得られた「～ために」の意味は次の通りである。

(82) 「～ために+移動動詞」：<ある行為の実現に必要な要素である移動を行うこと>

(83) 「目的」の「～ために」：<主体が実現し得る、ある対象の行為や状態を想定し、その実現に必要な要素だと考えられる行為を行うこと>

(82)の「移動」はあくまで<行為実現に必要な要素>である。これは(83)の意味特徴<実現に必要な要素だと考えられる行為>と整合する。ゆえに、(83)は一般的な「～ために」の

意味を適切に示しており、(82)はその限定的な用法であると認めることができる。

最後に「目的」の表す意味について、「～に＋移動動詞」との比較から考えよう。

(84) 「～に＋移動動詞」：＜ある行為の実現が可能な場所への移動を行うこと＞

(83)と(84)は、後件によって実現を確実視しているか、あるいは実現に近づくと認識しているかという点で違いがある。これは各言語形式固有の意味特徴である。しかし、「目的」というカテゴリーに属する成員(類義表現)に共通する特徴(スキーマ)としては、以下の特徴が抽出できる。

(85) 目的：＜主体が実現し得ると考える行為や状態＞

この記述内容は恐らく、母語話者にとっては当然のように認識されていて、むしろ、記述するまでもないと考えられるかもしれない。しかし、第5章で検討する複文表現との連続性や、本稿では対象外としたが、「～ように」との比較を行う上で、詳述しておくことは重要である。

第4章 「付帯状況」を表す複文表現

4.1 はじめに

「～ながら」「～つつ」という表現の意味を記述するとき、「付帯状況」あるいは「同時動作」といった術語が用いられる。しかし考えてみると、ある行為に付帯する状況や、同時に進行する動作を言語化しようと思うと、その選択肢は無限にある。例えば「野球中継を見ている」という行為に付帯する状況として以下の例を作り出すことが可能である。

- (1) いつも配球を予想しながら野球中継を見ている。
- (2) いつも妻の愚痴にあいづちを打ちながら野球中継を見ている。
- (3) いつも妻に罵られながら野球中継を見ている。

それにも関わらず、無限に作り出すことが可能な付帯状況の中から、「配球を予想する」あるいは「あいづちを打つ」「罵られる」が、話者に選ばれ言語化されたのはなぜか。本来、その言語表現を用いるということは、そこに話者の何らかの表現意図が託されているはずであるが、「付帯状況」「同時動作」という説明にはその表現意図が反映されていない。「付帯状況」というのは、「～ながら」やそれに類する表現に共通の特徴に便宜的につけたラベルに過ぎないと言えるだろう。この問題に対する本稿での結論を先に述べておくと、「～ながら」で表される付帯状況というのは、後件事態の成立に何らかの影響を及ぼし得ると話者によって認識されるものであり、「～つつ」で表されるものは後件事態によって妨げられずに維持しようと努められる付帯状況である。ただ実際には、この相違は程度問題であり、典型的な用例において初めて顕著になるものである。ゆえに、ほとんど言い換え可能な場合が多く、4.4で行う比較例についても、できるだけ違いが明確になるものを取り上げているということを予め断っておく。

本章では、付帯状況を表すとされる「～ながら」と「～つつ」の意味に関して、まず先行研究を概観して問題点を示す。その後、第2章で取り上げた國廣(1982a:202-205)の「文脈的作業原則」に基づき、前件、後件それぞれの特徴を探っていく。そして、同じく國廣

¹ 「付帯状況」という文法術語について寺村(1983)は、「文の主要部の表す事態と並行して存在したこと」という内容を指すと述べた上で、「それを文法用語として使っていくためには、そのいろいろな形と、それぞれの形がもつ一般的な意味、そのような構文の成立する文法的条件と表現意図とが記述されねばならない」としている。ここで言う「表現意図」について寺村は、「(構文的な)主要部分が特別の意味をもつ、そういうことを聞き手に伝えたいということであろうと理解される」(p.39)と述べている。

(1982a:241-252)の「対照的作業原則」で両表現を比較し、個別的な意味の精緻化を図ることとする。以上の作業を踏まえ、「付帯状況」という記述やそれに類した従来の記述をさらに推し進め、話者の表現意図を反映させた意味の詳述を目指す。なお、本稿では逆接の「～ながら」、「～つつ」については扱わない²。

4.2 先行研究について

ここでは「～ながら」と「～つつ」の意味に関する先行研究でよく指摘されている3つの点、すなわち「付帯状況」「相対的な過程の長さ」「文体」について取り上げる。

4.2.1 「付帯状況」について

益岡・田窪(1992)は「付帯状況」という術語について次のように述べている。

付帯状況を表す副詞節は、ある動作に付随する状態や、ある動作と同時並行的に行われている付随的な動作を表す。(益岡・田窪 1992:194-195)

さらに付帯状況を表す表現としては、「動詞タ形+「まま(で)」」、「動詞タ形+「きり」」、動詞テ形、「動詞連用形+「ながら」」、「動詞連用形+「つつ」」、等があるとしているが、それらの間の意味の違いについては触れられていない。また、「付帯状況」という術語を用いてはいないものの、同様の記述を行っているものがある。

庵他(2001:442-443)

「PながらQ」は、ある主体が動作Qを行うときに同時に別の動作Pを行うことを表します。

日本語記述文法研究会(2008:248 以下、「研究会」と略記)

主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を表す。このうち、「ながら」「つつ」「連用形+連用形」、テ形は、主節の意志的な動きに同時並行的に付随する動きを表す。

² 南(1993:82)において、次のような「～ながら」の例は<逆接>となり、B類従属句として扱われている。

アノ人ハ、オ金ガアリナガラ、寄付ヲシヨウトシナイ。

また、「～つつ」についても、次のような例は<逆接>の意味になり、B類従属句に入れるべきであるとしている(南 1974:123)。

夜半カラ翌朝ニ カケテ 天候ガ 悪化スル 危険ヲ 知りツツ ワレワレハ アエテ 出航シタ

「同時」という説明がよく使われているが、確かに次の例(4)は「鉛筆の先をなめる」という行為と「頭をひねる」という行為を同時に行うことができる。

- (4) 主人のむすこがいびきをかいている横で、吾一は鉛筆の先をなめながら、しきりに、
あたまをひねっていた。(『路傍』)

しかし、同じ「鉛筆(の先)をなめる」でも、例(5)の指し示す事態は「鉛筆の先をなめ、そのあと筆記をするという一連の行為を繰り返し行う」ということであり、厳密には「鉛筆をなめる」と「書く」という行為を同時に行うことは不可能である。

- (5) 「つぎは、ありがとう、をやってくれ」
「スパシーボ」
「よろしい」
また鉛筆をなめながら、書く。(『風』)

「～ながら」が「同時並行」のみを表すのではないということは既に村木(2006)で指摘されている。村木(2006:9-18)は「ながら」に先行する動詞の非限界性、限界性に注目して、前者の場合は「同時(進行)性」を表すが、後者の場合は前件が後件に時間的に先行する「継起性」を表すとしている³。このように動詞を分類した事態の捉え方は、本稿における分析方法に共通する。すなわち、「ながら」に先行する、動詞を含む部分の指すプロセスが完了を含蓄するかどうかという観点に基づく分類方法であるが、これについては4.3.1で取り上げ、最終的にプロセスの違いを越えて、ある事態に対する話者のどのような意図が反映されているのかということを示したい。

さて、もう一度「付帯状況」の定義について考えてみたい。庵他(2001)では前件内容を「動作」としているが、研究会(2008)では「(主節と)同じ主体の状態・状況」、加えて「意志的な動き」としている。「ながら」は多くの動詞の連用形に接続するが、それは庵他(2001)で言うところの「動作」に限ったことではない。次の「燃えながら」という用例もあることから、研究会(2008)で示されている、「同じ主体の状態・状況」と言ったほうが的確であろう。

- (6) 消火作業がつづけられているうちに日は暮れ、やがて電源が切れて舵も利かなくなり、艦は燃えながら次第に左へ傾斜しはじめた。(『山本』)

³ 「同時性」を表す例として、「父はビールを飲みながら、テレビで野球中継を見ていた。(=飲んでいた。そして、同時に)」が挙げられ、「継起性」を表す例として「わたしたちは途中何度か休憩をとりながら、やっとここまで来た。(=休憩をとった。そして、その後)」が挙げられている(村木 2006:11)。(下線は引用者による)

また、川越(2002:52)は、「付帯状況」の「～ながら」(例(7))、及び「逆接」とは別に、「て」で言い換えられる「～ながら」(例(8))に関して「様態」による記述を提案している。

- (7) ラジオで音楽を聞きながら、日本語の勉強をした。(川越 2002:52 例(4))
 ≠ラジオで音楽を聞いて、日本語の勉強をした。
- (8) 発音のテープを聞きながら、日本語の勉強をした。(同 2002:52 例(5))
 =発音のテープを聞いて、日本語の勉強をした。

例(7)は目的の異なる2つの動作の同時進行であるが、例(8)の「～ながら」は同時進行というより、手段を表しているとされる。このように、「て」で置き換えられる「～ながら」は様態の用法であると述べている。さらに「～ながら」が様態を表す場合は、意志性動作の同時進行の場合と異なり、前件も後件も意志性についての制限はなくなると指摘している⁴。川越(2002:61)は「様態」の使用条件として、「XはYの動作の有様、状況をさす」としている。先に取り上げた研究会(2008)も、「～ながら」を「様態節」の一つとしており、「主節の事態や仕方のあり方を述べて、主節の事態を修飾する従属節」と規定している(p.239)。ただし、付帯状況と様態を分けて考える川越とは異なり、様態の下位カテゴリーとして付帯状況を位置づけている⁵。このように、「様態」という術語で以って説明しようとしても、結局のところ、分類方法の議論以上のことは望めない。とはいえ、「～ながら」を様態で説明することの是非はともかく、例(7)と(8)の「ながら」の先行部分の意味について、「手段」として解釈されるかどうか等、確かに何らかの違いは感じられる。この感覚は後で行う意味の分析の中で導かれる前件内容の、後件行為に対する「貢献度」の違いに起因すると思われる(例(8)の「手段」としての解釈は例(7)よりも後件に対する貢献度が高い)。

「様態」という術語は用いていないが、それに通じる意味で注目すべき研究に益岡(2000)がある。そこでは、「ながら」に先行する動詞が「主体動作動詞」であれば「動作継続」か「反復行為」を表すとし、「主体変化動詞」であれば「結果継続」を表すとしている。前者の「主体動作動詞」の場合、さらに意志的動作か無意志動作かという分類が可能である。ここで注目したいのは、「主体変化動詞」の場合は意志動作だけであり、それはく主体の姿

⁴ 前件が非意志的である例として「酔ってふらつきながら家に帰った。」が挙げられており、主節の意志性が薄れた例として「子供はわめきながら、引きずられていった。」が挙げられている(川越 2002:57-58)。

⁵ 様子を表す様態節の形式として「ように、みたいに、ごとく、様子で、さまで、ふうに、そうに、げに、とおりに、ともなく、ともなしに、という(の)でもなく」が挙げられており、程度・限度を表す形式として「ほど、くらい(に)、だけ、ばかりに、限り」が挙げられている。そして、付帯状況を表す表現として「ながら、つつ、連用形+連用形、まま、テ形、きり、なり、ついでに、がてら」が挙げられている(p.240)。

勢の変化>を表すという点である。

結果の継続を表す場合、関係する動詞はほとんど主体変化動詞である。そして、主体変化動詞の中で中心となるのは、主体の姿勢の変化を表すものと主体の再帰的な変化を表すものである⁶。(益岡 2000:204-205)

この<姿勢>という記述は従来の「～ながら」の研究には現れなかった考え方である。本研究でも4.3.2.3、4.3.2.4で積極的にその考えを採用することとし、さらに、話者がその<姿勢>をどう捉えているのかということも考えてみたい。

ここまで「付帯状況」という術語について概観してきたが、この語自体の説明については益岡・田窪(1992)や研究会(2008)で妥当であるとしても、表す内容は他の類義表現にも共通する特徴であり、言い換えれば類義表現のカテゴリーに付けられた名前に過ぎない。よって、各表現独自の意味についてはさらに検討の余地がある。この課題は次節以降で検討していくが、続いて、「付帯状況」になり得るプロセス性に関する研究を見ておく。

4.2.2 動詞の「過程」について

三宅(1995:441-450)は、前件動詞と後件動詞の「相対的な過程の長さ」について詳しく検討している⁷。

(9) 口笛を吹きながら、歩いた。(三宅 (1995:443)の例(1))

(10) ギターを弾きながら、歌った。(同 例(2))

(11) テレビを見ながら、勉強した。(同 例(3))

三宅(1995)は(9)から(11)の例に基づき、まず「ながら」に先行する動詞は「過程」を持ち、主節も「過程」を持つとしている⁸。しかし、主節に関しては、「過程」を持っても持たなくとも付帯状況が表せるとしている(例(12)から(14))。

⁶ 主体の姿勢の変化を表す例として、例えば次の例が挙げられている。(下線は引用者による)

泉氏は橋にもたれながらそう言った。(永井路子「茜さす」)

主体の再帰的な変化を表す例としては、次のような例が挙げられている。

少し斜めに首をかたむけながら歩く姿も、七年前と同じでした。(「道ありき」)

益岡は<主体の姿勢の変化>と<主体の再帰的な変化>と分けて考えているが、両者を併せて<主体の姿勢の変化>と考えてよいのではないかと思われる。

⁷ 同様の指摘は庵他(2001:442-443)、研究会(2008:249)にも見られる。

⁸ 動きが運動として展開することを表す。そのテストとして、複合動詞形の“～はじめる”“～つづける”が可能かどうかによって判断する(三宅 1995:442)。両方言える場合は「過程」と判定される。

(12) 鼻歌を歌いながら、部屋を出た。(同 例(4))

(13) 笑いながら、立ち上がった。(同 例(5))

(14) もがき苦しみながら、死んだ。(同 例(6))

一方、前件動詞が次のように「過程」を持たない場合は、付帯状況としては不適格であると指摘している。

(15) *発見しながら／*完成しながら／*目撃しながら／*設立しながら／
*みかけながら／*死にながら／等 (同 例(7))

ところが、純粋な「過程」が認められない動詞でも、主節と比べて相対的に「過程」が認められれば付帯状況を表す場合もあるとも述べている(p.444)。

(16) 立ち上がりながら、隣の人の方をちらっと見た。(同 例(8))

(17) 電話を切りながら、ため息を一つついた。(同 例(9))

(18) 倒れながら、身をよじった。(同 例(10))

(19) 校門を出ながら、守衛さんの顔をうかがった。(同 例(11))

(16)から(19)の前件動詞は、「過程」を持つとは言えないが、主節も瞬間的なものであるため、相対的に過程性を獲得しているとされる。このことを裏付けるために、(20)から(23)のように主節が持続的なものの場合であれば、不適格になるということを述べている。

(20) *立ち上がりながら、本を読んだ。(本を読みながら、立ち上がった)(同 例(12))

(21) *電話を切りながら、酒を飲んだ。(酒を飲みながら、電話をきった)(同 例(9))

(22) *倒れながら、けいれんした。(けいれんしながら、倒れた)(同 例(10))

(23) *校門を出ながら、縄跳びをした。(縄跳びをしながら、校門を出た)(同 例(11))

確かに、前件と後件を入れ替えた場合、非文ではなくなるという言語事実から、二つの並行する事態があった場合、時間的な幅を持つ方が「～ながら」に選ばれるということは立証される。しかし、そうであるなら、(15)の動詞群も、主節に瞬間的な動詞がくれば非文ではなくなるのであろうか。

(24) *事故を目撃しながら息を呑んだ。(事故を目撃して息を呑んだ)

(25) *死にながら犯人の顔を目撃しているはずだ。

(死ぬとき犯人の顔を目撃しているはずだ)

(15)の動詞群を前件動詞に使い、主節にも過程を持たないとされる動詞を用いた(24)、(25)の例は非文となる。過程を持たないとされる動詞のうち、(16)から(19)は「～ながら」になり得るが、(15)の動詞群は「～ながら」にならない。このことは、何を示しているのであろうか。ここで、動詞が表す概念的な意味を抽象的構造で示している影山(1996)と、動詞はすべて時間的関係のプロセスを表すとする Langacker(1990)の記述を参考してみたい。

影山(1996:61)

BECOME⁹は必ずしも一瞬の出来事に限られない。目標状態に切り替わるのは一瞬だが、そこに至るまでの時間幅は認められる。したがって、「スープが徐々に温まった、魚が少しずつ焼けた」のように漸進性を表現することは可能である。

Langacker(1990:78)

Except in cases of immediate experience, there is no restriction that a span of conceived time must coincide in length with the span of processing time required for its conception; we have the mental capacity, in recalling or imagining a sequence of events, to either “speed them up” or “slow them down”. For example, I can mentally run through the steps involved in changing a tire, reviewing them all in a matter of seconds, but the physical implementation of these procedures takes considerably longer.

直接体験の場合を除いて、ある事態の生起に実際に要する時間(conceived time)の幅が、その概念に必要とされる頭の中の処理時間の幅と一致しなければならないという制限はない。我々は一連の事態を思い出したり、想像したりするのに、それらの「スピードを上げる」「スピードを下げる」といった心的能力を持っている。例えば私は、タイヤの交換に要する工程を、瞬時にすべて概観し、心的にたどることができるが、それらの手順を実際に行うには、かなり長い時間がかかる。(日本語訳は引用者による)

⁹ 影山(1996:57)では、動詞の概念的意味 BECOME について次のように述べている。

起動相(BECOME)というのは、アスペクト的には瞬間的に終わる出来事を表す概念であり、典型的には arrive, reach, leave, appear などの動詞に含まれる意味である(p.57)。

これらの考えによると、(16)から(19)の前件の動詞群のように、「過程を持たない」と考えられている動詞でも「時間幅を認めて」「スピードを下げて」心的に処理することが可能ということになる。すなわち、これらの動詞群は、変化に至る過程をベースとして持ち、時間軸に沿って変化する一瞬一瞬の状態を焦点化することが可能なのである¹⁰。一方、(15)の瞬間的動詞群の方は、同じく変化に至る過程をベースとして持っているが、変化時点を挟んだ二つの状態にのみ焦点が当てられている(例えば、「死ぬ」であれば「生きている最後の状態」と「生きていない最初の状態」)¹¹。確かに「立ち上がっている」「電話を切っている」といったテイルの形式は結果の状態を表すけれども、一方でスローモーション映像のように、その動作の進行を思い浮かべることも可能であり、ゆえに(16)から(19)の前件動詞群は、プロセス時間は短いものの、「経過」が認められる動詞群ということになる。また、三宅(1995)は「ながら」に先行する動詞が、単数回でなく、複数回にわたってそれが繰り返されることにより「習慣」や「繰り返し」を表し、ある程度の過程性が生じるとしている¹²。習慣としての解釈は状態性につながり、重要な意味特徴の一つである。この点に関しては4.3の「状態プロセス」の中で検討する。

三宅はさらに、「～ながら」が典型的には「過程」ではなく、「維持」を表す場合(「～つづける」と言うことができる動詞に接続した形)でも、それは一つの過程性を持っていると論じている¹³。

以上から、(15)の動詞群が「～ながら」にはなり得ない理由は語の意味としては「瞬間的」にしか解釈することができないからということになる。しかし、(15)の動詞群は絶対に「～ながら」句を形成しないのであろうか。

(26) 調査チームは次々に遺跡を発見しながら、ジャングルの奥へと進んで行った。

(27) 彼は次から次へと子会社を設立しながら、次第にグループ全体の規模を拡大していった。

例(26)は、例えば考古学の調査隊がジャングルを調査しているうちにどんどん奥地へ入って行き、その途中で複数の遺跡を次々に発見した、といった事態を表そうとすれば十分認め

¹⁰ ベースとは、ある語の意味の記述に必須の背景をなすもので、焦点化(プロファイル)とは、ベースの中で、その語(の意味)が直接指し示す部分のことである。(杉山 2006:172)

¹¹ 「死にながら生きる」といった表現が実際には存在するが、この場合、「死ぬ<命がなくなる>」という事態が実際に実現されているわけではなく、あくまで「死ぬ」を比喩的に捉えた表現である。

¹² 「転びながら、一所懸命走った。」「後ろを振り返りながら、歩いた。」といった例が挙げられている(p.444)。

¹³ 「煙草をくわえながら、公園を歩いた。」「目を閉じながら、祈りの声を聴いた。」といった例が挙げられている(p.445)。なお、このタイプは「～たまま」に言い換えられるとしている。

られる文である。例(27)も同様の考え方で、解釈することが可能である。つまり、「ながら」に先行する、語としての動詞の過程性だけではなく、「～ながら」句全体の過程性を視野に入れる必要がある。本稿では、[格+動詞] といった動詞表現だけではなく、様々な要素を内包する句全体で表す事態の過程性、動詞の多義性による過程性の違いに目を向けた分析を4.3以降で行う。

さて、三宅(1995)は付帯状況を表す条件として、「持続的なもの、換言すると時間的な幅を持つものでなければならない」(p.450)と結論づけている。加えて、後件の行為が行われている間は、少なくとも前件の状態が持続されていると認識されていなければならないということである。この点は「～ながら」及び「～つつ」の意味を記述する上で重要であると考えられるため、本稿も同様の前提に立ち、意味の記述を図っていききたい。

4.2.3 「文体」について

ここでは「～ながら」と「～つつ」の違いについての先行研究を挙げておきたい。

庵他(2001:443)

「PつつQ」は「PながらQ」とほぼ同じ意味で使われますが、書きことば的な表現です。「二人は酒を酌み交わしつつ思い出話にふけた。」

益岡・田窪(1992:195)

「つつ」は、文章体で使われる。

研究会(2008:249)

「ながら」に比べると「つつ」は文体的にやや古い表現である。「老夫婦は互いに相手を{気づかいながら/気づかいつつ}仲良く暮らしていた。」「友人を{待ちながら/待ちつつ}、本を読んでいた。」

管見の限り、「書き言葉的」、「古い表現」といった「文体の違い」以外で「～つつ」と「～ながら」の相違点を指摘している研究はなかった。しかし、用例の中には「～つつ」と「～ながら」が一つの文中で両方使われる例も存在する¹⁴。

¹⁴ 南(1993)によると、<逆接>ではない「～ながら」「～つつ」はともにA類従属句に属する。A類従属句の成分がさらにA類従属句を内包することがあるということは既に指摘されている。

手ヲツナイデ歩キナガラ(ウタヲウタイマシタ)。 (南 1993:92 の例)

A1

A2

(28) ウィスキーを呑みつつ、無限に「もし」を重ねながら、エディはその夢について熱中して語りつづけた。(『一瞬』)

(29) こうやってこの手紙を書きながら、二十数年前の中学生だった瀬尾由加子の姿を心に描きつつ、いま私はそう思ってしまうと言った方が正しいのでしょうか。(『錦繡』)

南(1993)の考えに基づくと、二つの例で先に出てくる「～つつ／ながら」は後の「～つつ／ながら」に含まれ得るということになる。それとは別に、前の「～つつ／ながら」と後の「～つつ／ながら」が対等な関係で主節に結びついていると考えることもできる。この点に関して、句と句の意味的關係を考えてみる。まず例(28)は、「もし」を重ねる(=言う)ことと主節の「語りつづける」の間に意味的な関わりが感じられる。例(29)も「手紙を書く」ことによって「心に描く」ことができることを表している。もし、「ながら」と「つつ」が対等に主節に結びつくと仮定すれば、「ながら」と「つつ」を入れ替えてもこの感覚は変わらないはずである。

(30) ウィスキーを呑みながら、無限に「もし」を重ねつつ、エディはその夢について熱中して語りつづけた。

(31) こうやってこの手紙を書きつつ、二十数年前の中学生だった瀬尾由加子の姿を心に描きながら、いま私はそう思ってしまうと言った方が正しいのでしょうか。

「～ながら」を「～つつ」に替えた(30)の場合、(28)に比べ「もし」を重ねる(=言う)ことと主節の「語りつづけた」と意味の関わりが薄れている。一方、「～つつ」を「～ながら」に替えた(31)の場合は、(29)には認められた、「手紙を書く」ことが「心に描く」契機になるという意味合いは薄れ、むしろ「心に描く」ということと「そう思ってしまう」ということとの結びつきが強くなる。以上のことから、同じA類に属する「～ながら」と「～つつ」でも、「～ながら」は直後の節と強い結びつきを持ちやすいのに対し、「～つつ」は主節との意味的な依存度が低い。この現象は、少なくとも、「文体の違い」だけで「～ながら」と「～つつ」を弁別することはできないということを物語っている。そもそも「～つつ」が書き言葉的であるならば、口語、文語という使用場面によって使い分けがなされるべきであるが、書き言葉の中でも「～ながら」は依然として多用されている。つまり、「～つつ」は書き言葉や古い表現に多用されやすい意味的特徴を備えていると想定される。この点に関しては、本章の最後の部分で、「～つつ」が使用場面を制限されるのは、その意味特徴に

由来するのではないか、ということ提案する。

4.3 文脈的作業原則による分析

4.2.1では「付帯状況」という術語による意味記述の限界を指摘すると同時に、先行研究の<姿勢>という提案に着目した。4.2.2では「ながら」「つつ」に先行する動詞の「過程」(本稿では今後「プロセス」と呼ぶ)をめぐって議論し、動詞だけでなく、句全体の過程性を考えなければならないと述べた。この節では、句全体が表す過程性に着目し、そこからわかる前件と後件の意味内容をそれぞれ探っていくこととする。

4.3.1 依拠するプロセス論

テイラー・瀬戸(2008:243)は動詞表現のみならず、動詞句、節はすべて時間を内在する、つまり、広い意味ですべてプロセスを表すと規定していて、次のように図示している。

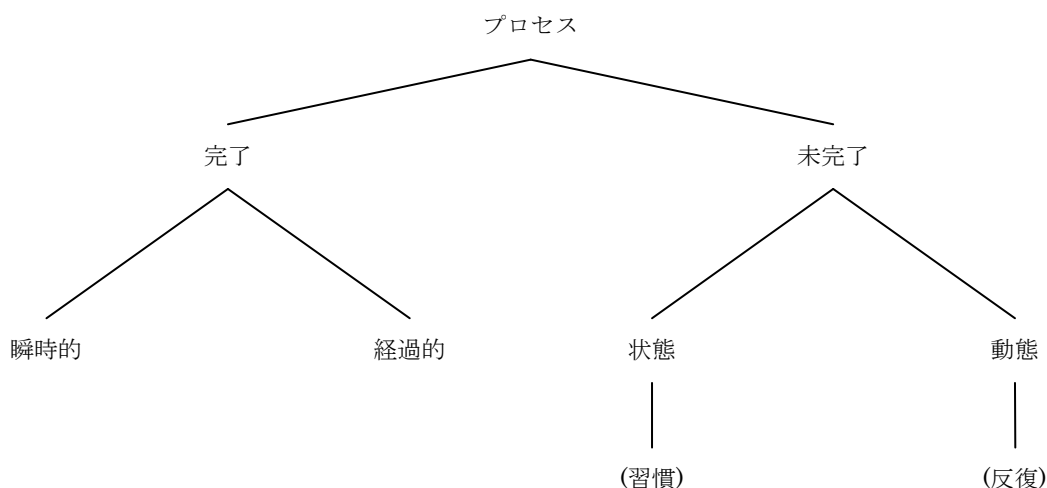


図1 動詞のプロセスの分類(テイラー・瀬戸 2008:248)

この分類は、動詞あるいは動詞を構成要素に含む表現を、まず「完了」か「未完了」かに分けている。そしてそこからさらに、「瞬時的(瞬間的)」「経過的」「状態」「動態」に分けている¹⁵。これは、先に三宅(1995)をもとに動詞レベルで論じてきたことにも共通する部分

¹⁵ 英語の例であるが、プロセスのタイプの例として以下の表現が挙げられている。

瞬時的出来事: sneeze, cough, blink, die, arrive, finish the novel, begin the novel, reach the summit, etc.

経過的出来事: travel from A to B, play a Mozart sonata, write a novel, build a house, walk to the store, etc.

状態: be tall, know the answer, like cheese, etc.

がある。「瞬時的」な動詞は、先にも述べたとおり、「～ながら」と結びつかないものがあった(例(24)、(25))。ここで注目したいのは、「完了プロセスが繰り返されて全体として未完了と解釈される場合」(テイラー・瀬戸 2008:250)である。そこでは次の例について論じられている。

(32) a. The child coughed all night.(テイラー・瀬戸(2008:250)の例(23a))

b. Listen, the child is coughing again.(同 (23b))

cough は瞬時的プロセスを表す動詞であるが、(32)a のように時の副詞を加えることによって経過的な(時間的な広がりのある)活動、つまり、単純な完了的出来事(一回の咳)が繰り返されることを意味するとしている。したがって、他の動態未完了動詞のように反復を表す進行形を作ることができる(例(32)b)。このように、動詞レベルでは完了プロセスだったものが句内の要素の働きにより、反復を表すようになる。この考えに従えば、先に挙げた「瞬間動詞+ながら」の形式も説明が可能になる。

(33) 調査チームは次々に遺跡を発見しながら、ジャングルの奥へと進んで行った。
(=例(26))

(34) 彼は次から次へと子会社を設立しながら、次第にグループ全体の規模を拡大していった。(=例(27))

(33)、(34)はそれぞれ句の中に「次々に」「次から次へと」といった、反復を表す要素が含まれている。こういった語がなければ自然な文として判定することは困難だろう。

以上のように、本稿では「ながら」「つつ」に先行する、動詞を含む句全体が表す過程を意味記述の対象とする。そこで、両形式に関して、テイラー・瀬戸(2008)の分類(「動態」「状態」「経過的」「瞬時的」)に従って考察し、それぞれにおいて表される意味内容を示す。その上で、「ながら」と「つつ」の先行部分にはどのような違いが認められるかを次節で検討する。

4.3.2 先行部分について

ここでは、「ながら」「つつ」に先行する部分を4つのプロセス(「動態」「状態」「経過的」「瞬時的」)ごとに見ていく。

動態(活動) : write novels, learn French, grow taller, work on a dissertation, etc.

4.3.2.1 動態プロセス

まず「～ながら」の例から見てみよう。

- (35) 食べるのが遅い子の場合、テレビを見ながらなど「ながら食べ」をしているケースも少なくない。「まずテレビを消して、食べることに集中できる環境づくりを。楽しい雰囲気づくりも大切」という。(朝日新聞、2009年3月13日)
- (36) 松本賛吉が応接間に通されてわくわくしながら待っていると、間もなく靴音が聞え、「やあ」と山本が気軽に入って来た。(『山本』)
- (37) センターに豆腐作りの経験者はおらず、職員はレシピを見ながら試作を重ね、作手村の手作り豆腐の施設まで見学に出かけた。(朝日新聞、2005年3月9日)

例(35)の先行部分は、動作主体である「食べるのが遅い子」がテレビに視線を向け続けていることを表しており、<行為の継続状態>とすることができる。例(36)の場合は<心理的な継続>を表す。例(37)は、例(35)と同じ「見ながら」という形であるが、<行為の反復>を表している。

次は「～つつ」の例である。

- (38) 選手らは記念撮影を終え、ペナントを手に持ち、ファンに手を振りつつグラウンドを回った。(朝日新聞、2006年10月13日)
- (39) 望月さんら3人も、シャンソンと一緒に歌う主婦仲間が増えることを願いつつ、24日のステージに立つ。(朝日新聞、2009年1月24日)

例(38)の「ファンに手を振る」は<反復行為>である。例(39)の「主婦仲間が増えることを願う」は、一貫して感じている<心理的な継続>と言える。以上から、「ながら」「つつ」に先行する部分が動態プロセスのときは、<動作主体の身体的あるいは心理的行為の反復・継続状態>である。

4.3.2.2 状態プロセス

「～ながら」「～つつ」の用例の中で状態プロセスと解釈されるものは多くない。しかし、テイラー・瀬戸(2008:251)が「反復と同じく習慣も未完了だが、反復と異なって習慣は状態

性を帯びる」と指摘するように、反復が安定することで状態性を表すことがある。この観点から以下の例を考えてみたい。

- (40) パティ・スミス。46年シカゴの労働者階級に生まれた。工場で働きながら詩を書き、ボブ・ディランに憧れる。(朝日新聞、2009年8月28日)
- (41) 三浦さんは中学卒業後、定時制高校に通いながら父親に弟子入りして職人の道に進んだ。(朝日新聞、2008年6月12日)

例(40)の「ながら」に先行する「働く」は多義語であると考えられる。梶川(2010a)はそのプロトタイプ的な意味として、〈しなければならぬことや期待されることを知的、肉体的能力を駆使して継続的に行うこと〉と、〈ある場に身を置き、そこで求められることを身体活動によって継続的に行うこと〉を挙げている。前者は「今日もよく働いた」という場合の「働く」の意味であるが、例(40)の「働く」は、後者の意味、端的に言えば「在職中」という意味で使われている。「よく働く」の場合は未完了プロセスの「動態」に当たるが、(40)のような「働く」は、それが繰り返されたことによる習慣、つまり〈動作主体の状態〉を表すと考えられる¹⁶。例(41)の「定時制高校に通う」の場合も、繰り返しが習慣化し、〈動作主体の状態〉である「在学中」を表している。さらに、これらの例から、単なる状態ではなく、〈動作主体の社会的状況〉に限定できる。「～つつ」の場合も同様で、例(42)の「芸者をする」、例(43)の「契約社員として働く」は習慣化による状態、すなわち「磯松の職業」「喜井さんの社会的身分」を表している。

- (42) そんな彼(桂小五郎)に、京の超売れっ子芸者、磯松も引き込まれていった。(略)芸者をしつつ、小五郎の手足となって活躍した磯松は、新撰組に連行されたこともある。(『日経おとなのOFF』)
- (43) 現在、昼は契約社員として働きつつ、札幌の人気劇団「プラズマニア」にも籍を置き、演劇漬けの日々を送る喜井さん。(朝日新聞、2008年9月26日)

したがって、「ながら」「つつ」ともに状態プロセスに後続する場合は〈動作主体の社会的状況〉を表す。

¹⁶ 益岡(2000:203)では、「働きながら」や「牛乳配達をやりながら」といった例も動作継続を表すものの、主節の動作との同時性を表さないため特殊な例としている。この点に関して本研究は、このように同時進行を表さない場合も、「～ながら」の意味を記述する上で重要なことであると考えられる。

4.3.2.3 経過的プロセス

4.2.2で、「主節と比べて相対的に過程が認められれば付帯状況を表す場合もある」という三宅(1995)の記述を引用した。これは同じく引用した影山(1996)、Langacker(1990)によっても裏付けられた事態解釈であるが、そのような解釈がされるのが経過的プロセスの表現である。ただし、経過的プロセスとして解釈される用例は、川越(2002:53)が「一般的ではない」としているように、多くはない。

(44) 「ただいま」荒井は玄関へ入りながら言った。(『女社長』)

(45) はずみで、足をとられはしたが、倒れながら一廻転して、立上るなりもう駆け出している。(『砂の女』)

例(44)は、実際に要した時間は恐らく非常に短い時間だと思われるが、家の外から玄関に入るという動作主体の身体移動の過程でなされた行為を表している。例(45)は、足をとられ、体の安定感を失い、地面に着くまでの過程を示している。以上から言えることは、「ながら」に先行する部分が経過的プロセスである場合は、<動作主体の身体の動き>ということである¹⁷。同様のことは「～つつ」でも観察される。

(46) 柳は純子に見つけられたと知って、あわてて、半ば頭を上げつつ出口の方へぐいと進んだ。(『女社長』)

例(46)は、下げていた頭を「半ば頭を上げる」という動きの途中の身体の様子を表している。以上から、「ながら」「つつ」に先行する部分が経過的プロセスのときは<動作主体の身体の動き>とすることができる。

4.3.2.4 瞬間的プロセス

4.2.2において、先行研究を踏まえ、(24)、(25)のように、単独で「瞬間的プロセス」を表す動詞は、「ながら」とは結びつかないということは確認した。ところが、実際には以下のように瞬間的プロセスを表す動詞を使った例文が存在する。

(47) おばあさんは三田さんらを家に連れて行き、白米を腹いっぱい食べさせてくれた。
きれいな布団に同級生と並んで寝ながら、「天国やな。生きとって良かったなあ」

¹⁷ ここで言う「動き」とは、人間の刻々と変化する有り様を指すこととし、変化全体を何らかの意味あるものとして捉えたものを「行為」とし、分けて考える。

と言い合った。(朝日新聞、2009年9月1日)

例(47)の「寝る」は<体を横の方向に伸びる姿勢にする>ことを表していて、経過的に捉えることができない姿勢の変化である¹⁸。これは先に引用した益岡(2000)の<姿勢>に通じるが、本研究では、プロセスの中の、ある身体的有様という意味で<体勢>と呼ぶ。しかし、瞬間的プロセスが示すのは体勢だけにとどまらない。

(48) 実はゲームセンターの内部にもいささか興味があったので孫に並んで入った。茶髪で無表情な少年や、塾帰りの中学生はゲーム機に向かって操作に夢中。場違いなバーサンの侵入にも反応もない。ホッとしながらキョロキョロしていると、「早く！おばあちゃん、ハイ、ポーズ！」。(朝日新聞、1997年10月7日)

(48)の「ホッとする」は、瞬間的に得られた「安堵感」を表している。

以上から、「ながら」の先行部分が瞬間的プロセスのときは<動作主体の、瞬間的に生起する体勢あるいは心理状態>を表すと言える。「～つつ」の場合についても確認しよう。

(49) 三枝はハンカチで口を押えつつ部屋へ飛び込み、ガスの栓を閉めると、周囲の襖や窓を次々と開け放った。(『女社長』)

(50) 屋上に避難した客はそこに飼われていたライオンの吼え狂う声にいっそう肝をつぶしつつ、飛来した陸軍機から投下されたロープにすがって救助された。(『楡家』)

例(49)の「ハンカチで口を押える」という表現が表すのは、瞬間的に実現する動作主体の体勢である。また、例(50)の「肝をつぶす」というのは、<ある事態を体験し、その迫力に非常に驚く>といった瞬間的な心理状態の生起を表している。以上から、両表現の先行部分が瞬間的プロセスの場合は、<動作主体の、瞬間的に生起する体勢・心理状態>と考えられる。

4.3.2.5 意志性

先行する部分の動作主体の意志性についても触れておきたい。

(51) 伸子は、混み合った電車の中でギュウギュウもまれながら、大欠伸をした。(『女社長』)

¹⁸ 経過的プロセスの動詞的表現(「倒れる」など)は「～ている」の形(「倒れている」)でスローモーションのように想像することが可能であるのに対し、「寝る」は「寝ている」の形で同じように想像することはできない。

「ギューギューもまれる」は動作主体「伸子」の意志で行う行為ではない。したがって、意志性の有無は「～ながら」に制約を加えないことがわかる。

(52) 戦争に翻弄されつつ独自の文化をはぐくんだ歴史が、故郷に重なる。

(朝日新聞、2007年8月16日)

例(52)の「戦争に翻弄される」の動作主体は人間だと思われるが、この場合も人間の意志によるものではない。したがって、先行部分の内容に主体の意志性の有無による制約は加えられない。

4.3.3 後件について

後件(主節述語)の「動作主体」、「意志性」についても確認しておく。

まず、「～ながら」の場合、「動作主体」については、生物以外にも例(6)の「艦」のように無生物についても可能である。

(53) 艦は燃えながら次第に左へ傾斜しはじめた。(例(6)より抜粋)

「意志性」については、(54)の「泣ける」のように意志性が認められないものもある。

(54) パリを訪れた帰りの飛行機の中では、姉が持たせてくれた手作りのアップルパイを食べながら泣けてしょうがなかった。(AERA、2010年1月18日号)

したがって「～ながら」の後件(主節)が表すのは<行為>だけではなく、それを含んだ<事態>と考えたほうがよいだろう。

一方、「～つつ」の場合は、無生物は動作主体になりにくい。例えば次の例のように、一見、人間ではない主体(「日銀」)が明示されている場合でも、実際の動作主体は「日銀総裁(あるいは幹部)」である¹⁹。

(55) 榎(はじ)氏は、「世界的な金余りの要因の一つは日本の低金利。今後、日銀は機会をとらえつつ今の超低金利を正常化する難しいかじ取りが必要だろう」と話す。

(朝日新聞、2007年8月18日)

¹⁹ この考えはメトニミー(二つの事物の外界における隣接性、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喻(靑山2002))に基づいている。例えば、「松井のホームランでスタンドが沸いている」(靑山(2002:76)の例)の「スタンド」は実際にはスタンドにいる<観客>を指している。

また、意志性については、例(56)によって確認できる。

- (56) 先の大戦では、300万余の方々、祖国を思い、家族を案じつつ戦場に倒れ、戦禍に遭われ、あるいは戦後、遠い異境の地に亡くなりました。

(朝日新聞、2007年8月15日)

この例の後件「戦場に倒れる」「戦禍に遭う」「亡くなる」は意志性の認められない事態である。ゆえに、「～つつ」の主節が表すのは、「～ながら」同様、＜行為＞だけではなく、それを内包した＜事態＞と考えられる。

4.3.4 まとめ

ここまで「～ながら」「～つつ」に先行する部分のプロセスの違いに基づき、その指し示す意味内容を考えてきた。結果、抽出できた前件部分の意味と制約及び後件の内容は両表現に共通しており、次のようにまとめられる。

- (57) 動態プロセス：＜動作主体の身体的・心理的行為の反復・継続状態＞
 状態プロセス：＜動作主体の社会的状況＞
 経過的プロセス：＜動作主体の身体の動き＞
 瞬間的プロセス：＜動作主体の、瞬間的に生起する体勢・心理状態＞
 意志性：制約なし

これらを先行研究ではまとめて「付帯状況」と称していると思われる。また、ここまでの段階で両表現間の違いとしてわずかに認められたのは、主節(後件)の動作主体に関して、「～ながら」の場合は特に制約がなく＜ある主体＞と考えられるのに対し²⁰、「～つつ」の場合は＜人＞に限られるということであった。それ以外に意味の違いとして考えられるのは、前件部分と後件部分の関係性ということになるが、この点に関しては、次節で行う両表現の比較から導き出したい。

4.4 対照的作業原則による分析

この節では、まず「～ながら」と「～つつ」が類義表現であるということを確認した上で、容認度に差が生じる例を取り上げ、それぞれの特徴を探っていく。

²⁰ <ある主体>と言っても、典型的には<人>であると考えられる。

4.4.1 類義表現の認定

まず、「～ながら」と「～つつ」が類義表現であるということを確認しておこう。

(58) 私は京都の町を歩きながら(=つつ)、あの時突然に訪れて来て私を絶句させたものの正体を、いつか小説に書いてみたいと思っていた。(『風』)

(59) 柳から朴へと、困難なマッチメイクに悪戦苦闘していた時、私は、内藤を置き去りにすることはできない、と思いつつ(=ながら)、頑張りつづけてきた。(『一瞬』)

例(58)は京都の町を歩くという行為が行われている間に、後件行為「いつか小説に書いてみたいと思っていた」という事態が現れるということを表している。これは「～つつ」で言い換えることができる。一方、例(59)は「～つつ」の例であるが、前件の「思う」という心理状態が続いている間、「頑張り続けてきた」ということを表している。これは「～ながら」で言い換えることが可能である。以上から、「～ながら」と「～つつ」は<前件で表される状態が続いている間に、後件の事態が成立する>という意味において類義表現とみなすことができる。

以下では「～ながら」と「～つつ」で言い換えが不可能、あるいは不自然な文になる用例をプロセスごとに検討し、両表現それぞれの意味を探っていく。

4.4.2 動態プロセス

ここでは「ながら」、「つつ」に先行する部分が動態プロセスの場合について比較する。その前に、「ながら」には次の例のような複合語を作ることがあるため、その意味を確認することから始めたい。

(60) a. 食べるのが遅い子の場合、テレビを見ながらなど「ながら食べ」をしているケースも少なくない。「まずテレビを消して、食べることに集中できる環境づくりを。楽しい雰囲気づくりも大切」という。(=例(35))

例(60)の前件「テレビを見る」は動態プロセスと考えられるが、これと「食べる」という行為を「ながら食べ」という複合表現で表している。そしてその指す内容は「食べることに集中できない」ということである。すなわち、「食べる」ことに対する主体の集中力が「テレビ番組を見る」ことによって失われているということである。これを「～つつ」で言い

換えた場合も、果たしてこのような意味が残るだろうか。

b. テレビを見つつ、ご飯を食べる。

例(60)bは「テレビを時折、ちらちらと見てご飯を食べる」という事態を表していて、非文とは言えないものの、「ながら」が持つ、「後件行為に向ける集中力を奪う」という意味は持たない。もう一つ、先に挙げた例について考えてみよう。

(61) a. また鉛筆をなめながら、書く。(例(5)より抜粋)

b. ?また鉛筆をなめつつ、書く。

(61)aは、鉛筆をなめることによって筆記を滑らかにしようとする意図が表れている。すなわち、前件で表される繰り返し行為は、後件の行為を促進するのに貢献している。このような関係性は「～つつ」で言い換えた(61)bでは示されない。

前件の後件に対する貢献という特徴は、次の雑誌の見出しにおける用例でも認められる。

(62) 茶髪の学生が女子大生とパーティーを続けながら、途上国に学校や病院を建てられないか考えた。(AERA、2009年11月30日号)

この見出しの説明に相当する記事は以下の文章である。

(63) 5回のパーティーを催して、集まったお金は約150万円。その資金を使って、2006年8月、カンボジア中央部の農村地帯に約300人が学べる「グラフィス小学校」を建てた。

(62)で表されているのは、(63)の説明でわかるとおり、動作主体「茶髪の学生」が「女子大生とパーティーを続けることによって得られた収入で途上国に学校を建てた」ということである。ということは、前件の反復行為は後件の事態の実現に貢献する行為ということになる。一方、「～つつ」で言い換えた(64)は「女子大生とパーティーをする」ということはやめずに続け、それとは別に「学校や病院を建てる」(あるいは「建てられないか考える」という行為を行うことを表していて、前件の後件への貢献という意味は持たない。

(64) 茶髪の学生が女子大生とパーティーを続けつつ、途上国に学校や病院を建てられないか考えた。

前節で、「ながら」の先行部分が動態プロセスである場合、<動作主体の身体的・心理的

行為の反復・継続状態>を表すとした。そして、ここまでの検討によると、前件は後件の事態が成立する上で必要とされる「集中力」「経済力」といった要素を奪ったり、逆に促進させたりする内容である。評価の方向性は異なるものの、後件の成立に何らかの影響力を持つという点で一致する。ただし、その影響がどのようなものなのかは「ながら」は決定しない。そのことを示す例として、次のような会話が考えられる。

(65) 母：音楽を聴きながら勉強なんてできないでしょ！

(「音楽を聴く」は後件行為へ悪影響)

息子：静かだと集中できないから、音楽を聴きながら勉強するんだ！

(「音楽を聴く」は後件行為へ好影響)

この会話で問題となっている状況は、「息子が勉強していて、音楽も聞いている」という、一つの状況である。それを両者は異なる見方をしているが、同形式の「～ながら」を用いている。したがって「音楽を聴く」という行為が良い影響を及ぼすか、悪い影響を及ぼすかは話者の捉え方次第で、「ながら」が持つ意味ではない。

では次に「つつ」が動態プロセスに後続している用例を見てみることにする。

(66) a. 南アフリカに来てから 2 週間、僕はいろいろなところを訪ねた。サッカーを楽しみつつ、大自然のど真ん中にあるホテルに泊まったり、素晴らしいワイナリーを訪れたり、料理を楽しんだりと、改めて南アという国の魅力を実感している。

(AERA、2010 年 7 月 5 日号)

b.?サッカーを楽しみながら、大自然のど真ん中にあるホテルに泊まったり(略)。

例(66)a は「滞在期間中、サッカーは一貫して楽しんでいて、それとは別にホテルに泊まったりしている」ということを表している。これを「～ながら」で言い換えた(66)b は前件と後件の意味の関係性が見出しにくく、容認度が下がるのではないだろうか。もし言えるとするならば、ホテルに到着するまでの道中でサッカーをするなり、テレビで観戦するなり、それが「ホテルに泊まる」行為と密接に結びついた特殊な場面でのことになる。次の例のように後件行為をするときの主体の心理的な内容であれば、文としては自然に感じられる。

c. 南アフリカの景色を堪能しながら、大自然のど真ん中にあるホテルに泊まる。

もう一つ例を見てみたい。

(67) a. 北京五輪でも最大のライバルは米国だ。「上野を温存しつつ勝ち上がる。決勝の米国戦では打線が3点取って、上野が抑える」。あるスタッフは北京での理想の戦い方を話した。(朝日新聞、2007年8月16日)

b.?上野を温存しながら勝ち上がる。

例(67)aは、「(決勝戦までの各試合での)上野投手の投球機会を故意に減らして力を蓄えた状態で、決勝まで進む」ということを表している。これは、話者が決勝までの各試合において、上野投手の力に依存しないよう努めていると考えられる。これを「～ながら」で言い換えると、登板の見送りを繰り返すことによって勝ち上がることを表し、容認度が下がる。

以上から、「～ながら」は、前件で表される行為の繰り返し・継続状態から何らかの影響を受けて後件の事態が成り立っていることを示し、「～つつ」は前件で表される行為の繰り返し・継続状態を維持している状態で後件の事態を成り立たせるということを示している。

4.4.3 状態プロセス

(68) a. パティ・スミス。46年シカゴの労働者階級に生まれた。工場で働きながら詩を書き、ボブ・ディランに憧れる。(=例(40))

b. 工場で働きつつ詩を書き、ボブ・ディランに憧れる。

4.3.2.2で既に検討したとおり、反復が習慣化した例(68)aの「工場で働く」はパティ・スミスが詩を書いているときの社会的状況を表している。そして、この文全体としては、「工場労働者という社会的状況の中で詩を書く」ということを表している。(68)aを「～つつ」で言い換えたものが(68)bである。この文は非文ではないが、例えば「昼はちゃんと工場で働く。そして夜は詩を書く」というように、互いにその遂行を妨げない二つの行為を表すときに用いられる。さらに、「～ながら」の形式で示されることで、その社会的状況は、「詩を書く」という行為の遂行にとって負荷になっているということを伝えている。「負荷」という点については、次の例のように、間違いなく「付帯状況」であるにもかかわらず、後件行為を行う上で当然の社会的状況を表す場合は「～ながら」では言えないということからもわかる。

c.*自動車工場で働きながら車の部品を作っている。

もう一つ、負荷を示す状態プロセスの例を見てみよう。

(69) a. マッカーサーは幼い日の自分と同じ境遇に生まれたアーサーを、やはり父と同じように戦場を駆けめぐりながら育てた。(『日輪』)

b. マッカーサーは幼い日の自分と同じ境遇に生まれたアーサーを、やはり父と同じように戦場を駆けめぐりつつ育てた。

(69)a はマッカーサーが「兵士として戦闘任務に当たっている」という一種の社会的状況下で自分の子を育てるということを表しているが、この場合も戦闘任務に従事することは、通常、子どもを育てるには負荷と感ぜられるだろう。これを(69)b のように、「～つつ」で言い換えることは可能であるが、「任務は任務として果たし、養育も行った」ということを表し、伝達意図が異なってくる。

さて、ここまで社会的状況が「～ながら」の場合は後件の実現にとって負荷となる例を見てきたが、逆にその社会的状況が後件の実現に何らかの貢献を果たす場合もある。

(70) a. その場所の生き物を食べ尽くすと、次のところへ移動し、そこをも平らげると、さらに別の場所へ移り住む。そうやって自分の地所をぐるぐるとまわりながら生きて行くわけじゃ。(『鼠』)

b.*そうやって自分の地所をぐるぐるとまわりつつ生きて行くわけじゃ。

例(70)a の「ぐるぐるとまわりながら」は、主体の身体的な動きではなく、居住地を転々と移動することを表し、主体の社会的状況を表している。そしてこの文は、主体は移動の先々で食料を得ることで生きることが可能であるということを示している。これは(70)b のように「～つつ」で言い換えると、前件と後件の関係性が見出されず、不自然な文となる。「～ながら」が示す、後件への貢献性は、次の例の場合、より際立っている。

(71) a. ハロウィンを間近に控え賑わうロスの街。スーパーで起こった日本ヤクザによる襲撃事件に巻き込まれ、ジーナはたった一人の息子・ダリンを失った。精神を患うほどのショックを受けたが、復讐の炎を燃やす彼女は、犯人の胸に描かれていた青い虎の刺青を手掛かりに、刺青師・スミスに会う。“青い虎には対になる赤い虎が存在し、お互いに引き付けあう”という伝説を聞いた彼女はスミスに赤い虎の刺青を入れてもらい、日本人が訪れるクラブでホステスをしながら復讐のチャンスを待つ。(http://movie.walkerplus.com/mv28028/)

b. 彼女はスミスに赤い虎の刺青を入れてもらい、日本人が訪れるクラブでホステス

をしつつ復讐のチャンスを待つ。

例(71)aの「ホステスをする」という社会的状況は、「復讐の炎を燃やす」ジーナにとって、「復讐のチャンスを待つ」には好都合の職業である。これを「～つつ」で言い換えると、「ホステス」の仕事も辞めずに続け、それとは別に「復讐のチャンスを待つ」ことを表す。つまり、ホステスの仕事は仇討ちに特に役に立つ社会的状況とは考えていない。

続いて、「～つつ」の状態プロセスの用例を見てみよう。

(72) a. 日本には家事労働に特化した在留資格がないが、外国人経営者らの私的使用人としてなら、その家庭でのみ働くことを条件に「特定活動」という在留資格が取得できる。この資格を持つフィリピン人は06年末現在で約6千人。入管統計などから推計すると、家政婦はうち約3千人とみられる。外国人家庭で働きつつ、日本人家庭でもアルバイトする家政婦は少なくない。

(朝日新聞、2008年8月10日)

b. 外国人家庭で働きながら、日本人家庭でもアルバイトする家政婦は少なくない。

例(72)aの主体「フィリピン人家政婦」にとって、日本での在留資格を得るには「外国人経営者らの家庭で働く」ことが条件になっている。それは、彼らにとっては言わば「本職」と言うことができる。本職であるからには、それは何としても続けなければならないという意志が「～つつ」によって表れている。そして、その遂行を妨げずに日本人家庭でもアルバイトをするということを、この文は示しているのである。この「～つつ」を「～ながら」で言い換えることも可能であるが、その場合、「外国人家庭で働く」という社会的状況は「日本人家庭でアルバイトをする」上での負荷と考えていることになる。

「本職」と、いわば「裏の職業」という対比が、「～つつ」によってよく表れている例を取り上げたい。

(73) a. そんな彼(桂小五郎)に、京の超売れっ子芸者、磯松も引き込まれていった。(略)
芸者をしつつ、小五郎の手足となって活躍した磯松は、新撰組に連行されたこともある。(=例(42))

b. 芸者をしながら、小五郎の手足となって活躍した磯松は、新撰組に連行されたこともある。

例(73)aの主体「磯松」の本職は京都の芸者であり、それは「～つつ」によって示されてい

る。しかし、その職とは関係ないところで、桂小五郎の手伝いをしているということが表されている。これを「～ながら」で言い換えると(73)b のようになるが、これは(71)a の「ホステスをしながら」と同様、「芸者」という職業を「桂小五郎の手足となって活躍する」のに有益なこと(あるいは負荷)として捉えていることになる。

以上の検討から、「～ながら」は、前件で表される社会的状況から何らかの影響を受けて後件の事態が成り立っていることを示し、「～つつ」は前件で表される社会的状況を維持している状態で後件の事態が成り立っていることを示している。

4.4.4 経過的プロセス

4.3.2.3 で、先行部分が経過的プロセスの場合は<動作主体の身体の動き>を表すとした。次の例は、魚釣りで魚を釣り上げる際の方法を表しているが、ともに自然な文である。

(74) a. ゆっくりと竿を立てながら、リールを巻く。

b. ゆっくりと竿を立てつつ、リールを巻く。

だが、以下の例のように、「竿を立てる」という動きが後件に対する何らかの貢献を果たす場合には「～ながら」のほうが選ばれやすいのではないだろうか。

c. ゆっくりと竿を立てながら、魚を引き寄せる。

d.? ゆっくりと竿を立てつつ、魚を引き寄せる。

(74)c は「竿を立てる」という身体の動きによって魚が主体(釣り人)のもとに引き寄せられることを表す。一方、(74)d の方は、「竿を立てる」という動きによって魚を引き寄せるといふより、それはそれで行い、(タモなどの別の道具で)魚を引き寄せるといふ解釈がなされるだろう。先に見た例についても考えてみよう。

(75) a. はずみで、足をとられはしたが、倒れながら一廻転して、立上るなりもう駆け出している。(=例(45))

b.*はずみで、足をとられはしたが、倒れつつ一廻転して、立上るなりもう駆け出している。

例(75)a は「体のバランスを崩し、地面につくまでの体勢の変化の中で、一廻転する」という事態を表している。前件の内容は主体の身体の動きを表しているが、そのことは後件の

事態を成り立たせる動力になっている。この例を「～つつ」で言い換えると、「倒れる」という動きも行い、一廻転も行うという、両立できない事態を表し、容認されない。しかし、何らかの意図性を持って、身体のある動きを維持している場合は「～つつ」で表すことができる。

- (76) a. (中京大中京のFW伊藤翔について) 184センチの体は強いバネを秘めていて、ゴールに向かって半身に構えつつ、DFからついと身を外す。

(日本経済新聞、2007年1月1日)

- b. ゴールに向かって半身に構えながら、DFからついと身を外す。

(76)aのように、試合相手の注意を攪乱するフェイントを描写する場合には「～つつ」が自然に用いられ、偽装しようとする主体の意志が示される。これを(76)bのように「～ながら」で言った場合、そのような意志は消える。

以上から、経過的过程を表す前件は、「～ながら」の場合、前件で表される身体の動きがきっかけとなり、後件事態を成立させている。一方、「～つつ」の場合は、前件で表される身体の動きの経過を維持した状態で、後件の事態を成立させるということを表していると言える。

4.4.5 瞬間的过程

- (77) a. 重要な操作法はマウスのドラッグだ。写真上にマウスカーソル(マウス操作で動く矢印)を置き、マウスの左ボタンを押しながら動かすことをいう。

(朝日新聞、2008年9月27日)

- b. 写真上にマウスカーソル(マウス操作で動く矢印)を置き、マウスの左ボタンを押しつつ動かすことをいう。

梶川(2010b)では、「押す」のプロトタイプ的な意味として、<足以外の身体部分のある物体の一部に付け、その内部に向けて圧力を加え続けること>が示されている。この意味は、「ドアを開ける」という意味で「ドアを押す」のような場合では、ある程度の経過性が想定される。しかし、例(77)aの「ボタンを押す」は、瞬間的に果たされることであるため、瞬間的过程と考えられる。そして、「ながら」が結びつくことで「押す」という行為後の体勢を表している。そして、文全体が表しているのは、「マウスの左ボタンの内部に向け

で瞬間的に指で圧力を加えて、その体勢を維持した状態でカーソルを動かす」ということである。これを「～つつ」で言い換えると(77)bになる。これは「マウスの左ボタンの内部に向けて指で圧力を加えて、その体勢を維持する。そしてまた、別の何かを動かす」という解釈がなされ、不自然である。しかし、前件で表される体勢はそれとして維持した状態で、後件の行為を行うという文脈であれば「～つつ」が容認される。

(78) a. あることを受け入れつつやり過ごすことが、人間以外のほとんどの生物が選択している方法なんです。(AERA、2011年6月27日号)

b. ?あることを受け入れながらやり過ごすことが、人間以外のほとんどの生物が選択している方法なんです。

(78)aは、「あることを受け入れた体勢を維持し、それに煩わされることなくやり過ごす」ということを表すが、(78)bのように「～ながら」で言い換えると、そのような解釈は失われ、あることを受け入れるという体勢は、「やり過ごす」という行為を行う助け、あるいは負荷的な要素として解釈される。

以上の比較でまず考えられるのは、「～ながら」の場合、前件で表される行為後の体勢・心理状態を維持することで後件の成立に何らかの影響力を及ぼすが、「～つつ」は、前件で表される体勢・心理状態を維持しようと努めてはいるが、後件の成立とは関係がないと見ているということである。もう一つ瞬間的プロセスの例を取り上げて確認しておく。

(79) a. おばあさんは三田さんらを家に連れて行き、白米を腹いっぱい食べさせてくれた。
きれいな布団に同級生と並んで寝ながら、「天国やな。生きとって良かったなあ」と言い合った。(=例(47))

b. *きれいな布団に同級生と並んで寝つつ、「天国やな。生きとって良かったなあ」と言い合った。

c. きれいな布団に同級生と並んで寝つつ、外の音に耳を澄ませた。

例(79)aは「きれいな布団に同級生と並んで体を横の方向に伸びる姿勢にし、その体勢のまま言い合う」ということを表している。この例の場合、前件の「きれいな布団に寝る」という体勢は、「天国やな」と言わしめるのに大きく貢献している。これを(79)bのように言い換えると不自然である。ただし、(79)cのように、前件の行為と後件の行為をまったく関わりのないこととして設定すれば「寝つつ」という表現も可能であろう。この場合、例え

ば「内心は外の音の正体を探りに行きたいが、しっかりと寝る姿勢を維持する」といった主体の抑制の意志が感じられる。この、前件の内容を維持しようとする意志は(78)aの「受け入れつつ」においても認められる。

ここまでの瞬間的プロセスにおける比較によって、「～ながら」は前件で表される体勢・心理状態の維持が後件の事態成立に何らかの影響を及ぼすと考えているのに対し、「～つつ」は前件の体勢・心理状態の維持に努めているが、それとは別に後件の事態が成立するという違いが認められる。

4.4.6 意味記述

「～ながら」と「～つつ」は<前件で表される状態が続いている間に、後件の事態が成立する>という意味において類義表現である。ここで言う、<後件の事態が成立するときの、主体に関する諸々の状態>というのが、いわゆる「付帯状況」が表す内容であり、類義表現間から抽出されるスキーマと考えられる。「諸々の状態」の内実は、<動作主体の身体的・心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、身体の動き、瞬間的に生起する体勢あるいは心理状態>であった(このうち、<身体の動き>は<体勢>と考えることができる)。こういった意味内容を両表現が共有するということから、意味を記述するのに必要な「部品」(意味特徴)自体は同じであると言える。このことは、両表現に置換可能な例が多いことの傍証だと考えられる。そうなると、両表現間の意味の差異というのは、その関係性の違いに求められる。

相違点として、まず「～ながら」の動作主体は人に限らなかったが、「～つつ」の動作主体は人であるということがあった。つまり、「～つつ」の使用場面が「～ながら」よりも限定的であるということになる。続いて、最も大きな違いとして、「～ながら」の場合は、用例によって程度の差こそあれ、前件の内容が後件の事態実現に影響を及ぼすという関係性が認められたのに対し、「～つつ」にはそれがなく、むしろ、前件は途絶えることなく維持されている状況で、後件はそれを妨げない事態の成立という関係性があった。以上を踏まえると、両表現の意味は次のように記述することができる。

- (80) 「～ながら」句+後件：<ある主体の、後件の事態に影響を及ぼし得る身体的あるいは心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、体勢・心理状態維持の中で、後件の事態が成り立っている>

(81) 「～つつ」句+後件：<人の、身体的あるいは心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、体勢・心理状態が途絶えることなく維持されている中で、それを妨げない後件の事態が成り立っている>

この記述から考えられる、両表現の違いを改めて指摘しておきたい。まず「～ながら」についてであるが、主体にまつわるある継続的な状況によって、その主体が行う(あるいは主体に起こる)事態が影響を受けると見なされるということは、それが後件事態にも内在している要素ということになる。一方、「～つつ」で表される状況は、主体の状況だとしても、後件の事態に左右されることなく維持されている状況と考えられている。つまり、後件事態とは切り離して考えられているということである。以上を図に表すと次のようになる。

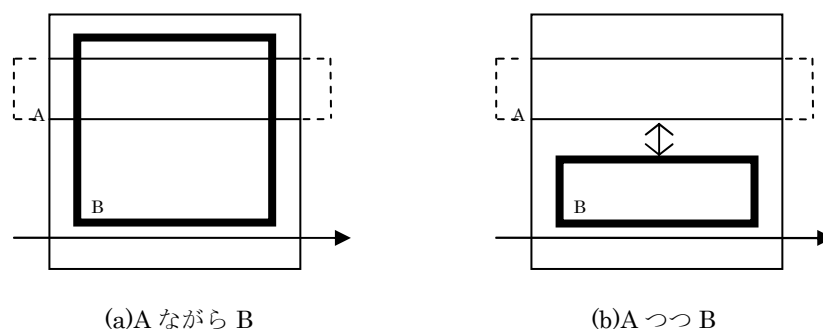


図 2

上図の A は前件で表されている状態、B は後件で表されている事態を示す(Bのサイズの違いに意味はない)。下方の横方向矢印線は時間の流れである。外側の枠は文全体で表す意味内容の範囲である。B を表す枠が太線になっているのは、文全体の中心的成分であることを表している。(a)では A が B に入り込み、その要素として捉えられているということが描かれている。一方、(b)内の AB 間の双方向矢印は、B の生起に関わらず A を維持しようとする心理を示す。このように、「～ながら」と「～つつ」は同じ意味特徴を有しながらも、その関係性の面で表現意図が異なるということがわかった。

4.5 本章のまとめ

本章では、従来「付帯状況」「同時動作」という術語による記述に留まっていた「～ながら」と「～つつ」の意味を分析した。先行研究でも注目されているように、これらの意味を捉える上で、行為の「プロセス(過程)」を考えることが重要であるため、本稿では「動態

プロセス」「状態プロセス」「経過的プロセス」「瞬間的プロセス」に分けて考察を行った。その結果、「付帯状況」と呼ばれるものの内実が示された。その内容を踏まえ、「～ながら」「～つつ」には、付帯状況と後件の事態との関係性、つまり、話者のどのような事態の捉え方が託されているのかを特徴的に示すに至った。

さて、先行研究で「書き言葉的」「文章的」と言われているように、日本語母語話者は直観的に「～つつ」の方が「硬い言い方」と感じる。その理由について、一つの考え方を提案しておきたい。「硬い言い方」の例として以下の講話文、解説文、宣言文を見てみよう。

(82) 激戦を終えた駒苫の選手たちは13日昼、野球部員やファンなどが待ち受ける母校へ帰った。小玉校長は「多くの人に支えられたことに感謝しつつ、この経験を自分の人生に生かしてほしい」と労をねぎらった。(朝日新聞、2007年8月14日)

(83) 先の大戦では、300万余の方々、祖国を思い、家族を案じつつ戦場に倒れ、戦禍に遭われ、あるいは戦後、遠い異境の地に亡くなりました。

(朝日新聞、2007年8月15日)

(84) 竹村泰子・共同代表は「隣国を攻めながら、日本は民衆に本当のつぐないをしてくれなかった。恥と罪を感じつつ、すべての戦争犠牲者に哀悼の意を表します」と黙とう。(朝日新聞、2007年8月16日)

(82)で、講話を行っている校長が望んでいることは、「選手たちが、多くの人に支えられたことを忘れずに感謝し続けるという状態で(経験を人生に生かすこと)」である。(83)は、「兵士が家族のことを絶えず気にかけている心理状態で(戦場に倒れた)」ということを表している。(84)で宣言しているのは、「竹村代表が恥と罪をしっかりと感じている心理状態で(哀悼の意を表す)」ということである。これらの例に共通するのは、主体(「選手たち」「兵士」「武村代表」)の＜ある心理状態をゆるがせにせず、しっかり持ち続けた状態で＞という強い意志である。もちろん、三例とも「～ながら」に言い換えることは可能であるが、このような意志を表明するのに適しているのは、「～ながら」よりもむしろ、＜心理状態が途絶えることなく維持されている中で＞という意味特徴を持つ「～つつ」である。(84)の「感じる」が「～ながら」の形にふさわしい例としては、(85)のように、その感覚が意志とは関係なく生じるという意味で用いられた場合である。この場合、前件は後件に影響を与える主体の状況と解釈される。

(85) 桂二郎は、目の奥が痛く、肩や背にも烈しいコリを感じながら、パソコンの画面を見つめた。(『約束』)

繰り返すが、「～つつ」には後件に影響を及ぼし得るものとして主体の状況を述べ立てるのでなく、その維持に対する主体の強い意志性が反映されているのである。つまり、主体が状況維持に気持ちを振り向けているということである。このように特に意志を振り向ける対象となる状況は、主体が後件行為を行う上での決意、懸命さ、配慮、信念や信条などとして解される。こういった効果が求められるのは、演説、手紙文、宣言、儀礼の挨拶など、非日常的で、体面に関わる場面である。この特殊性が、従来「～つつ」の意味として記述されてきた特徴だが、実際はむしろ意味に由来する用法の制約であると考えられる。

ところで、今回は分析対象としなかったが、いわゆる「逆接」の「～ながら」「～つつ」にもこの話者の表現意図の違いが何らかの形で反映されている可能性がある。

第5章 「目的」要素と「付帯状況」要素を持つ複文表現

5.1 はじめに

第3章、第4章では、「目的」を表す複文表現、「付帯状況」を表す複文表現の意味を分析し、記述した。それを踏まえ、各カテゴリーを特徴付ける抽象的な意味も類義表現間から抽出して記述することができた。ここまで、「目的」と「付帯状況」というカテゴリーを個別的に議論してきたが、ここでは両カテゴリーには中間的な表現が存在することを示したい。具体的には、この章で中心的に議論する「～がてら」の意味が、両カテゴリーにまたがる複文表現として位置づけられるということを主張する。実際、後述するように、分析の結果得られる「～がてら」の意味には、目的、付帯状況の要素が折衷的に認められるのである。5.2で取り上げるように、「～がてら」の意味をめぐる先行研究の記述が一様ではないのは、この特性ゆえのことと思われる。しかし、言語が表す意味は本来、境界が曖昧で、段階性のあるものとする、複数カテゴリー間の中間的表現の存在、そして、どちらのカテゴリー成員ともとれる不安定さは、むしろ自然なことであると言えるだろう。とはいえ、このような不安定感、日本語を母語としない学習者にとっては習得を困難にする要因であり、対応する訳語も用例によって異なる。したがって、「～がてら」の典型的な意味は厳密に規定しておく必要がある。

5.2では、従来の意味記述を概観し、その妥当性と限界を論じる。5.3では、國廣(1982a)の文脈的作業原則に基づき前件、後件で表される内容を確認する。5.4では、対照的作業原則に基づき、「～がてら」の類義表現「～をかねて」「～かたがた」「～ついでに」と比較し、各表現との意味の違いを明示する。

分析の結果導かれた「～がてら」の意味は、目的、付帯状況とどのように関わっているのかを最後に論じ、その位置付けを行う。

5.2 先行研究について

従来の「～がてら」の先行研究は大きく次の3種類の記述に分類できる。

- ・ 「主」と「従」による意味記述
- ・ 「機会」による意味記述

- ・ 類義表現による意味記述

これらの意味記述が果たして妥当かどうか、順に検討してみる。

5.2.1 「主」と「従」による意味記述

「～がてら」についての先行研究は管見の限り、以下のようなものがある。(以下、下線は引用者による)

阪倉(1966:363)

ガテラは、副詞構成の接尾語ともいはれ、副助詞ともいはれてゐるものである。現在、「散歩しがてら本をかひにいく」のごとくにもちゐられた場合、この語がついてしめされてゐる事象(散歩すること)が従、そのしたに述べられてゐる事象(本をかひにいくこと)が主、といふ関係をしめしてゐる。

『日本国語大辞典』

動詞の連用形または体言を受け、「…をかねて」「かたがた」「ついでに」等の意を表す。「がてら」の受けている動詞が意味的に従、下に続く動詞が主である。

グループ・ジャマシイ(1998:79-80)

動作を表す名詞や動詞の連用形に付く。「X がてら Y」の形で、「X をかねて Y をする」という意味を表す。Y をすることで結果的に X もできることになるという状況で用いられることが多い。「…をかねて」「…かたがた」とも言う。

これらの先行研究を見ると、「～がてら」の意味記述は「前件は従(副)で、後件は主」という関係に基づいて行われている。しかし、他の国語辞典、文法辞典を見てみると「従-主」関係の逆転を示唆しているものがある。

『大辞林』

動詞の連用形及び体言に付き、ある事柄をしながら、同時に他の事柄をもする意を表す。「…がてらに」の形でも用いられる。…をかねて。…のついでに。…かたがた。上代末期からの語。現代語では「がてら」が付いて示されている事柄が主で、その下に述べられている事柄は副次的なものである場合が多いが、古くは、前件が従、後件が主であるのが一般であった。

この記述によると、現代語においては「主-従」だが、昔は「従-主」であったと、歴史の変遷を述べているが、用例などの具体的な手がかりがないため、その妥当性を判断することはできない。次も「主-従」関係を示している。

『日本文法大辞典』¹

あることをするに際し、それをよい機会として、他のことをも合わせて行う意を表す。後件の方が副次的な動作である場合が多い。

田中(2010:230)

「がてら」は何かのついでに付随的な行為を行うことを表す。名詞のほか、動詞の連用形に接続する。(略)「ついでに」「を兼ねて」に置き替えられるように、あとに副次的な動作行為を表す。

『日本文法大辞典』の記述は「主-従」としつつも、「場合が多い」ということは、「そうでない場合もある」ことも含んでおり、十分な意味記述とは言えない。また、田中の記述も同じく「主-従」の立場であるが、これを類義表現に共通する特徴として挙げている。文の構造上は、後件述語が主であるということが明らかであるが、それは複文とされるもの全てに言える文の構造である。いずれにしても、「主」と「従(或いは付随的、副次的)」という表現は文の構造を指しているのか、意味の関係を指しているのか、これらの記述を見る限り、判然としない。ゆえに、このような記述では、「～がてら」の意味を明らかにしたことにはならない。意味的に、どの部分が主要でどの部分が副次的かということは、必ずしも構文的な成分の評価とは一致せず、そこには別の吟味、例えば寺村(1983:38)が言うように、話し手・書き手の表現意図という観点からも見る必要があると思われる。

さて、田中(2010)は上の記述の数行後に「目的」による「～がてら」の意味が示されているが、同様のことは日本語教育の解説書の中にも見られる。

田中(2010:230)

一つのことをするとき、付け加えて関連的な行為をする。(A)を兼ねて(B)をするという意味である。(A)が本来の目的で、余裕があれば(B)を実行するという意味を表す。

岡本他(2008:58-59)

¹ 他に古語における接続助詞、接尾語としての意味記述があるが、本稿では現代語の意味のみを考察対象とする。

【意味1²】A(前件)の機会を利用してB(後件)をする。A(前件)が主目的である。

しかし、そもそも「目的」の程度差によって「～がてら」の意味を記述できるのだろうか。

(1) 地方出張しがてら、その土地の方言を蒐集するのが趣味。(田中 2010:230 例(298)i)

例(1)は、「主目的-従目的」関係を主張する立場で考えると、「出張しに地方へ行き、時間的余裕があれば、その土地の方言を蒐集する」という解釈になる。むしろ、そのような解釈は可能である。しかし、主体が仕事よりも方言蒐集に執心である場合、その行動を表現するのに、前件と後件を入れ替えれば事足りるのであるだろうか。

(2) その土地の方言を蒐集しがてら、地方出張する。

この例からは、主目的の「方言を蒐集する」という機会を利用し(あるいは余裕があれば)、「出張する」という解釈はできない。この例の解釈はむしろ、例(1)での読み「出張しに地方へ行き、時間的余裕があれば、その土地の方言を蒐集する」に合うのではないだろうか。結局、目的に程度差が感じられるというのは文脈次第であり、「～がてら」の意味ではない。

次に、この前件と後件の関係を「付帯状況」としたものに日本語記述文法研究会(2008 以下「研究会」)がある。

研究会(2008:248)

付帯状況を表す様態節には、「ながら」「つつ」、連用形+連用形、「まま」、テ形、「きり」「なり」「ついでに」「がてら」がある。(略)主節の事態が成立するときに同時に付随的に成立している同じ主体の状態・状況を表す。

第4章でも触れたが、この記述内で言われている「付帯状況」という文法用語について寺村(1983)は、「文の主要部の表す事態と並行して存在したこと」という内容を指すと述べた上で、「それを文法用語として使っていくためには、そのいろいろな形と、それぞれの形がもつ一般的な意味、そのような構文の成立する文法的条件と表現意図³とが記述されねばな

² 岡本他(2008)は【意味2】として、「A(前件)という目的でB(後件)。前件は後件の場所で達成される目的である。後件は前件の目的場所へ向かうという意味だが、前件の達成だけでなくそれ以外の目的も含んでいる」とあるが、それに従えば、後件は「前件が実現する地点への移動表現」ということになる。しかし、「夕涼みがてら、花火でもしようか。(『テーマ別 中級』)のような例の「花火でもする」は、状況によっては「家の中から、家の外へ移動する」ということを表すことがあるかもしれないが、それは文脈によって決定されるものであり、必ずしも「花火でもする」が指す事態ではない(その場にいたままでも発することが可能である)。したがって、後件を移動表現に特定する記述も適当ではない。

³ 寺村(1983:39)は「(構文的な)主要部分が特別の意味をもつ、そういうことを聞き手に伝えたいということであろうと理解される」と述べている。

らない」としている。この考え方に立つと、上の記述は「一般的な意味」と「文法的条件」は記述されているが、話し手が「一般的な意味」を使って聞き手にどんなことを伝えたいかという、表現意図の部分についての言及が欠けているように思われる。なお本稿では、5.4.3の「～ついでに」との比較で、「～がてら」が「口実」という表現意図を持ち得るという言語事実を述べる。

ところで研究会(2008:252)は、特に「～ついでに」と「～がてら」を取り上げて次のように述べている。

「ついでに」と「がてら」は、従属節の事態が先に決定されていた事態であり、それに追加して行う事態を主節が表す。両者は接続が違い、また「がてら」は漢語動詞にも接続する。

(3) 手紙を出すついでにコンビニで飲み物を買ってきた。

(4) 散歩(し)がてら、友人が訪ねてきてくれた。

「がてら」はやや古めかしい表現である。

記述に即して例(4)を解釈すると、「散歩」というのが、主体(友人)がまず行おうと決めていた事態であり、それに追加して「(話者⁴のところへ)訪ねてきた」ということになるだろう。先の「付帯状況」ということと合わせると、「友人はまず、散歩しようと考えていて、その心理状態で(話者のところを)訪ねてきた」ということになるだろうか。ただし、この意味記述を見る限り、「～ついでに」と「～がてら」の接続形式以外の相違点として指摘されていることは、「～がてら」が「やや古めかしい表現」であるという点のみである。果たして「～がてら」は、「漢語動詞に接続する」、「やや古めかしい」という点で「～ついでに」を限定した表現に過ぎないのか。「～ついでに」と「～がてら」との違いについては5.4.3で詳しく見ることにする。

以上、「主」と「従」による先行研究の記述を見てきたが、それは行為に対する主体の思い入れの程度差なのか、あるいは実現を望む目的の度合いなのか。そもそも「主/従」とは何を表しているのか。この点に関して明確に示されているとは言い難い。

5.2.2 「機会」による意味記述

先の『日本文法大辞典』、岡本他(2008)は、意味記述の中に「機会」という表現を用いて

⁴ 本稿においては、「話者」は「書き手」も含めることとする。

いた。他にも「機会」を用いている辞典があるので、併記し、検討してみたい。

『日本文法大辞典』

あることをするに際し、それをよい機会として、他のことをも合わせて行う意を表す。後件の方が副次的な動作である場合が多い。

岡本他(2008)

【意味1】 A(前件)の機会を利用してB(後件)をする。A(前件)が主目的である。

『日本語文法大辞典』⁵

あることをする機会に、同時にほかのことも合わせて行う意、あることをするに際し、それをよい機会として、ほかのことを重ねて行う意を表す。「…のついでに」「…を兼ねて」の意。

『新明解国語辞典』

ある事をしに出かけた時などに、それをよい機会として、何かをすることを表す。

『学研国語大辞典』

(動作を表す語について)何かをすることを機会に他のことも合わせてする意を表す。…をかねて。…のついでに。

これらの記述によると、「がてら」の先行部分で表される内容が「機会」ということになるのであろうが、そもそも「機会」とはいったいどういうことであろうか。もう少し詳しく理解するために、主な辞書を見てみると、以下のような記述であった。

機会：

『日本国語大辞典』 事を行うのにちょうどいい時機。

『広辞林』 都合のよい場合。ちょうどよいおり。きっかけ。チャンス。

『大辞林』 ある行動をするのに最もよいとき。おり。チャンス。

『広辞苑』 何かをするのに好都合な時機。おり。しおどき。チャンス。

『学研国語大辞典』 あることを行うのにちょうどよい時機。

上の各記述を踏まえ、ここでは「機会」をくあることをするのに、ちょうどよいと思われ

⁵ 他に古語における接続助詞、接尾語としての意味記述があるが、本稿では現代語の意味のみ考察対象とする。

る時>という意味と考えておく。これを「～がてら」の意味に当てはめると、<あることをする>というのは、後件行為ということになる。したがって、「機会」を用いた先行研究の「～がてら」の意味は、<あること(前件)をちょうどよい時と考えて、あること(後件)をする>ということになる。この意味記述が適切かどうか、検討してみたい。

(5) 私も散歩がてら雑司が谷へ行ってみる気になった。(夏目漱石『こころ』)

例(5)は『日本語文法大辞典』に用例として示されているものであるが、前述の意味記述に即して考えると、「散歩をちょうどよい時として、雑司が谷へ行ってみる」となる。この例文に関しては、意味記述に問題は感じられない。同じように、前件を「機会」と考えることが可能な実例がある。

(6) フクニチ新聞(廃刊)などで漫画を描いていたころ、新婚旅行がてら行ったのが福岡県浮羽町(現うきは市)。(朝日新聞、2007年10月28日)

(7) このところのドイツ再統一の動きの中で、国境を大戦前に引き戻せというドイツ民族主義が盛り上がり、観光がてら元の家を訪ねるドイツ人が増えているのだ。

(AERA、1990年4月24日号)

まず例(6)から考えてみる。「機会」という記述に従えば、「新婚旅行」という、ちょうどよい時を利用して、福岡県浮羽町へ行くことを表していると言うことは可能である。例(7)の「観光」ということは、なかなか実現することができなかった「元の家を訪ねる」という行為を可能にするため、確かに「機会」と考えることができる。

以上を見てくると、この「機会」による意味記述は妥当性があるように感じられる。しかし、次の例(8)、(9)はどうだろうか。

(8) 京都においでの際は、お遊びがてら、ぜひ私どものところへもお立ち寄りください。

(グループ・ジャマシイ(1998:79)の例(5))

(9) 通勤の時に我が家の前を通りがかる七男は、週に1回、一人暮らしの私の様子を見守りがてら家に立ち寄って、夕食を共にしてくれます。

(朝日新聞、2006年11月28日)

例(8)は、「遊び」というちょうどよい時を利用して「訪問する」のではなく、「堅苦しい訪問ではなく、遊びに来る気持ちで訪ねてくれ」ということを表しており、前件は「機会」

とは言えない。例(9)の場合、「見守る」というのは「家に立ち寄る」のにちょうどよい「機会」ではない。「週に1回家に立ち寄ることで、様子を見守っている」という事態を表しているのである。「機会」という意味特徴を使おうとするならば、この例の場合はむしろ後件行為のほうが「機会」と考えられるのではないだろうか。

以上から、「機会」という表現は、一部の「～がてら」の文の意味記述には当てはまるが、「～がてら」の意味特徴を十全に説明するものではないということになる。

5.2.3 類義表現による意味記述

これまで見てきたもの以外のほとんどの辞書類の意味記述は、実際には類義表現を記載することによってなされている。

『岩波国語辞典』

…を兼ねて(…)する。…かたがた。「花見がてら歩いていく」

『国語大辞典』

動詞の連用形または体言を受け、「…をかねて」「かたがた」「ついでに」等の意を表わす。「花見がてらお参りに行く」

『角川国語大辞典』

[動作性体言または動詞の連用形に付いて]ある事のついでに、他の事をするのという。…を兼ねて。…するついでに。「散歩がてら買物をする」

『小学館日本語新辞典』

動詞の連用形または体言を受け、あとの行為に兼ねてする行為を示す。「…を兼ねて」「かたがた」などの意。「遊びがてらおいでください。」「散歩がてら駅まで行こう。」

『広辞苑』

一つのことをするついでに他のことをするのにいう接続助詞。用言の連用形または体言に付く。…のついでに。…かたがた。「散歩がてら本屋に立ち寄る。」

『日本語大辞典』

《体言や動詞の連用形に付いて》…しながら。…のついでにの意を表す。かたがた。「散歩がてらおいでください。」

『広辞林』

《動詞連用形及び体言に付く》二つの動作・事がらをかねて行う意を表す。この場合、ある事がらをするついでにある事がらをするの意であり、後者の方は副次的な動作である場合が普通である。…をかねて。…のついでに。(奈良時代末期からの語。副詞を作る接尾語とする立場もある。体言に付く場合、その体言は、連用形名詞など、動作性の強いもので、この場合は、副助詞であるとする立場もある。)

『岩波国語辞典』で「花見がてら歩いていく」という用例が挙げられているが、他の辞書で意味説明に使われている「～ついでに」を使った場合、「花見のついでに歩いていく」という非文を作り出すことになる。また、『国語大辞典』では「花見がてらお参りに行く」という用例が「をかねて」「かたがた」「ついでに」という3つの類義表現とともに提示されている。しかし、「花見をかねてお参りに行く」と「花見かたがたお参りに行く」、「花見のついでにお参りに行く」という文は「花見という行為とお参りに行くという行為が実現される」という意味においては同じであると言えるが、話者が「花見」と「お参りに行く」という行為をどのように捉えているかが異なる。その違いについては後で検討するとして、これらの辞書の意味記述は、「～をかねて」「～かたがた」「～ついでに」が類義表現であることを示しているに過ぎず、「～がてら」の意味を真に記述しているとは言い難い。

5.2.4 先行研究の問題点

ここでは先行研究を3つのタイプに分け、それぞれ妥当性を検討してきた。まず、「主」と「従」に関する意味記述は結局、「主／従」とは何を表しているのかが明確でないという点で問題があった。付帯状況として考える先行研究もあったが、類義表現との違いが示されていなかった。

「機会」を使った意味記述については、ある用例に対しては確かに妥当であるということを確認したが、それに合わない例もあるため、「～がてら」の全体を捉えたものではないという結論に至った。さらに精緻化した意味記述をする必要がある。

類義表現による意味記述は、代替できない例もあったため、それらを「～がてら」との比較の対象として考えることはできても、「～がてら」の意味の記述には用いることはできないということを示すことができた。

以上の問題点を解決すべく、分析を始めることにしたい。

5.3 文脈的作業原則による分析

ここではいくつかの用例に基づき、「がてら」の先行部分に共通する特徴、及び後件部分に共通する特徴を探ることとする。

- (10) 煙草を買いがてらコンビニに立ち寄る。
- (11) 雑誌を返しがてら彼女のところへ行ったのです。(『エディプス』)
- (12) 現場をご案内願いがてら、引っぱりだしたわけです。(『点と線』)
- (13) よく小さな焚木を拾いがてらずんずん下の方まで降りていったりする。(『ト居』)
- (14) 散歩しがてら買い物をする。
- (15) 様子を見がてらお菓子を持っていく。

同位置の原則(2.5.1 参照)により、「がてら」に先行する部分は<人間が自分の意志で行う行為>ということがわかる。つまり、「しようと思っ

てする行為」である。その行為は例(10)から(12)のように単数回を示す行為もあれば、(13)のように断続的に行われる行為、(14)のように継続的に行われる行為、また(15)のように単数回行為とも、断続的に何回か行われる行為とも考えられる場合がある。

一方、後件はどうかというと、前件と同じように<人間が自分の意志で行う行為>と考えられる。したがって、「がてら」を挟んで前件、後件とも<人間が自分の意志で行う行為>ということになる。そうなると、前件と後件の関係性が意味を記述する上で問題になってくる。この問題については、次節の対照的作業原則(類義表現との比較)を経ることで明らかにされるだろう。ここでは引き続き、先行研究でも指摘されている、「動作性の名詞(体言)にも接続する」場合の「がてら」の特性に注目してみたい。まず、「動作性の名詞」について、先行研究を踏まえて確認しておこう。小林(2004:67-70)は「サ変になり得る動詞」を「動名詞」と呼んでおり、「～をする」構文で使えるかどうかという観点から、動名詞を次のように分類している。

「～をする」構文で使える動名詞

運転、掃除、研究、勉強、修理、自殺、散歩、旅行、回転(主語が「スケート

選手」の場合)…

「～をする」構文で使えない動名詞

悪化、炎上、誕生、存在、沈没、荒廃、墮落、流行、回転(主語が「モーター」
の場合)、…

このリストから、「がてら」に先行する動名詞は、「～をする」構文で使える動名詞である
ということがわかる。「～をする」構文で使えるかどうかは何によって決まるのかという
と、小林は動名詞の非対格性⁶によるものだと述べており、さらに非対格性のパラメータをも
とにして動名詞を次のように分けている。

「～をする」構文で使える動名詞

AGENTIVE(動作主格)+ATELIC(非完了):「散歩」

AGENTIVE(動作主格)+TELIC(完了):「自殺」

「～をする」構文で使えない動名詞

NON-AGENTIVE(非動作主格)+ATELIC(非完了):「回転」(主語が「モーター」の場合)

NON-AGENTIVE(非動作主格)+TELIC(完了):「沈没」

さらに、「～をする」構文の中でも「動作主格+完了」は「がてら」に先行しないと考
えられる。

(16) *自殺がてら睡眠薬を大量に飲み込んだ。

したがって、漢語動名詞の中で「がてら」に先行することができるものは、動作主体の意
志で行える行為、かつ非完了のものであると限定できる。また、動作性かつ非完了であ
れば漢語以外の語でも同様に考えることができる(例:ダイエットがてら散歩する)。本稿では
このような名詞を「動作性名詞」と呼ぶことにする⁷。

それでは、「～がてら」の形で頻出する「散歩」を例に、動作性名詞の場合の意味特徴を
考えていこう。

(17) 散歩がてら買い物をする。

⁶ 日本語の動詞の非対格性については、小林(2004:37-47)で詳しく論じられている。それによると、非対格性とは、動作主性の有無を前提とし、それと動作の完了性との組み合わせによって決定されるとしている。

⁷ 国広(1997:211)で言及されている「和語動詞の連用形から作られた名詞、「表現」などの動詞的漢語名詞」も「動作性名詞」と見なす。

(17)は(14)の「散歩する」を「散歩」という動作性名詞に換えた文である。例(17)における「散歩」は、果たして上述の〈人間が自分の意志で行う行為〉と同様に捉えることができるのであろうか。この点を検証するには、まず動詞が表す意味と名詞が表す意味について確認しておく必要がある。その足がかりとして Langacker(1987:189)を引用する。

A noun, for example, is a symbolic structure whose semantic pole instantiates the schema [THING]; or to phrase it more simply, a noun designates a **thing**. In similar fashion, a verb is said to designate a **process**, whereas adjectives and adverbs designate different kinds of **atemporal relations**. Our immediate task is to arrive at a motivated description of the [THING] category. I propose that a thing is properly characterized as a **region in some domain**, i.e. every nominal predication designates a region. Count nouns represent a special but prototypical case, in which the designated region is specifically construed as being **bounded** in a primary domain.

例えば、名詞というものは、意味極が[THING]スキーマを具体的に示す記号的な構造であり、もしくは、それをより端的に表現するならば、名詞はモノを表す。同様に、動詞はプロセスを表していると言えるが、形容詞と副詞は、様々な非時間的関係を表していると言える。我々の目下の課題は、[THING]カテゴリーの、動機付けられた説明に至ることである。モノというものは、ある領域の一部として適切に特徴付けられている、すなわち、すべての名詞的意味はある部分を表しているということを提案する。可算名詞というのは特別であるけれどもプロトタイプ的な事例を表していて、そこで指示された部分というのは、特に基本的な領域において有界であると解釈される。

(日本語訳は引用者による)

この Langacker の記述によると、動詞はプロセス、つまり時間軸を含む関係を表すということであるが、これに対し、名詞はある領域のある一部をモノとして見ている。それでは、「散歩」の意味を形成する領域とはどのようなものか。実際には、ある一つ概念(例えば「散歩」という概念)を形成する領域は一つとは限らず、複数の領域の組み合わせで形成されることが多い。この点について、Langacker(1987:147)で次のように定義されている。

Every predicate is characterized relative to one or more cognitive domains, collectively called its matrix.

どのような意味も、一つ、あるいはそれ以上の、集合的にマトリクスと呼ばれる認知領域に関係して特徴付けられる。(日本語訳は引用者による)

この「ドメイン・マトリクス(domain matrix)」という考えに関しては、Croft(2006:273)が次のように例を挙げて示している。

In fact, a concept may presuppose several different domains. For example, a human being must be defined relative to the domains of physical objects, living things, and volitional agents (and several other domains, e.g. emotion). The combination of domains simultaneously presupposed by a concept such as [HUMAN BEING] is called a domain matrix.

実際に、概念はいくつかの異なる領域を前提とするだろう。例えば、人間というものは物体、生き物、そして意志的主体といった領域(ほかに、感情といった領域)に関係して定義される。[HUMAN BEING]のような概念によって同時に前提とされる領域の組み合わせはドメイン・マトリクスと呼ばれる。

(日本語訳は引用者による)

これを踏まえて、「散歩」の意味を改めて考えてみよう。梶川(2009)によると、「散歩」の基本的な意味は<気晴らしや健康を目的として戸外をゆっくりと移動する>ということであるが、この意味も以下に見るように、様々な認知領域が関わって成立していると考えられる。用例を観察しながら見てみよう。

- (18) 『猫と見つける、かわいいモノ・コト』の本文が、残すところ後3話になりました。でも、予定よりは遅れ気味。ちょっと焦ったせいか、煮詰まってしまいました!! 仕方ないので、散歩にでもいって気分転換をすることに。

(<http://plaza.rakuten.co.jp/teateastory/diary/200801270000/>)

- (19) 健康診断を受けて以来、食後の散歩が日課になった。
- (20) とにかく朝の散歩は、自然の姿や営みがこの目に飛び込んできて驚きで一杯です。

(http://blog.livedoor.jp/shoji_h/archives/51350681.html)

- (21) 発症後 4 ヶ月目に、手術を受けた病院の紹介で特殊疾患施設に転院し、現在も治

療に専念しています。私たちは、今も回復を信じて、週に 2 回家族が交代して車椅子で散歩したり、声を掛けたりして介護しています。

(<http://home.hiroshima-u.ac.jp/naika3/jsa/faq/index.html>)

例(18)は「気分転換」とあるように、「散歩」が「心理的变化」に関わるということがわかる。例(19)では、「健康診断を受けて」ということから、「散歩」が運動の一つとしての「歩行」と関連づけられる。例(20)の場合、「散歩」が周囲に対する「観察」を含んでいる。例(21)の「散歩」は一種の「治療」と考えることができる。ドメイン・マトリクスの考え方に従うと、「散歩」は少なくとも「心理的变化」「歩行」「観察」「治療」といった領域を前提に特徴付けられていることがわかる。そして例(18)から(21)で観察されたように、実際の使用の場面においては、それを構成するいずれかの領域が際立ち(highlighting)をもつようになる。このような現象は、Croft(2006:281)で論じられている [BOOK] の概念理解とも共通する。

Consider the following sentences:

(22) *This book is heavy.*(原文では例(21))

(23) *This book is a history of Iraq.*(原文では例(22))

The concept [BOOK] is profiled in (at least) two primary domains, the domain of physical objects and the domain of meaning or semantic content. In (22), the physical object domain of *book* is highlighted by virtue of the requirements of the predicate *heavy*. In (23), on the other hand, the semantic content domain of *book* is highlighted, again due to the requirements of the predicate *be a history of Iraq*.

次の文について考えてみよう。

(22) この本は重い。

(23) この本はイラクの歴史に関するものだ。

[BOOK]の概念は(少なくとも)二つの基本的領域、すなわち物体の領域と、意味または意味的内容という領域でプロファイルされる。(22)では *heavy* という述語の要請に従って、*book*の物体領域が際立っている。一方、(23)では、*be a history of Iraq* という述語の求めに応じて、*book*の意味的内容の領域が際立つ。

(日本語訳は引用者による)

以上の考察を踏まえると、「散歩がてら」と言ったときの「散歩」は、文脈に応じて「心理的变化」「歩行」「観察」「治療」のいずれかの領域が際立つと考えられる。例えば次の例は「木々の葉の色づきに誘われて散歩に出る」と言っているように、「散歩がてら」の「散歩」には絵画展や写真展までの道中の「観察」という<行為>が際立っている。

- (24) 木々の葉の色づきに誘われて散歩に出るには、もってこいの日々が続いている。芸術の秋ということもあって、あちこちの美術館や百貨店で充実した絵画展や写真展が催されており、私も散歩がてらいくつか見に行ってみたが、その混雑ぶりには驚かされることがある。(毎日新聞、1995年11月14日)

また、次の例は見学者の感想として「何となく気が休まる」とあるように、「散歩」には「心理的变化」の領域が際立っているが、これは<行為>というより、<心理的、身体的効果>を表している。

- (25) 四季の香公園温室植物園は、練馬区の光が丘団地の真ん中であって、散歩がてらぶらっと訪れる人が多い。規模は小さいが、ビルの谷間の別天地の印象。見学者の感想は「何となく、気が休まる」だ。(毎日新聞、1993年3月5日)

以上から、「散歩」は<行為>のみならず、<心理的、身体的効果>をも表すと考えられる。では、「散歩」以外の動作性名詞はどうだろうか。

- (26) 陸上の練習がてら新聞配達をする。
 (27) 運動がてら掃除をする。
 (28) ドライブがてら車を運転した。
 (29) 夕涼みがてら散歩した。

例(26)から(29)は<行為>としての意味内容を持つ一方、<効果>としての意味も認めることができる。すなわち、(26)の「練習」は<ある動作を反復して行うことによって得られる技術の向上>、(27)の「運動」は<肉体に負荷を与えて動かすことにより得られる肉体の活性>であり、この二例に共通する特徴は<身体的効果>ということになる。 (28)の「ドライブ」は<車を運転しているときに得られる爽快感>、(29)の「夕涼み」は<暑い時期の夕刻に戸外へ出て外気に触れることによって得られる爽涼感>を表し、これらは<心理的効果>を表す。

以上、文脈的作業原則の「同位置の作業原則」により、「がてら」の先行部分と後続部分には次のような特徴が認められる。

(30) 先行する部分の意味特徴は<人間が自分の意志で行う行為>または<行為の効果>

(31) 後続する部分の意味特徴は<人間が自分の意志で行う行為>

(30)と(31)の記述はまだ具体的なものになっていないが、次の対照的作業原則を経ることによって、記述はさらに精緻化される。

5.4 対照的作業原則による分析

この節では、先行研究でも挙げられている「～がてら」の類義表現との比較を行い、各表現の意味とともに「～がてら」の意味を記述する。比較の対象とする類義表現は、「～をかねて」「～かたがた」「～ついでに」である。なお、分析に先立ち、「～がてら」の各類義表現に関する先行研究を概観する。そののち、「～がてら」との共通の意味特徴を抽出することで、類義表現であるということを認定し、その上で比較、検討を行っていく。

5.4.1 「～がてら」と「～をかねて」

5.4.1.1 「～をかねて」の先行研究

「～をかねて」は、「かねる」という動詞の連用形に「て」がついたものである。南(1993:79-85)は「～テ」の形式を4つに分類している。そして、～テ₁をA類、～テ₂、～テ₃をB類、～テ₄をC類としている。

～テ₁⁸: 主文で表されるおもな動作、状態などと平行して行われる副次的な動作で、おもな動作、状態のようすなどを描くもの。いわば状態副詞的。

～テ₂⁹: <継起的または並列的な動作・状態>の意味を表すもの。

～テ₃¹⁰: <原因・理由>の意味を表すもの。

～テ₄¹¹: C類に入れてよいと思われるもの。

⁸ 「髪ヲフリミダシテトビカカル。」「手ヲツナイデ歩キマシタ。」といった例が挙げられている。

⁹ 例として「船ハ、エンジンヲ停止シ、錨ヲ投ゲタ。」(「停止シテ」という形式ではないが、「～テ₂」に分類されている)「左手デカバンヲカカエテ、右手デ必死ニ吊皮ニブラサガッテイタ。」が挙げられている。

¹⁰ 「キノウハ、カゼヲヒイテ会社ヲ休ミマシタ。」「一行ノ到着ハ、途中ノ道路ガ混シデ予定ヨリ大ハバニオクレタ。」といった例が挙げられている。

南の分類法に照らしてみると、「～をかねて」は、述語部分の要素としては「動詞」と「～マス」であり¹²、また、述語的部分以外の成分は「～ヲ」のみである。ガ格も従属句内だけにおさまらない。ゆえに「～をかねて」はA類、つまり、～テ₁と考えることができる。「～をかねて」という表現形式は類義表現の意味を記述する場合に用いられることが多いが(5.2.3参照)、この表現自体の意味を記述したものはない。「かねる」という動詞の意味としては、先行研究で「一つの物や一人の人が二つ以上の役目や働きをあわせ持つこと」(『日本語文法大辞典』)とされる。「かねる」という動詞の意味が反映されている形式であるため、本稿で得られる記述も、この記述から大きく外れることはないが、「～がてら」の意味との違いを明示したい。

5.4.1.2 類義表現としての認定

まず「～がてら」と「～をかねて」が類義表現であることを確認する。先に「～がてら」の用例のうち、「～をかねて」に言い換えることができるものから見てみることにする。

(32) a. 06年12月。毎朝通っていた同市元町の竹瓦温泉で、毎朝、同じ湯船につかっていた仲間から、「リハビリがてら、88湯を歩いて回ってみたら」と提案された。

(朝日新聞、2007年6月25日)

b. 「リハビリをかねて、88湯を歩いて回ってみたら」と提案された。

(33) a. 鬼子母神の市は、昨年11月に始まった。朝方は近所の人が散歩がてら顔を出し、昼過ぎになると子連れの夫婦や女性たちがやってくる。

(朝日新聞、2007年6月12日)

b. 朝方は近所の人が散歩をかねて顔を出し、昼過ぎになると子連れの夫婦や女性たちがやってくる。

例(32)a、bは「88湯を歩いて回ることはリハビリになるから、してみたら」と提案した

¹¹ 「タブンA社ハ今秋新機種ヲ発表スル予定デアリマシテ、他社ノ多クモオソラクソレニ対抗スル計画ヲ考エルコトデショウ。」といった例が挙げられている。

¹² 「～をかねさせて<使役>」「～をかねられて<受身、尊敬>」「～をかねてもらって<授受>」といった形では現れない。しかし、「～をかねまして」という形では限定的に表現することが可能である。

・つきましては ご報告とご挨拶をかねまして、心ばかりの小宴を催したいと存じます。

(<http://www.kamizukan.jp/wedding/handmadeinfo/manual/sample/sample4.htm>)

文である。つまり、前件内容は後件行為から期待される効果である。次の例(33)a、b はともに、近所の人は「鬼子母神の市に顔を出すことで、その行為が散歩にもなる」と考えている。次に「～をかねて」の例で、「～がてら」で言い換えることができるものを挙げる。

(34) a. 加治屋氏は自宅に待機し、支援者に台風見舞いをかねて電話をかけた。

(朝日新聞、2007年7月15日)

b. 加治屋氏は自宅に待機し、支援者に台風見舞いがてら電話をかけた。

(35) a. 事務所のPR をかねて ネット上で書のデザインを発表したところ、ロゴの注文が増えた。(AERA、2002年8月5日号)

b. 事務所のPR がてら ネット上で書のデザインを発表したところ、ロゴの注文が増えた。

例(34)a、b では、加治屋氏は「支援者に電話をかけることによって台風見舞いもできる」と想定、期待している。また、例(35)a、b は、事務所が「ネット上で書のデザインを発表することが事務所のPRにもなる」ということを期待していることを表している。

例(32)から例(35)までの比較から、「～がてら」と「～をかねて」には、＜後件をする過程内で、前件内容が実現できると考える＞という共通する意味が認められるため、類義表現とすることができる。

5.4.1.3 比較分析

ここでは、「～がてら」のうち「～をかねて」では言い換えられない例、または異なる事態を表す例を挙げ、それらを比較することで「～がてら」の特徴の一部を明らかにしたい。

(36) a. 仕事の後の食事がてら酒を軽く飲んだだけ。(週刊朝日、2006年5月19日)

b. 仕事の後の食事をかねて酒を軽く飲んだだけ。

例(36)はともに「酒を飲む」という行為の過程内で「食事」、つまり何か食べ物を食べるという事態を表している。しかし、次の例(37)のように「食事がてら(家まで)送る」は「食事をかねて(家まで)送る」と言い換えることはできない。

(37) a. 映画の前半は、ごく自然に流れていく。東京でカメラマンとして活躍する弟(オダギリジョー)が、母親の一周忌で帰郷する。頑固な父と暮らす兄(香川照之)が経

営する田舎町のガソリンスタンドで、幼なじみの女性(真木よう子)と遭遇。兄の手前、食事がてら送っていきと言いながら、さっそくアパートに上がり込んでしまう。(朝日新聞、2006年7月21日)

b.*兄の手前、食事をかねて送っていきと言いながら、さっそくアパートに上がり込んでしまう。

例(36)の後件行為「酒を飲む」とは、もちろん「酒類を飲用する」ということであるが、実際に繰り広げられる「酒を飲む」事態を構成する要素には、「酒類を飲用する」という行為以外にも「酒肴を食べる」「仲間と話す」「ストレスを発散させる」などといった行為が想定される。これら「酒を飲む」という行為で統合される複数の要素は、ある共同体に属する人々が日常の経験から身につけた知識の型「フレーム」¹³を共有していることによって想定できるものである。そして、「酒を飲む」というフレームを構成する要素の中の「酒肴を食べる」という行為は、「食事」として考えることができる。つまり、後件行為「酒を飲む」に含み得るある行為を、「～をかねて」で示すことによってこの場合の後件行為の構成要素として認定しているのである。

(37)a は女性をアパートまで送っていく途中で食事をするということを表している。例(36)と同じように考えてみると、後件行為「(家まで)送る」という行為は、例えば「歩く」「乗り物に相手を乗せ、乗り物を操縦する」「案内をする」「周囲の危険から守る」などが関連する行為として想定できる。しかし、「(家まで)送る」という行為を構成するこれらの要素の中に例(36)のような「食事」に結びつくものはないため、(37)b のように言うとなんまり不自然になる。つまり、「～をかねて」は、後件行為を構成すると想定される要素のうち、前件で示される行為は確かに含まれていると認められる時に用いられる。

一方、「～がてら」は後件行為の開始から終了までの間に前件の内容の実現が可能である

¹³ 例えば我々は(話し手も聞き手も)「乗り物に乗って出発点から目的地に到達するというプロセス」として、次のような段階を経るということを共通の知識として持っている。

(0)前提—乗り物(自動車や自転車)を所有している、あるいは乗り物(電車やバスやタクシー)が利用できる。

(1)出発点(自分の家など)から乗り物まで歩いて移動する。

(2)乗り物に乗り込む。

(3)乗り物で移動する。

(4)乗り物から降りる。

(5)目的地まで歩く。

したがって、「今日はどうやってここに来ましたか?」という質問に対して、(0)から(5)までのすべてのプロセスを表現しなくても、「最近、車を買ったんです。」というプロセスの前提の段階を述べるだけで、コミュニケーションは成立する。なぜなら、話し手も聞き手も共通の知識を共有していて、他の段階については推測可能であるからである。このように、日常の経験を一般化することによって身につけた、複数の要素が統合された知識の型を「フレーム」という(靱山 2002:28-31)。

ということである。以下の例によってこの点を検証してみよう。

(38) a. 郵便局で年賀はがきの当選番号を確認がてら、切手を購入した。

b.*郵便局で年賀はがきの当選番号確認をかねて、切手を購入した。

(39) a. 通勤がてら子どもを保育園に送る。

b.*通勤をかねて子どもを保育園に送る。

(40) a. 「世界で一番住みやすい街」に選ばれた、海と山と森に囲まれ、自然と調和した街バンクーバーで、ハイキング、サイクリング、カヤックなど、ウィスラーとはまた異なるアクティビティを満喫。昼食は地元の新鮮な素材を使ったグルメを堪能がてら、ショッピング。(http://www.hellobc.jp/season/summer7.html)

b.*昼食は地元の新鮮な素材を使ったグルメの堪能をかねて、ショッピング。

例(38)aは「切手を購入する行為の過程で、窓口に掲示されている年賀はがきの当選番号に目をやり確認する」ということを表す。これは後件行為の過程内で実現可能な行為である。しかし、「切手を購入する」行為を構成する要素として「当選番号確認」を考えることはできないため、「～をかねて」で言うことはできない。

例(39)aは子どもを保育園に送る過程で、「通勤する」という行為の一部が実現されると考えている。一方、(39)bの「保育園に送る」という行為の構成要素として「パトロール」「散歩」はあり得るかも知れないが、「通勤」は考えられない。したがって、(39)bのように「～をかねて」に言い換えることはできない。

例(40)aは「昼食の時間はショッピングをし、その過程内で地元のおいしいものを食べる」ことを表している。これもショッピングの行為を構成する要素について述べているのではなく、ショッピングの過程で実現可能であると期待する、「おいしい食べ物を食べる」という行為である。「ショッピング」を構成する要素には「商品を見比べる」「店員と話す」「いろいろな店に入る」「試着する」などが考えられるが、「グルメの堪能」は関連付けられない。したがって(40)bのように言うことはできない。

次に、「～がてら」で表される行為とはどのような類のものか、考えてみたい。

(41) a. 井伊恵治さんは、大の釣り好き。定休日の火曜日には遊漁船で泊沖まで出港し、イシダイやアジなどの大物を狙う。釣果のあった日の翌日は「常連さんに自慢が

てら、魚を料理するのが楽しみです」。(朝日新聞、2006年8月28日)

- b.*釣果のあった日の翌日は「常連さんに自慢をかねて、魚を料理するのが楽しみです」。

まず、例(41)aの「料理をする」というのは様々な作業過程、道具を構成要素として持っているが、「自慢」は構成要素ではないため、例(41)bのように「～をかねて」で言い換えることはできない。そして、(41)aで描かれる事態は「魚を料理し、そのできあがったものを常連さんに提供することで釣果を知ってもらい、賞賛を得ようとする」ということである。つまり、「自慢がてら」は後件の行為の過程で「自慢」という、＜話者にとって心理的に満たされた状態＞の実現が期待されている。

続いて、例(42)を見てみよう。

- (42) a. マクドナルド砂町銀座店も以前、砂銀時間で営業していた。いまは前後1時間延びて、午前10時～午後8時が営業時間。「商店街で働く人が仕事の前後に一服がてらコーヒーを飲みに行っちゃうんです」と店長の養田重光さん(37)は言う。(asahi.com 2005年11月12日)

- b.?商店街で働く人が仕事の前後に一服をかねてコーヒーを飲みに行っちゃうんです。

- c. 商店街で働く人が仕事の前後に前夜の野球の試合結果報告をかねてコーヒーを飲みに行っちゃうんです。

(42)aは「仕事の前後にコーヒーを飲みに来ることによって忙しさや緊張で失っていた気持ちの平静を少し取り戻す」ということを表している。これは(42)bのように「～をかねて」では言いにくい。これは後件の「コーヒーを飲む」がそもそも「一服」そのものであり、取り立てて構成要素として述べるのが不自然であるからだと考えられる。(42)cのように、「結果報告」であれば、「コーヒーを飲みに来る」という行為の一構成要素として考え得るが、必須の要素と言えるほどではないため、特に言語化する必要がある。そこで「～をかねて」を使うと、「コーヒーを飲みに来る」という行為の一構成要素として「結果報告」を示し、自然な文となる。では、「がてら」に先行する行為の特徴はどういったものか考えてみると、(42)aの「一服」は「忙しさや緊張で失っていた気持ちの平静を少し取り戻すために、たばこを吸ったり、飲み物を飲んだりすること」、つまり(41)aと同様、後件行為の過

程で行われる〈話者にとって心理的に満たされた状態〉の実現に向けられた行為である。

以上から、「～がてら」に先行する部分は程度の差はあるが、話者にとって望ましい状態の実現が期待されているという特徴が抽出できる。したがって、両表現の意味は次のように記述することができる。

(43) 「～がてら」句+後件：〈後件行為をする過程で、前件で表される望ましい状態、あるいは望ましい状態につながる行為が実現可能であると考えて、後件行為をする〉

(44) 「～をかねて」句+後件：〈後件行為を構成する要素として前件の行為があると認め、後件行為をする〉

5.4.2 「～がてら」と「～かたがた」

5.4.2.1 「～かたがた」の先行研究

「～かたがた」の意味は、「動詞を表す名詞に付いて、その動作をかねて、そのあとに述べる動作を行う」(グループ・ジャマシイ 1998)や「「～がてら」と同様に名詞に直接付いて似た意味を表す(略)。主に手紙文など改まった場合に使われます」(庵他 2001)のように、類義表現を用いた記述、そして限定的な使用場面を提示するに留まっていた。ところが、田中(2010:231)は特徴的な意味として、「「がてら」と似ているが、「気が向いたら」「時間があれば」といった気持ちの変化や個別の事情をとまなう」と述べ、以下の用例に基づいて「～がてら」と比較している。

(45) a. 食後の運動かたがた、散歩する。(cf.?食後の運動がてら)

(田中 2010:231 例(303)a)

b. 両親の墓参かたがた、帰省する。(cf.?墓参がてら)(同 (303)b)

c. 右、お願いかたがた、ご報告まで。(cf.?お願いがてら)(同 (303)c)

d. 散歩かたがた、古本屋に寄ってくるのが父のいつもの習慣だ。(同 (303)d)

しかし、「気が向いたら」「時間があれば」というのは「～かたがた」の特徴的な意味なのであろうか。もし、その意味を認めると、(45)cの「お願い」は状況によってはしなくてもいいことになるが、話者の真意はそうではあるまい。田中は、「～かたがた」は「～がてら」

とほとんど同じだとしつつも、他の先行研究と同じく、「調査」「旅行」「買物」などの動作用性名詞にしか接続しないとしている。このように、接続する語が限定されるという点は、興味深い指摘である。本稿では、これら「～かたがた」の形式を取り得る語に共通する特徴についても考察してみたい。

5.4.2.2 類義表現としての認定

まず「～かたがた」の用例のうち、「～がてら」で言い換えられるものから見ていく。

- (46) a. 国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞かたがた先生の所へ行って、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。(『こころ』)
- b. 国から旅費を送らせる手数と時間を省くため、私は暇乞がてら先生の所へ行って、要るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。
- (47) a. 先日、散歩かたがた森へ出かけた。背の高い木、太った木、コブをつけた木、空洞のある木、裂けた木、だれかに寄り添うように斜めにかしいでいる木、木はさまざまだ。(毎日新聞、1992年7月3日)
- b. 先日、散歩がてら森へ出かけた。
- (48) a. 札幌南の最後の打者を打ち取った瞬間、駒大岩見沢応援席の歓声は頂点に達した。(略)自宅に併設した寮で六十人の野球部員を預かっている佐々木啓司監督の妻の千明さんは、しばらくしてからようやく話せるようになった。「試合の苦しかったこと。でもこの喜びは格別です」。寮母歴十年。一人で切り回している。広島県出身で、八月に小中学校時代の同窓会がある、という通知をもらっていた。「ちょうどよかった。応援かたがた出席します。子どもたちに連れて行ってもらえるんです」と涙ぐんだ。(朝日新聞、1998年7月24日)
- b. 「ちょうどよかった。応援がてら出席します。子どもたちに連れて行ってもらえるんです」

(46)aは「暇乞」という行為と、「要るだけの金を一時立て替えてもらう」という行為が、「先生の所へ行った」ときに共に行うことができるということを表していて、(46)bのように「～がてら」で言い換えることが可能である。(47)aは「散歩」が「森へ出かける」という行為

と共に実現可能であることを示している。この例も(47)bのように「～がてら」で言い換えることができる。(48)aは北海道在住の主体にとって「(甲子園での試合の)応援」と「(広島での同窓会に)出席する」ということが両方実現できるということを表していて、それは(48)bのように「～がてら」で言い換えることが可能である。

次に「～がてら」の用例で「～かたがた」に言い換えることができるものを見てみる。

(49) a. 夏越の祓え(なごしのはらえ)は、著名な神社に行けば今でも行っている。宇都宮二荒山神社では、30日の午後境内で行われるが、筆者も何度か調査がてら拝見・参加したことがある。(朝日新聞、2006年6月27日)

b. 筆者も何度か調査かたがた拝見・参加したことがある。

(50) a. 健康の悪化が心配された金丸元副総理の山梨県白根町の私邸に、綿貫民輔元自民党幹事長(自民)や奥田敬和元郵政相(新進)らが見舞いがてら訪れるようになった。
(AERA、1995年3月27日号)

b. 奥田敬和元郵政相(新進)らが見舞いかたがた訪れるようになった。

(51) a. 彼はそのまま近い所を又井浪へ引きかえして来たが、間もなく池野のお勝が二三日前の礼がてら、鳥山が会場の帰り、絵かき仲間と他へ食事に廻った事を知らせに来た。(『晩秋』)

b. 彼はそのまま近い所を又井浪へ引きかえして来たが、間もなく池野のお勝が二三日前の礼かたがた、鳥山が会場の帰り、絵かき仲間と他へ食事に廻った事を知らせに来た。

(49)aは筆者が「宇都宮二荒山神社」へ行き、「夏越の祓え」という祭事を「拝見・参加」し、「調査」という行為も行うことを示している。この例は(49)bのように「～かたがた」で言い換えることが可能である。(50)aは「金丸元副総理邸を訪れる」という行為と「金丸元副総理の見舞い」という行為が、一度で実現できるということを表している。これも「～かたがた」で言い換えることができる。(51)aは「池野のお勝が、鳥山が会場の帰り、絵かき仲間と他へ食事に廻った事を知らせに来た」という事態の実現と「二三日前の礼」を述べる行為が実現されることを表していて、(51)bのように「～かたがた」で言い換えることが可能である。

以上から、「～がてら」と「～かたがた」は<前件内容と後件内容がともに実現可能>

いう意味において類義表現とみなすことができる。それでは引き続き、二つの表現の意味の相違について詳しく考えていくことにしよう。

5.4.2.3 比較分析

(52) a. 先日、免許取り立ての娘に軽自動車を買って、彼女の住む網走まで二人でドライブがてら車を走らせた。(朝日新聞、2006年4月18日)

b.*先日、免許取り立ての娘に軽自動車を買って、彼女の住む網走まで二人でドライブかたがた車を走らせた。

(52)aの「(買ったばかりの)車を走らせる」という行為は「免許取り立ての娘」にとっては実際には「運転の練習」である。しかし、この例で表しているのは「練習」という心持ちではなく、「ドライブ」、つまり<車の運転によって味わえる心理的爽快感>という<心理的に満たされた状態>で「車を走らせる」ということである。この例の「ドライブ」は、「運転をする」という行為よりもむしろ、「ドライブ」によって生じる<心理的に満たされた状態>を表していて「～かたがた」に言い換えられない。ただし、運転行為を指す場合は、例(53)のように「～かたがた」で言い表すことができる。

(53) 桑名郡長島町、長島温泉ナガシマスパーランドの屋内アイススケート場では、千人を超す入場者が、ノータイトで氷の感触を楽しんだ。名古屋方面や地元北勢地区からの若い男女五、六人のグループが、ドライブかたがた訪れるケースが目立ち、駐車場には約四千台の車がずらり。(中日新聞、1990年1月29日)

この例の「ドライブ」は、「散歩かたがた訪れる」に言い換えることが可能であるため、「訪れる」ための具体的手段としての行為を表している。

もう一つ例を見てみよう。

(54) a. ロフトは、インキューブから約四百メートル離れた商業ビル「ジークス天神」に出店する。(略)時間つぶしがてら来店し、商品を購入する顧客は少なくない。天神に来るたびに訪れるという福岡県太宰府市の女性会社員は「待ち合わせスポットとしても使えるので、ロフトが来てもここを離れることはない」ときっぱり言う。(日本経済新聞、2007年5月17日)

b.*時間つぶしかたがた来店し、商品を購入する顧客は少なくない。

(54)a は「インキューブ」という店舗の利点を表している。新規に開店する「ロフト」よりも優位にある要素が「待ち合わせスポットとして使える」ことである。それを「時間つぶしがてら来店する」と表現している。「時間つぶし」は<特定の時間までの空いた時間に感じる空虚感を解消すること>と考えられ、来店し、商品を見て回る行為によって、待ち合わせなどの「時間つぶし」という<心理的に満たされた状態>になっていることを意味する。このように、後件による<心理的に満たされた状態>を表す「～がてら」は(54)bのように「～かたがた」で言うことはできない。以上から、「～がてら」の前件内容が後件の行為から生じる<心理的に満たされた状態>の場合は、「～かたがた」で言い換えることはできないと言える。

次に「～かたがた」の例文を「～がてら」に換えた場合について検討する。

(55) a. 「この次にくるのは衆院の総選挙だ。衆院の先生方は、参院選のお礼かたがた、草取り(地元の選挙区回り)など十分準備を怠りなく、有効な休みを過ごされるように」——自民党竹下派の小沢一郎会長代行。(朝日新聞、1992年8月8日)

b.?衆院の先生方は、参院選のお礼がてら、草取り(地元の選挙区回り)など十分準備を怠りなく、有効な休みを過ごされるように

(55)a は、終わったばかりの「参院選」に協力してくれた人たちへまず「お礼」をし、その折りに「草取り」をするようにという、小沢一郎会長代行の指示を表している。この例を(55)bのように「～がてら」で言い換えると、「草取り」を行う過程内で「お礼」を述べるということを表すことになる。非文ではないが、「先に「草取り」ありき」となるため参院選の協力に対する謝意が薄れてしまい、たとえ本音では「草取り目的」であっても、政治家としてはそのような支持を失うような捉え方はしないだろう。例(51)でも「(お礼)」を使っているが、「～がてら」で言った場合の容認度の差は、主体にとっての「(お礼)」の重要度の違いが反映されていると考えられる。

ところで、「お礼」というのは<お世話になった人へ謝意を表す>という「他の人への働きかけ」の一つと言えるが、「働きかけ」ということに関しては、迷惑をかけた人へ謝罪することも一つの「働きかけ」である¹⁴。それについて次の例をもとに考えてみたい。

(56) a. わび状は各社員に郵送されてきた。「不渡りを出し全社員を解雇せざるを得なく

¹⁴ 本稿では、「働きかけ」を<それをする事で他者の気持ちに何らかの変化を生じさせること>という意味で用いている。

なった。おわびかたがたお知らせします」などといった内容だ¹⁵。

(朝日新聞、1998年4月25日)

b.?おわびがてらお知らせします

(56)a は「わび状」の内容を表しているが、「わび状」である以上、「おわび」がまず手紙の本題である。そして、「わび状」はそれだけではなく、「不渡りを出し全社員を解雇せざるを得なくなった」という理由を社員に知らせている。つまり、文面全体は前件で表されている「おわび」という「他の人への働きかけ」を行っているが、それが完了するまでのある一部を利用して後件の「理由通知」という行為を行うということを示している。かりに、これを(56)bのように「～がてら」で言い換えると、「お知らせする」という行為をする過程において「おわび」をするということを表し、主旨が「おわび」である「わび状」としては成り立たない。

実際の用例を眺めてみると、「かたがた」は「お礼」「おわび」「あいさつ」「報告」「お祝い」といった「他の人への働きかけ」と考えられる語に後続していることが多い。「他の人への働きかけ」ということをもう少し考えてみると、「お礼」「おわび」「あいさつ」「報告」「お祝い」に共通する特徴として、<その行為の対象者との関係を良化、あるいは強化する行為>が挙げられる。しかし一方で「苦情」といった、相手との関係が悪くなることを厭わない行為にも「かたがた」を使うことができる。

(57) a. いつも荷物が間違って配達されるので、今回も苦情かたがた隣家に荷物を持って行った。

b. 苦情を言いがてら、隣家に荷物を持って行った。

(57)a は「苦情を言いたくて自宅を出て隣家に向かい、その行為の結果(途中で)、隣家に荷物を持って行くという行為が実現できた」ということを表す。すなわち、「かたがた」に先行する部分の「他の人への働きかけ」とは、<主体が行為の対象者に伝えたい行為内容>を指していて、<その実現までの過程内で後件行為を行う>ということを表している。(57)a は(57)b のように言い換えることは可能であるが、捉え方が異なり、「隣家に荷物を持って行く」という後件行為の過程で「苦情を言う」という行為の実現を話者が期待していることを表す。

¹⁵ 原文では「おわびかたがたお知らせします」とあったが、引用者が補った。

ところが、実例を眺めていると、先の例(53)「ドライブかたがた訪れる」や、下の例(58)、(59)、(60)のように、「他の人への働きかけ」とは考えられない例も少なくない。

(58) a. 日向薬師周辺約2キロ四方にわたって、田のあぜ道や空き地に群生しており、シーズンになるとハイキングかたがた花を見にくる人が年々増えている。

(東京新聞、1997年8月28日)

b. シーズンになるとハイキングがてら花を見にくる人が年々増えている。

(59) a. 伯備線特急「やくも」の車窓から米子の間近で大山が見えた。雪を冠した姿が神々しい。これから境港に水木しげる版妖怪変化を見に行くのである。(略)ひと休みかたがた魚市場へ。境港は日本有数の漁港で、むしろその方が全国に知られる存在。(中日新聞、2008年1月11日)

b. ひと休みがてら魚市場へ。

(60) a. きノウ、偽装販売発覚で休業していた三重・伊勢の老舗和菓子店「赤福」が営業を再開した。(略)さて、もうすぐ春である。お伊勢さん参りかたがた、久しぶりにあの味か。どうも、旅心がうずくなあ。(中日新聞、2008年2月7日)

b. お伊勢さん参りがてら、久しぶりにあの味か。

(58)から(60)はすべて「～がてら」で言い換えることはできるが、捉え方が異なる。(58)aは「ハイキングを行う過程の所々で、群生している花を見に行くという行為を行う」ことを表しているが、(58)bは「花を見にくるという過程でハイキングが実現することを期待する」ことを表している。(59)aは「境港に水木しげる版妖怪変化を見に行く途中で取った休憩時間を利用して、魚市場へ行く」ということを表している。(59)bは「魚市場へ行くという過程で休憩が実現することを期待する」ということを表している。(60)の「久しぶりにあの味か」とは、「久しぶりにあの味が食べられるか」ということであり、「あの味」とは「赤福(を賞味すること)」を指す。この例の「赤福」という銘菓は「お伊勢さん参り」、すなわち伊勢神宮参拝をした時に食べたり、購入したりできるもののことである。話者は(60)aによって、「伊勢神宮へ参拝しようと思い、その行為の実現までのある段階で赤福を賞味、購入する」ということを述べている。一方(60)bのように「～がてら」で言い換えると、「伊勢神宮の門前町へ赤福を賞味に行く過程で、伊勢神宮へのお参りが実現することを期待する」ということを表す。

(58)から(60)までを検討して共通する特徴を考えてみると、「～かたがた」は、＜前件の行為を行っているある段階を利用して、後件行為を行う＞ということが言える。＜前件の行為を行っているある段階を利用して＞という特徴は「働きかけ」のところで導いた＜主体が行為の対象者に伝えたい行為の実現までの過程内で＞という意味特徴を内包する。

以上、「～がてら」と「～かたがた」の比較、分析から、次のような意味記述が得られる。

(61) 「～がてら」句+後件：＜後件行為をする過程で、前件で表される望ましい状態、あるいは望ましい状態につながる行為が実現可能であると
考えて、後件行為をする＞

(62) 「～かたがた」句+後件：＜前件行為を実現するまでのある段階を利用して、後件行為を行う＞

5.4.3 「～がてら」と「～ついでに」

5.4.3.1 「～ついでに」の先行研究

5.2 で見た「～がてら」の先行研究の記述の中には、その類義表現として「～ついでに」が散見された。研究会(2008:252)では両表現の違いとして、「接続の違い」「「がてら」は漢語動詞にも接続」「「がてら」はやや古めかしい表現」という点が挙げられていた(5.2.1 参照)。しかし、これらは形式的な特徴を表したに過ぎず、それぞれの意味を記述したものとは言い難い。田中(2010:212)は「ある行為を行うときに、一緒に他の用件の遂行にも利用できる機会、チャンスを表す。あること(X)「主行為」をする際にその機会を利用してほかの何か(Y)「従行為」を行うという意味である」としている。これは、5.2.1、5.2.2 で見た「～がてら」の先行研究の記述に他ならず、「～ついでに」の特徴的な意味とは言えない。

ところで田中は、動詞句(ル形、タ形)に接続する場合、前件の目的遂行に後件の内容が付随するという構成で主体の意志が併存するとし、非意志的な事態においては不自然な用法となると述べている¹⁶。前件、後件とも、意志的な行為を表すという指摘は、確かに用例を観察しても首肯できる。さらに、ル形の場合は当初の予定、計算に入れた行為として習慣

¹⁶ 根拠として次の例が挙げられている(p.213 例(164))。

- ・??台風がきたついでに、大雨が九州地方を襲った。
→台風が来たのに加えて、大雨が九州地方を襲った。
- ・??風邪を引いたついでに、お腹までもくでした。
→風邪をひいたところへ、お腹までもくでした。

的行為を表すのが普通として、次の例が挙げられている。

- (63) 僕はあきらめて家に戻り、夕食の買物をするついでにまた緑に電話をかけてみた。
(田中 2010:213 の例(165))

そして、タ形の場合は過去の事態で、習慣、予定通りにというニュアンスが感じられるとし、ル形のもつ「いつものように」という含みに対して、タ形は「たまたま」といった偶然的な状況を表す傾向があるとしている。

- (64) 夜、薬局に寄ったついでに数日前からアフターシェーブローションが切れていることを思い出して、買って帰ったら、洗面所の棚の中にちゃんと新品が置いてあった。
(同 例(167))

確かに、用例によっては、「当初の予定、習慣的行為」「偶然的な状況」と解することができるものもあるだろう。しかし、それらは果たして「～ル形+ついでに」「～タ形+ついでに」の意味であろうか。そもそも、タ形は習慣、予定通りにというニュアンスがあると述べているにも関わらず、偶然的な状況を表す傾向があると記述していて、主張に矛盾を感じさせる。田中の言うこのようなニュアンスは、(63)については、「また」からの影響、(64)は「思い出す」という動詞からの影響によるものではないかと思われる。

形式的な現れの一つとして、田中(2010:213)は名詞が直接「ついでに」に後接することもであると述べているが、この点に関してはそれ以上の議論はされていない。本稿ではこの形式の用例は取り上げていないが、前件の行為が実現した時点、つまり「動詞タ形+ついでに」の場合に相当すると考えられる¹⁷。

以上、見てきたように、「～ついでに」の特徴的な意味は未だ記述されていないと言えるだろう。「～がてら」との比較によって、「～ついでに」の特徴の一面を示すことにしたい。

¹⁷ 「名詞+ついでに」の形式は「名詞+の+ついでに」の形式にも成り得るが、前者の場合、アクセントが頭高に変わる。窪菌(1995:51-53)によると、アクセント構造に変化が起こるものは複合語(独立性のある語が2語(以上)結合してできた語(compound))を形成する。その考えに従うと、「名詞+ついでに」も複合語であり、以下に示すように「名詞+の+ついでに」よりも指し示す事態は限定されていると思われる。

- ・ここで恥かきついでにお伺いしたいのですが、負荷が非常に大きい場合に単純に2線の取り出しを行うとどのような不具合が起こるのでしょうか。(=恥をかいたついでに)
(<http://www.nc-net.or.jp/morilog/m29627.html>)
- ・「行ってくるね」。仕事に復帰した今朝も、合掌ついでに投げキスをすると、遺影は「遅すぎるよ」とでも言いたそうに、笑顔を増して見送ってくれた。(=合掌したついでに)

(朝日新聞、2008年1月10日)

5.4.3.2 類義表現としての認定

まず、共通の意味特徴を見ていこう。

- (65) a. 奄美大島・瀬戸内町の職員組合が独身の男性職員の花嫁候補を島の内外から募集している。(略)「イケメンかどうかは何とも言えないが、みんなまじめ。島の観光がてら気軽に参加して」と呼びかけている。(朝日新聞、2007年12月19日)
- b. 「イケメンかどうかは何とも言えないが、みんなまじめ。島の観光のついでに気軽に参加して」と呼びかけている。
- (66) a. さらに青木夫妻は、太郎に挨拶をする、というより、現場を見ないと不安だったらしく、連れだって息子を送りがてらやって来て、太郎は、海苔と羊羹の包みを貰ってしまった。(『太郎』)
- b. さらに青木夫妻は、太郎に挨拶をする、というより、現場を見ないと不安だったらしく、連れだって息子を送るついでにやって来て、太郎は、海苔と羊羹の包みを貰ってしまった。

例(65)aを見ると、この「お見合いパーティー」への応募は、「島の観光」と「お見合いパーティーに参加すること」という二つのことが実現可能であることを示している。同じく、「～がてら」を「～ついでに」で言い換えた(65)bでも、この二つの行為が実現可能ということを表している。例(66)は a、b ともに、青木夫妻が息子と一緒に家などを出て、太郎のところまで移動してくるという行為の中で、「息子を送る」という行為と「やって来る」という行為が実現可能であることを表している。

次に、「～ついでに」の用例で「～がてら」に言い換えることができるものを取り上げてみる。

- (67) a. 庭を歩きながら何気なく足元の雑草をむしっているカミさんを見て気がついた。なにかをする「ついで」に活動する手もある、と。釣りをしながら、ついでにそこの空き缶を拾う男性。愛犬の散歩のついでにゴミを拾ったり、すれ違う子供に声かけをする老人。入院中の母を見舞うついでに同室の老人の世話をする女性など。(毎日新聞、1996年8月5日)
- b. 愛犬の散歩がてらゴミを拾ったり、すれ違う子供に声かけをする老人。入院中の

母を見舞いがてら同室の老人の世話をする女性など。

例(67)aには「ついでに」がいくつか出てくるが、下線の「ついでに」のうち、前者は「散歩中」に「ごみ拾い」をしていることを表している。後者の「ついでに」では、「入院中の母のお見舞い」の際に、母と同室に入院している老人の「世話」をすることを表す。これら二つの「～ついでに」は(67)bのように「～がてら」での言い換えが可能である。前者は、家を出て、外に落ちているゴミを拾って家に帰ってくるという行為中に、「散歩」も実現できることを表す。後者の「～がてら」は、入院中の母と同室の老人の世話をするときに、母の見舞いもできることを表す。もう一つ例を挙げておこう。

(68) a. 街全体で目を光らせる工夫をしてみてください。私たちの団地では、「無理せず 3 6 5 日 2 4 時間パトロール」が目標です。コンビニに行くついでにちょっと団地内を巡回、ということを各家庭がやれば、犯罪者は「あの街は、いつも何かやっている」と恐れます。実際、月に何件もあった空き巣や車上狙いが、今はゼロです。(朝日新聞、2007年11月9日)

b. コンビニに行きがてらちょっと団地内を巡回、ということを各家庭がやれば、犯罪者は「あの街は、いつも何かやっている」と恐れます。

例(68)aは「コンビニへの行き帰りの過程の中で、時間的余裕があるため、本来の往復のコースを少し外れ、団地内を巡回する」という事態を表している。この例は、例えば、コンビニが団地内にあって、団地内を巡回している過程内で「コンビニに行く」という行為の実現を期待した文脈であれば、(68)bのように言い換えることもできる。

これらと先に述べたことを合わせ、「～がてら」と「～ついでに」はくある行為の過程内で前件内容と後件内容がともに実現可能>という共通項を持った類義表現と見ることができるといえる。

5.4.3.3 比較分析

まず、「～がてら」を使った例の中から、「～ついでに」で言い換えられないものを見てみる。

(69) a. ダイエットがてら兼六園などを約1時間散歩するのが日課。

(朝日新聞、2006年3月5日)

b.*ダイエットのついでに兼六園などを約1時間散歩するのが日課。

- (70) a. 新作「LOFT」は黒沢清には珍しく女性を主人公にした映画だ。新進の女性作家礼子(中谷美紀)はスランプに陥り、小説を書けなくなっていた。礼子は担当編集者に勧められて静養がてら田舎の一軒家に引っ越す。

(朝日新聞、2006年9月12日)

b.*礼子は担当編集者に勧められて静養のついでに田舎の一軒家に引っ越す。

- (71) a. 札幌麻生球場では、小樽市の千葉直樹さん(65)、美恵子さん(64)夫妻が、孫の東海大四の投手、恭平君(3年)のプレーを見守った。直樹さんは5年前、脳梗塞で右半身不随になった。以来、美恵子さんが車を運転し、リハビリがてら応援に駆けつける。(朝日新聞、2006年6月30日)

b.*直樹さんは5年前、脳梗塞で右半身不随になった。以来、美恵子さんが車を運転し、リハビリのついでに応援に駆けつける。

例(69)aは「兼六園などを約1時間散歩する」という行為が「ダイエット」の効果を生むことを期待した文である。この文の「～がてら」を「～ついでに」で言い換えることはできない。例(70)aは、スランプに陥った小説家が「田舎の一軒家に引っ越す」ことによって「静養」という効果が得られ、その結果、スランプが解消されることを期待することを表した文である。これも「～ついでに」で言い換えることはできない。例(71)aは半身不随になった直樹さんが、美恵子さんの運転する車に乗って「球場に駆けつけ、応援する」過程で「リハビリ」、つまり<身体的障害の回復>という効果が生まれることを期待している文である。これも(71)bのように「～ついでに」で言い換えることはできない。

以上から、「がてら」に先行する要素が「ダイエット」や「静養」「リハビリ」といった、後件行為による効果を表すとき、「～ついでに」で言い換えることができないと考えられる。しかし、これらの語が必ず「ついでに」に先行しないというわけではなく、例(72)のように言うことはできる。

- (72) 最近、近所で子供の頃から遊んだ同い年の友人が亡くなりました。(略)昨年入院したと聞き、私がリハビリで通っている病院だったので、リハビリのついでに病室へお見舞いに行きました。(<http://www.normanet.ne.jp/~hagaki-t/pcc62a.htm>)

この例が表す事態は、まず話者である主体が、身体的障害を回復させる何らかの治療のた

めに、病院へ行っているという事実が前提となる。この「リハビリ」は、身体的障害の回復を期待して行う「医療行為」を表している。そして後件は、前件の「リハビリ」という医療行為を受ける前、あるいは完了時点で、「(友人の)病室へお見舞いに行く」という、もう一つの行為を表している。つまり、例(71)で「効果」を表していた「リハビリ」は、例(72)では「行為」を表している。同様のことが例(73)でも考えられる。

(73) a. 「新緑を染めたいのですが」。草木工房(川崎市麻生区)を訪ねると、山崎和樹さん(51)に「それなら身近な植物がありますよ」とハサミを手渡された。野趣あふれる庭の片隅に、キク科のハルジオンが白い花を揺らしている。「草取りがてら採りましょうか」(日経プラスワン、2008年5月17日)

b. 野趣あふれる庭の片隅に、キク科のハルジオンが白い花を揺らしている。「草取りのついでに採りましょうか」

例(73)aはハルジオンを採ることによって、「庭の草取り」つまり、「庭の美化」という効果が得られるということを表しているが、それを「～ついでに」で言い換えた(73)bは「雑草など、ハルジオン以外の草を取る」という行為を行い、そしてその過程内でハルジオンも採るというもう一つの行為を表している。

以上から、「がてら」に先行する部分が、後件行為から期待される「効果」を表すときは「～ついでに」で言い換えることはできないと想定できる。

では次に、「～ついでに」の例の中で「～がてら」に言い換えられない例を検討して、行為、効果についてさらに見ていくことにする。

(74) a. 斉藤さんは今、診療所の待合室を「交流の場」として改修するアイデアを練っている。畳を敷きつめ、健康器具を置いて使ってもらおう。「閉じこもりがちの人が、診察のついでにくつろいでいける場になればいい。ささやかなことでも、時代に合わせ、できることを探っていきたい」(朝日新聞、2007年10月12日)

b.*閉じこもりがちの人が、診察がてらくつろいでいける場になればいい。

c. 閉じこもりがちの人が、開放感を味わいがてらくつろいでいける場になればいい。

(74)aは、斉藤医師が、患者が診察を受けるのを待つ、あるいは診察が終わったあとに患者が「くつろいでいける場」として待合室を設けたということを表している。この「診察」は効果ではなく、医療行為を指す。これは(74)bのように「～がてら」で言い換えることはで

きない。ただし、例えば「くつろいでいく」という行為による効果として、「開放感を味わう」ということを想定した場合、(74)cのように「～がてら」で言い換えることができる。このことから、やはり後件行為から生じる効果が「～がてら」を特徴付ける一つの要素であると言える。続いて、以下の例で「～ついでに」の特徴について検討しよう。

(75) a. 「うまいのは当たり前、安くないと生き残れない」といわれる大阪グルメ。自ら店も経営するお笑いタレント・島田紳助さんは「信じられないほど安くてうまい店や、客への気遣いが素晴らしい店があるのが大阪」という。だが、出張のついでにそんな店に出会うのは簡単ではない。(朝日新聞、2007年4月28日)

b.*だが、出張がてらそんな店に出会うのは簡単ではない。

例(75)aは大阪以外の土地の人が「出張」のために大阪に来て、そこで業務に従事していない時間に「安くてうまい店や、客への気遣いが素晴らしい店」に行くことを表している。この「出張」は、「客」にとって本来の来阪の目的行為であり、「そんな店に出会う」というのは「出張」によって束縛された時間以外での来店を指す。あくまで「出張」業務の遂行が前提であり、それから解放される、時間的に余裕があるときでなければ来店はできない。つまり、後件行為は前件の行為が存在しないと実現し得ないことである。

先の例(74)aをもう一度見てみると、診療所の本来の業務は「診察」であり、「くつろげる場」としての待合室は診察を受けていない時間にかぎり利用できる。これらから、「～ついでに」はまず、前提を表す<ある行為を実現する過程>という特徴が必要であり、それは前件内容で表される。また、後件行為は前件の行為に時間的な「余剰」が認められるときのみ行うことができるという制約がある。「余剰」とは、<それがなくても前件行為は実現できる>という部分である。そして、その余剰の範囲内で<後件行為をする>ことができると考えられたときに「～ついでに」を用いる。この点を次の例によって確認したい。

(76) a. 樹木園や林間広場までは、JR豊肥線いこいの村駅から3キロほど。車なら数分、歩いて1時間も1時間足らずで行ける。草千里へも車で15分程度。ほかの観光地を訪ねたついでに、一息ついて新鮮な空気を深呼吸するのもよいだろう。

(朝日新聞、2007年11月3日)

b.*ほかの観光地を訪ねがてら、一息ついて新鮮な空気を深呼吸するのもよいだろう。

例(76)は本来、「ほかの観光地を訪ねる」というのが前提であるが、話者は「～ついでに」

の後件行為「(樹木園や林間広場へ行って)一息ついて新鮮な空気を深呼吸する」が、あってもなくてもその前提の実現は達成されると考えている。「車なら数分、歩いて1時間足らずで行ける」と述べることによって、「ほかの観光地を訪ねる」ことへの影響はないと主張している。このことは「～がてら」で言い表すことはできない。

さて、もう一度「出張」について考えてみたい。この語の意味としては本来の業務に携わる地方以外へ出向き、業務をすること>が考えられる。移動行為という点では「～がてら」の形で頻出する「散歩」「旅行」「ドライブ」などと共通する。しかし、「がてら」が「出張」に後続した例はなかなか見当たらない。その理由を考えてみると、「散歩」「旅行」「ドライブ」といった語は話者自身に何かしら有益なものをもたらすが、「出張」は所属する会社に益をもたらすことはあっても、話者が直接その恩恵を感じることは難しいからではないだろうか。この見通しに立つと、「出張」がもし話者にとって直接有益性を感じられる行為として捉えられれば「～がてら」の文が成立するということになる。

(77) a. 妻に2番目の子供ができて、養育費が大変だから別れられない。でも、これからも出張がてら遊びに来るから。(AERA、2003年6月2日号)

b. 妻に2番目の子供ができて、養育費が大変だから別れられない。でも、これからも出張のついでに遊びに来るから。

(77)aは「単に遊びに来るということではできないが、会社に益をもたらす行為であるという正当性を示して遊びに来る」ということを示している。つまり、この例の「出張」は確かに「会社にもたらす益」ではあるが、同時に「愛人のところへ遊びに来る」という、話者自身の背徳の意識を隠す「口実」、言い換えれば直接話者に「正当性」という恩恵をもたらす行為となる。このように、もともと字義的には話者に恩恵をもたらさない行為でも、恩恵があると見なせる場合、「～がてら」で言うことが可能となる。

(77)aは(77)bのように言い換えることもできるが、その場合(77)bは(75)aと同じように、「出張」という一回一回の行為が本来の(愛人が住む町への)移動行為であり、その過程内で認められた時間的余剰の範囲内で「遊びに来る」ということを表しており、「出張」は「口実」ではなく、後件が実現するための前提の行為である。

例(77)の「出張」は字義的には話者に恩恵をもたらさない行為とした。他にも、もともと字義的に話者に恩恵をもたらす行為でも、「口実」としての働きを持つ例を挙げてみよう。

(78) a. おまえの言うように、十一月なかばの日曜日に、あの辺の景色を見物に行きがて

ら、おまえのところに寄ってみましょう。(『冬』)

- b. おまえの言うように、十一月なかばの日曜日に、あの辺の景色を見物に行くついでに、おまえのところに寄ってみましょう。

例(78)a は息子へ宛てた父親からの手紙の一節である。この「～がてら」は(78)b のように「～ついでに」で言い換えることは可能である。この一文だけを見ると、「あの辺の景色を見物に行く」というのは、今までの議論からすると、話者にとって視覚情報から得られる充足感という効果を期待した文であると考えられる。ところが、この文の「おまえ」というのは話者(父親)の息子であり、息子は少年院に収監されている。そして、その息子は、面会したいと願う親に対してそれを拒絶している。しかし、少年院の院長からの手紙を通して息子は両親に次のように述べている。

- (79) 御息子が、面会には来ないで欲しい、と言っているのが、私(院長)には解ります。彼はすでに少年ではなく、人間の本質を知りつくしている大人です。私は、彼の言っていることを守ってあげた方がよいかと思います。ただし、彼の言葉をここに付け加えておきます。この辺の景色を見物にくるついでにここにおたちよりくださるのならかまいません。しかし景色を見物にくるとしましても、自家用車などでは来ないで欲しい。これが御息子の伝言です。(『冬』)

(79)では、息子の言として「この辺の景色を見物に来るついでにおたちよりくださるのならかまいません」と記されている。つまり、息子の希望は「自分への面会のためにわざわざ来てほしくはない。景色の見物などで来たときに時間があったら寄るという程度にして欲しい」ということである。それに対する答えとして、父親は先の(78)a のように述べているのである。そうすると、「あの辺の景色を見物に行く」というのは、充足感という効果を期待できる行為としてではなく、(77)a と同じように、「単に後件行為だけを行うことはできない」状況に対して、後件行為を遂行させ得る「口実」としての働きを持つことがわかる。

続いて、次の例は後件行為の「友人のあとをついてまわる」という行為によって「遊び」という「口実」としての効果を期待している。

- (80) 会社を立ち上げるときに不動産の仕事をしていた旧友を訪ねた。バブルの最中だった。遊びがてらを口実に、友人のあとをついてまわった。

(AERA、2005年9月19日号)

効果を「口実」として働かせることができるということは、前件で表される内容は、あくまでも<話者にとって有益な行為、効果>であると限定することができる。

ここまでの議論を以下の例に照らして考えたい。

(81) a. 「スキーのついでに観劇をするのでなく、観劇のためにスキーに来る——と思っ
てもらえるような富良野公演に育てていきたい。劇とは時代と共に日々変化する
生き物だから」と倉本氏は話す。(朝日新聞、2007年1月28日)

b.* 「スキーがてら観劇をするのでなく、観劇のためにスキーに来る——と思っ
てもらえるような富良野公演に育てていきたい。劇とは時代と共に日々変化する生き
物だから」と倉本氏は話す。

(81)a で倉本氏は「スキーのついでに観劇をする」ことを否定し、「観劇のためにスキーに来る」ということを人々に期待している。つまり、「観劇を富良野に来る目的としてほしい」という願いを表している。ということは、否定されている「スキーのついでに観劇をする」が表しているのは、「スキー」を富良野に来る目的としている。すなわち、スキーを目的として富良野にやって来たら、そこで劇が行われているから見ることができる、ということを表している。したがって「スキーをすること」が「観劇をする」という行為を実現するための前提である。この例は、(81)bのように言い換えることはできない。「スキー」は「観劇」の過程内で行う行為でもなければ、「観劇」によって生じる効果でもないからである。しかし、例(82)のように、「スキーをすること」が後件行為「実家に足を運ぶ」という過程内で行う行為であれば「～がてら」で言うことができる。

(82) 何年も実家に帰ったことはなかったが、今年の冬はスキーがてら足を運んでみるつもりだ。

しかも、この場合の「スキー」は何年も帰ったことがないために感じる精神的負担を軽減する、<話者にとって都合のいい口実>としての効果も認められる。

以上の検討から「～がてら」と「～ついでに」の意味は以下のようにまとめられる。

(83) 「～がてら」句+後件：<後件行為をする過程で、話者が有益な効果・行為と考える前件内容が実現できると期待して、後件行為をする>

(84) 「～ついでに」句+後件：<前件行為を実現する過程に、それがなくても前件行為が実現できると考えられる時間が認められ、その範囲内で

後件行為をする>

最後に、「～ついでに」の接続形式についても触れておきたい。「ついでに」に先行する動詞にはル形の場合もあれば、例(76)aのように、タ形の場合もある。2.3.1で取り上げた南(1993)の従属句分類によれば、述語的部分の要素にタ形がくるものはB類に属する傾向がある¹⁸。これに照らせば、「～ついでに」はB類従属句に入ることになる。しかしながら、「～ついでに」の述語部分のタ形は、発話時点を基準にして事態生起の時点を表すテンスではなく、ある動的事態の時間的展開のどの面を捉えるかという、アスペクトを表すタ形なのではないかと思われる。たとえば次の例の「舞台を見に来た」というのは、過去のある時点で実際になされた行為を表しているのではなく、「舞台を見に来る」という行為が実現した局面を述べている。

- (85) 舞台は東京・銀座の新橋演舞場で7月4日から27日まで、39公演が予定されている。(略)(県観光振興課は)「舞台を見に来たついでに山形にも来て、おしんの撮影地を見てくれればうれしい」と期待を寄せている。

(朝日新聞、2008年4月15日)

さらに特徴的なこととして、「～ついでに」の述語的部分以外の成分としてガ格は表れない。ゆえに、「～ついでに」はタ形に接続するものの、むしろA類の従属句と考えたほうがよいかもしい。

5.5 意味記述

前節では「～がてら」を「～をかねて」、「～かたがた」、「～ついでに」と比較し、その違いを考えながら意味を記述してきた。まず、「～をかねて」「～かたがた」との比較から得られた「～がてら」の意味は次の通りである。

- (86) 「～がてら」句+後件：<後件行為をする過程で、前件で表される望ましい状態、あるいは望ましい状態につながる行為が実現可能であると考えて、後件行為をする>((43)、(61)を再掲)

次に「～ついでに」との比較から得られた意味は次の通りである。

¹⁸ 南(1993:87)はタ・ダの形について<過去など>としている。しかし、2.3.2で論じたように、A類とB類の階層性を見分ける指標一つとしてテンスが挙げられるため、南の言うタ・ダは<過去>と限定して考えるべきであろう。

(87) 「～がてら」句+後件：<後件行為をする過程で、話者が有益な効果・行為と考える前件内容が実現できると期待して、後件行為をする>

((83)を再掲)

(86)と(87)を見ると、まず、<後件行為をする過程で>と<後件行為をする>という意味特徴は共通している。次に、(86)でいうところの<望ましい状態>とは、行為の結果として表れる一つの<効果>と考えることができる。ゆえに、両記述とも前件にくるのは、<話者が望ましいと考える効果・行為>とまとめることができる。前件内容が効果なのか行為なのか、という判断については、動詞であれば行為であり、動作性名詞であれば行為の場合も効果の場合もあると言えるが、いずれにしてもその選択は「がてら」が決定するものではない。

以上を考えると、「がてら」は単義語¹⁹として扱うことが妥当であり、次のように意味が記述できる。

(88) 「～がてら」句+後件：<後件行為をする過程で、前件で表される話者が望ましいと考える状態が実現されることを期待して、あるいはその実現のための行為ができると期待して、後件行為をする>

(88)の意味記述に沿って、先に挙げた用例を解釈し、それが妥当であるか検証してみる。

(89) 散歩(し)がてら、友人が訪ねてきてくれた。(=例(4))

(90) 京都においでの際は、お遊びがてら、ぜひ私どものところへもお立ち寄りください。
(=例(8))

(91) 通勤の時に我が家の前を通りがかる七男は、週に1回、一人暮らしの私の様子を見守りがてら家に立ち寄って、夕食を共にしてくれます。(=例(9))

(89)の「散歩(し)がてら」は、後件行為「(話者の所へ)友人が訪ねて来る」過程で、友人にとって気晴らしという効果、あるいはそれを生じる行為が実現されるだろうと話者が期待

¹⁹ 例えば、「子」という語は、その語自体に<男の子>と<女の子>という二つの意味があるというよりは、<大人の年齢に達していない人>と記述できるような一つの意味を持つ語であり、下の例のように文脈や場面の手助けによってはじめて性別を特定することができる。このような語を単義語という。ただし、「子」は「親」に対する意味もあるため、それを考慮に入れると多義語となる。(榎山 2002:96-98)

a. あの子は腕白だ。(「腕白」という表現から「男の子」と特定)

b. あそこに赤いスカートをはいた子がいる。(「スカートをはいた」という表現から「女の子」と特定)

していると解釈される。(90)は「私ども(話者)のところへ立ち寄る」過程で、相手(主体)の心理に「お遊び」、つまり「真剣ではない状態」が生じることを期待していて、そういう心持ちで立ち寄ることを依頼している発話である。(91)については、話者である「私」の考えでは、七男が「家に立ち寄って、夕食を共にする」のは、その過程で「私(話者)の様子を見守る」という、話者にとって嬉しい状態になる行為を実現しようとしているからなのだということになる。

また、「～がてら」は「口実」として使われることもあると述べた。(92)は、主体である話者と配偶者が「福岡県浮羽町へ行く」という行為の過程で「新婚旅行」という、話者にとって望ましい状態を生じる行為が実現できると期待して、実際にその地へ赴いたということを表している。

(92) フクニチ新聞(廃刊)などで漫画を描いていたころ、新婚旅行がてら行ったのが福岡県浮羽町(現うきは市)。(=例(6))

この捉え方とは別に、話者はもともと新婚旅行に行くことに消極的であるが、世間的にどうしてもしなければならぬ行為と認識しているという状況も設定できる。この場合、「福岡県浮羽町へ行く」という行為は、話者にとって<望ましい状態>、つまり「新婚旅行に行った」という既成事実の成立につながる。この場合、「新婚旅行がてら」は後件の行為について、体裁的に繕った「口実」として機能する。

以上、(89)から(91)の例について、導き出した「～がてら」の意味記述に即して解釈してみたが、適当な事態描写ができたのではないだろうか。これにより、(88)の意味記述は妥当であると判断できる。

5.6 「～がてら」の意味に内在する「目的」要素と「付帯状況」要素

5.2で取り上げた先行研究の中には、「目的」という語を用いて「～がてら」の意味を記述しているものがあつた。また、「～がてら」で表される部分を主節に付随する行為、副次的行為とし、付帯状況を表す表現としているものもあつた。どちらの主張も、ともに認められる部分はあるため、否定はしない。しかし、これまで本稿で行ってきた議論からすると、「～がてら」の意味としては、どちらの主張も包括的に取り入れられるべきであるという結論に至る。なぜなら、「～がてら」の意味には「目的」カテゴリーに類する要素、「付帯状況」カテゴリーに類する要素が見出されるからである。前節で示した「～がてら」の

意味を改めて見てみよう。

- (93) 「～がてら」句+後件：<後件行為をする過程で、前件で表される話者が望ましいと考える状態が実現されることを期待して、あるいはその実現のための行為ができると期待して、後件行為をする>

まず、第3章では「目的」を次のように定義付けた。

- (94) 目的：<主体が実現し得ると考える行為や状態>

(93)の「～がてら」の記述内容について、先行する部分で表されるのは、<話者が実現されると期待する、望ましい状態>である。実現が期待される状態に向けた主体の関わり方には違いがあるものの、これは「目的」の特徴に類似する。第4章で示した「付帯状況」との関連はどうか。

- (95) 付帯状況：<後件の事態が成立するときの、主体に関する諸々の状態>

「～がてら」で表されるのは<後件行為の過程で実現が期待される状態、行為>である。一方、「付帯状況」は、(95)の記述を言い換えると<後件行為の過程ですでに実現している主体の状態>と考えられる。つまり、後件の過程性に注目し、それにまつわる何らかの状態を述べるという点で、「～がてら」には付帯状況とも類似点が認められる。

このように、「～がてら」の意味には「ある状態の実現への期待」という点で「目的」と、そして、後件の過程性に注目するという点で「付帯状況」との関連が見出される。

5.7 本章のまとめ

本章では、第3章で検討した「目的」と、第4章で検討した「付帯状況」との中間的表現として、「～がてら」を用例に基づき類義表現と比較、分析し、その意味を記述した。比較した類義表現は「～をかねて」「～かたがた」「～ついでに」である。比較する中で、それら類義表現の意味も記述した。考察の結果得られた「～がてら」の意味には、「目的」要素と「付帯状況」要素が認められた。これにより、先行研究で様々に論じられてきたその意味も、統一的に記述できたのではないだろうか。

また日本語には、いわゆる「目的」表現らしい表現や「付帯状況」表現らしい表現もある一方で、「～がてら」のように、基本的な意味には両者の意味特徴が部分的に取り入れら

れているが、用例によって「目的」性が前面に出たり、「付帯状況」性が前面に出たりする表現の存在が認められることになる。このことはすなわち、話者の伝達意図のカテゴリーというものも、明確な境界を持たないものであるということを裏付けている。

第6章 結論

6.1 本研究のまとめ

この節では、これまで行ってきた議論のまとめを行う。

本研究で分析の対象とした表現形式は、「目的」を表すとされる「～ために」及び「～に＋移動動詞」、それから、「付帯状況」を表すとされる「～ながら」及び「～つつ」、そして、そのどちらにも解釈され得る「～がてら」であった。従来は、こういった複文を形成する、いわゆる機能語の意味に対して、便宜的なラベル付け(例:「目的を表す」「付帯状況を表す」)はされているものの、一つ一つの意味記述は十分だったとは言い難い。しかも、実際には「～がてら」のように、ラベル付けが困難な表現もある。言語は本来、形式が異なれば、必ず異なる意味が託されているはずである。このような観点に立ち、本稿では、用例で表される事態内容を観察し、類義・関連表現と比較することで、そういった機能語のそれぞれの意味を記述することを目指した。各章での議論を簡単に振り返ってみよう。

まず、第2章では、本研究の基盤となる理論的背景について概観した。最初に文の形式的な面について、先行研究を踏まえ、単文と複文とを区別する明確な境界線というものはないが、節がどれほど「文らしいか」という連続的な段階性は存在すると述べた。そして、その段階性を形式的に測ることができる指標として、南(1993 など)の従属句分類を提示した。そこでは既に、本稿で対象とした形式のうち、「～ながら」「～つつ」はA類従属句、「～ために(原因)」はB類従属句とされていた。それ以外の形式については、本稿の議論の中で、「～ために(目的)」、「～がてら」、「～をかねて」、「～かたがた」、「～ついでに」はすべてA類に属するとした。南(1993:242-246)は、A類(描叙段階)、B類(判断段階)で表される内容を以下のように示している。本稿で記述した各形式の意味は、確かにこの範囲に収まると考えられる。

描叙段階

(「～ために(目的)」「～ながら」「～つつ」「～がてら」「～をかねて」
「～かたがた」「～ついでに」)

言語表現の内容として取り上げられる対象となるものごと自身、ものごとの動き、状態、属性、程度・量、ものごととの間の関係などについての情報が処理される段階。それらはすべて抽象的、一般的な枠組みとして扱われるのであって、

つぎの判断段階で問題となる内容特性、たとえば定／不定、個別／一般、確定／未定、実現／非実現の対立(選択)はまだ問題にならない。

判断段階

(「～ために(原因)」)

描叙段階の内容のさまざまな面①主格と述語の区別と関係付け。②定／不定、個別／一般、確定／未定、実現／非実現の選択。③空間・時間限定。④特定／不特定／一般的の問題化。⑤認定根拠、認定条件(順接、逆接)、原因・理由、認定のしかた(断定、推定)の選択。⑥各種の強調、評価を含んだ表現)について認定する。

また、類義表現を統べる共通の意味特徴が存在するという本研究の主張を支えるために、認知言語学のカテゴリー観について見た。すなわち、あるカテゴリーの成員はプロトタイプの成員を中心に段階的にカテゴリー内に位置しており、加えて、カテゴリーの境界は明確に規定できるものばかりではないという考えである。この考えに基づいて、ある言語形式に託される人の伝達意図という概念的なものも、同様のカテゴリーを形成しているという見通しを示した。

さらに、ある複数の事例から、共通する特徴(スキーマ)が見出されると、それがカテゴリー形成の基盤となるという考えも見た。これによって、「目的」とは何か、「付帯状況」とは何かという、それぞれの意味的カテゴリーを特徴付ける、抽象的な意味特徴を規定することが可能になる。

第2章の最後では、具体的な意味分析の方法として採用した、服部(1968)、國廣(1982a)の「文脈的作業原則」、「対照的作業原則」の手法を示した。前者の原則は、分析対象表現が用いられる文の中で、どのような語や表現と共起するか、またそれらの語や表現は描写される事態においてどのような役割を担っているかということを探り、それによって分析対象表現の意味の特徴付けに役立てようとするものであった。後者の原則は、類義表現との比較である。すなわち、用例内の分析対象表現に類義表現を代入して、その結果描写される事態を観察し、共通する特徴と異なる特徴を細かく見ていこうとするものであった。第3章、第4章、第5章で行った具体的な機能語の分析は、これらの作業原則に従って進めていったものである。

第3章では、「目的」カテゴリーの抽象的な意味特徴を探るべく、「～ために」の意味の中

心に分析した。まず、「～ために＋移動動詞」の形に限定して、類義表現「～に＋移動動詞」との比較を行うことにした。比較に先立ち、「～に＋移動動詞」となる移動動詞の規定を行った。結果、<ある場所から別の場所への、主体の意志的な移動(位置の変化)>を表す動詞に限られ、具体的には「行く、来る、登る、下る、上がる、降りる、戻る、帰る、渡る、寄る、入る、出る」と規定した。

移動動詞を規定したのち、両表現の比較を行った。意味の違いに反映されるポイントとなったのは、「移動の着点」「目的実現の確実性」「目的の重大性」という点であった。第一の「移動の着点」に関しては、「～ために＋移動動詞」の場合、前件の行為実現に場所の制約はないが、「～に＋移動動詞」は移動の着点で実現されるという違いが見出された。二つ目の「目的実現の確実性」に関しては、「～ために＋移動動詞」の場合、移動は前件行為の実現には必要な要素ではあるものの、それだけでは実現が保証されないため、確実視はされていないということがわかった。一方の「～に＋移動動詞」については、移動を経たその着点での、前件行為の実現を確実視しているということが認められた。三つ目の「目的の重大性」に関しては、「～に＋移動動詞」は、移動によって行為の実現を確実視しているのに対し、「～ために」を用いる場合では、ある行為の実現について、移動だけでは成り立たず、それ以外の何らかの要素も満たす必要があるということを示していることがわかった。この表現が「大仰な目的」と感じられやすいのは、この意味的特徴に起因するのであろうという提案をした。

続いて、上で導いた「～ために＋移動動詞」の形式の意味を土台にして、さらに一般的な「～ために」の意味記述へとつなげるために、同じ形式で「原因」を表す「～ために」と比較した。「目的」と「原因」という二用法に何らかの意味的共通性があるということは、先行研究でも予見されていたものであった。本研究で、用例をもとに検討した結果、「目的」の場合は対象のあるべき状態を思い描いているのに対し、「原因」の用法の場合は、話者は現実を引き起こした原因に負のイメージを抱いていることがわかった。一見、正反対の評価を前件に託しているのであるが、どちらの場合も、「対象のあるべき状態」と現状との隔たりが意味の基盤となっていると論じた。この「隔たり」が、「対象のあるべき状態」に近づけられる可能性のあるものであれば、後件行為の「目的」となり、すでに確定したものであるならば、後件事態が生じる「原因」と解釈されるのである。前者の、「目的」を表す場合、後件行為が「対象のあるべき状態に近づけられる行為」に当たるが、言い換えれば、その行為だけでは、なお実現することはできないということも表している。この意味特徴

は、「～に+移動動詞」との比較で得られた意味と矛盾せず、記述が妥当であることを示している。

最終的に、「～ために」の意味と、「～に+移動動詞」の意味から、このカテゴリーを特徴付ける共通の意味特徴を導いた。第3章の結論は以下の通りである。

目的：＜主体が実現し得ると考える行為や状態＞

「～ために」句+後件：＜主体が実現し得る、ある対象の行為や状態を想定し、その実現に必要な要素だと考えられる行為を行うこと＞

「～に」句+移動動詞：＜ある行為の実現が可能な場所への移動を行うこと＞

第4章では、「付帯状況」を表すとされる「～ながら」と「～つつ」の意味記述を行った。先行研究でも盛んに議論されているように、本稿でも分析の前提として、前件部分の過程性に注目した。本稿では、テイラー・瀬戸(2008:243)のプロセス分類に従ったが、まず、前件で表される動詞的表現のプロセスを「動態」「状態」「経過的」「瞬間的」に分けて考察した。結果、プロセスごとに、「～ながら」と「～つつ」に共通する次の意味的特徴が見出された。

動態プロセス：＜動作主体の身体的・心理的行為の反復・継続状態＞

状態プロセス：＜動作主体の社会的状況＞

経過的プロセス：＜動作主体の身体の動き＞

瞬間的プロセス：＜動作主体の、瞬間的に生起する体勢・心理状態＞

「～ながら」と「～つつ」は、＜前件で表される状態が続いている間に、後件の事態が成立する＞という意味において類義表現であると考えられるが、この＜前件で表される状態＞の内実というのが、すなわち上記の各プロセスに表される内容であり、これがいわゆる「付帯状況」とであると論じた。

互いに言い換え可能な場合が多い両表現は、従来、文体差を以ってその違いとされてきた。しかし、本研究では、この文体差は、そもそも意味に由来するものと考えた。その見通しに基づき、用例で表される事態を観察し、比較を行った結果、「～ながら」の場合は、程度の差こそあれ、前件の内容が後件の事態実現に影響を及ぼすという関係性が認められた。それに対し、「～つつ」にはそういった影響関係がなく、むしろ、前件は途絶えること

なく維持されている状況で、後件はそれを妨げない事態の成立という関係性があった。このような前件と後件の関係性の違いによって、従来、周辺的な用法として扱われていた例、すなわち現実には同時に行われていない動作の表現(例：働きながら勉強している)についても無理なく解釈することができるようになった。

この章で議論した内容から示された結論は以下の通りである。

付帯状況：＜動作主体の身体的・心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、身体の動き、瞬間的に生起する体勢あるいは心理状態＞

「～ながら」句＋後件：＜ある主体の、後件の事態に影響を及ぼし得る身体的あるいは心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、体勢・心理状態維持の中で、後件の事態が成り立っている＞

「～つつ」句＋後件：＜人の、身体的あるいは心理的行為の反復・継続状態、社会的状況、体勢・心理状態が途絶えることなく維持されている中で、それを妨げない後件の事態が成り立っている＞

第5章では、「～がてら」の意味についての分析と記述を行った。この表現の意味をめぐっては、従来、「目的」という用語を用いて説明する先行研究もあれば、「付帯状況」として扱うもの、「機会を表す」と記述したものなど、様々であった。また、辞書の多くで見られた記述は、単に類義表現を併記するものであった。このように、異論が多く、実態が捉えきれていない「～がてら」の意味については、さらに議論の余地があると考え、改めて本稿で考察を行うこととした。

まず、多くの用例の前件が「散歩がてら」であることから、「散歩」という語の指し示す内容について特に考察した。結果、実際に身体を動かす行為のみならず、その行為によって生じる効果までも「散歩」という語で表されていることがわかった。この考察を踏まえ、「がてら」に先行する部分、及び後続する部分について、以下のようにその特徴を規定した。

先行する部分の意味特徴は＜人間が自分の意志で行う行為＞

または＜行為の効果＞

後続する部分の意味特徴は＜人間が自分の意志で行う行為＞

続いて、前件と後件の関係を探るために、類義表現「～をかねて」「～かたがた」「～ついでに」と比較した。比較の結果、各類義表現の特徴的な意味も記述することができたが、「～がてら」についても、「口実」として用いられることがあるという興味深い現象も見出すことができた。この章での分析の結果、得られた「～がてら」の意味は次の通りである。

「～がてら」句+後件：<後件行為をする過程で、前件で表される話者が望ましいと考える状態が実現されることを期待して、あるいはその実現のための行為ができることを期待して、後件行為をする>

さらに、第3章で導いた「目的」の抽象的意味、第4章で導いた「付帯状況」の抽象的意味を、この「～がてら」の記述内容と比較した。すると、関連性を見出すことができずにいた先行研究の各論を取り込む形で、「～がてら」の意味を捉えることができた。すなわち、カテゴリーが複合的に「～がてら」の意味を形成しているという意味観である。

「がてら」に先行する部分に相当する意味は、<話者が実現されると期待する、望ましい状態>である。この部分に焦点を当てて「～がてら」の意味を考えると、主体の関わり方には違いがあるものの、これは「目的」の特徴(<主体が実現し得ると考える行為や状態>)に類似し、目的カテゴリーの成員としての資格を得る。

一方、「～がてら」には<後件行為をする過程で>という意味特徴も含まれる。後件の過程性に注目し、それにまつわる何らかの状態を述べるという点では、「付帯状況」とも共通部分が認められると主張した。

このように、「～がてら」の意味には、「目的」に通じる部分、「付帯状況」に通じる部分が認められるため、先行研究ではどちらかのカテゴリーで説明しようとしてきたのである。しかし実際には、本研究で見えてきたように、「～がてら」はどちらのカテゴリーにも部分的に属しているのである。両者の間に位置づけられるという、この事実は、機能語の果たす伝達意図のカテゴリーが、明確な境界を持つものではないということの証左となり、この結果が、後述するように複文表現の意味を考える上での新たな道筋を示す糸口となる。

以上が、本研究で行った分析のまとめであるが、これにより、複文を形成する機能語の意味に関して、どのような主張が可能になるのか、本研究の意義を次に示したい。

6.2 本研究の意義と課題

まず、本研究で明らかになった各機能語の意味的關係を以下に表す。

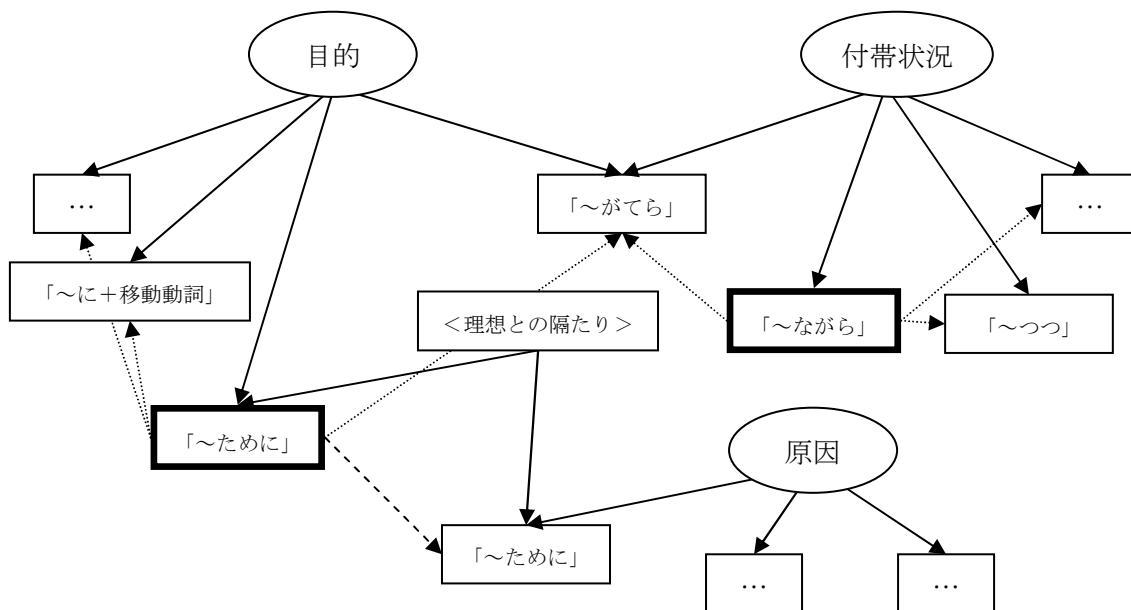


図1 目的表現と付帯状況表現をめぐる複文ネットワーク

上図は、目的表現、付帯状況表現のプロトタイプを「〜ために」、「〜ながら」と想定し、その意味的なネットワークを表している(「〜ために」「〜ながら」のボックスはプロトタイプとしての中心性を表すために太線で描かれている)。その他の機能語は、プロトタイプとの意味的類似性をもとに、カテゴリー内に組み込まれている(拡張の方向性は点線の矢印)。そして、「〜ために」については、目的用法を起点として原因用法への拡張が示されているが、これは3.3.2.3で指摘したように、目的用法が、名詞「ため」の意味<当該対象にとって何らかの益するところがある>(田中 2004:398)に由来しており、文法化¹の起点と解されるからである。ただし、この拡張は「〜ために」の多義語化と考えられ、目的表現、付帯状況表現のカテゴリー形成とは別に考える必要がある(拡張の方向性は破線の矢印)。

「目的」、「付帯状況」カテゴリー形成の過程においては、プロトタイプ表現と新たな表現の意味に共通して内在する抽象的意味、すなわちスキーマが抽出される。同様に、別の表現との間でも、この心的作業が繰り返される。それにより、さらに高次のスキーマが導かれる。上図においては、こういった途中のサブスキーマは省略されているが、最終的に「目的」「付帯状況」と名付けられる抽象的な意味が、そのカテゴリーを特徴付けるものとして抽出される。

¹ 内容語である名詞や動詞などの語彙的要素が、前置詞、助動詞などの機能語や屈折接辞などの文法的要素に変化するという通時的現象(松本 2003:120 参照)。

以上のネットワーク形成から次の点を主張することができる。

- (1) 機能語と内容語は連続的であり、明確に区別することはできない。
- (2) 機能語も内容語同様、複合的カテゴリーから成る。

(1)については、2.4.2の図1(*tree*のカテゴリー形成)と、上図の「～がてら」や「～に+移動動詞」などを比較するとわかるが、両者とも、プロトタイプとの類似性を基にカテゴリーの成員として組み込まれており、その形成過程は軌を一にしている。ゆえに、内容語と機能語の意味は同じ過程を経て形成されているという点で、明確に区別することはできず、連続的であると言えよう。語(*lexical items*)と文法的標識(*grammatical markers*)では、後者のほうが次第に抽象度は高くなるものの、どちらも十分な意味を持っているとする Langacker(2008:22-23)の主張も、(1)により裏付けられることになる。

(2)の複合的カテゴリーについての主張に関して、まず Langacker(2008:226)の以下の論を見ておこう。

Complex categories are characteristic of virtually every aspect of linguistic structure: the established senses of a lexical item, the phonetic realizations of a phoneme (“allophones”), the phonological realizations of a morpheme (“allomorphs”), families of grammatical constructions, and so on.

複合的カテゴリーは、実質的にはあらゆる言語構造の局面に特徴的である。たとえば、語彙項目の確立した意味、音素の音声的実現(異音)、形態素の音韻的实现(異形態)、そして文法的構文の集まりなどについても同様である。

(日本語訳は引用者による)

Langacker のこの主張は、ある一つの言語形式を用いて複数の意味や機能を表そうとする、ネットワークの広がりについてのものである。本稿で扱ったもので言えば、「～ために」がこれに当たる(「～ために」は目的カテゴリーから原因カテゴリーに拡張している)。複合的カテゴリーの有り様について、Langacker(2008:227)はさらに次のように比喩的に説明している。

Suppose we compare a complex category to a mountain range, with peaks corresponding to category members. Rather than being discrete and sharply distinct, the peaks in a mountain range grade into another, rising from a

continuous substrate to their various elevations. The number of peaks cannot be counted with absolute precision—how many there are depends on how high we decide a prominence has to be in order to qualify as such.

複合的カテゴリーを、カテゴリーの成員を頂に対応させた、山脈として考えてみよう。この山脈の頂は、離散的で、はっきりと区分されるというよりもむしろ、連続的な地盤がさまざまな高さになるにしたがって、別の頂になっている。頂の数は、完全な正確性をもって数え上げることはできない。どれくらいの頂が存在するのかということは、我々が、頂と認めるためには、どれくらいの高さに際立ちを定めるかということに依っている。(日本語訳は引用者による)

これは、多義語の別義間の連続性などについて説明したものである。一方、「～がてら」のような単義表現はどのように考えられるだろうか。これは、「～ために」が「目的」を表す場合と同一の形式を以って新奇のカテゴリー(「原因」)を表すような拡張とは異なり、すでに確立している「～がてら」の意味の中に、「目的」あるいは「付帯状況」の意味との共通性が認められ、それにより、それぞれのカテゴリーに取り込まれたものと言うことができる。したがって、意味のどの部分を際立たせるかによって、異なる複数のカテゴリーに内包されることがあり得る。以上をまとめると図2のようになる(「～がてら」の場合、「目的」「付帯状況」の顕著性は相対的に低いため、点線で表示)。これによると、意味形成へのカテゴリー関与は両者異なるものの、その様相は多義語²と単義語のそれと類似していると言えよう。

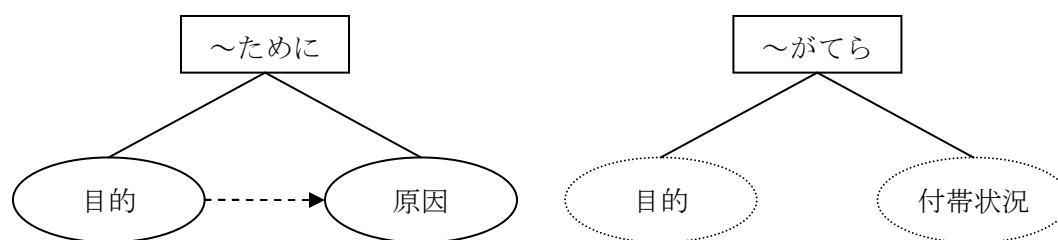


図2 「～ために」と「～がてら」の複合的カテゴリー

以上見てきたように、ひとくちに複合的カテゴリーといっても、複数のカテゴリーがどのように意味形成に関わるかは単純ではない。とはいえ、「～ために」も「～がてら」も機

² 「目的」と「原因」の共通性が想起されなくなれば、同音異義語と解されるようになるだろう。

能語でありながら、前者が多義語のネットワーク形成に等しく、一方、後者が「目的」や「付帯状況」カテゴリーに含まれるというのは、2.4.2の図1における *palm* が[TREE]に内包される過程に相当する。つまり、どのような言語形式のレベルにおいても、カテゴリーが複合的に関わって、その意味を形作っているということである。本研究の意義は、この考え方が日本語の機能語にも当てはまるということを明らかにした点にある。

以上、本研究で得られた結論は、認知言語学で言われているカテゴリー観に沿うものであるということが明らかになった。しかし、カテゴリーは明確な境界を持つものではなく、連続的であるという考えからすれば、そもそも「目的」「付帯状況」というように、部分的に切り取って考えることは本来の意味の姿からは不自然である。ゆえに、本稿で扱ったカテゴリーは、あくまで、便宜的に設定したものであると言わざるを得ない。現実には、「原因」と「目的」の「～ために」がそうであったように、カテゴリーは連続的なのである。また、本稿で扱った表現形式以外にも、同じカテゴリーに属すると考えられる成員は存在する。それらとの関係性を検討することによって、カテゴリーの特徴がさらに明らかになるだろう。このように考えると、本研究を起点にして、さらに様々な表現との意味的なつながりを考えていくことが可能である。この点について、今後、どのような意味探究の可能性があるか、展望を次に述べることにしたい。

6.3 展望

前節で、本稿で扱った表現形式以外にも、「目的」「付帯状況」の成員として考えられるものがあると述べたが、それらについての展望を示すことにしたい。

まず、「目的」に関しては、3.2で示した先行研究を参考にすると、少なくとも「～ように」、「～のに」、「～べく」が挙げられる。「～ように」については、前田(2006:第3章)が「～ために」との比較を行い、意味の関連性と相違点について検討している。前田は様態の「よう(に)」との関連性からのアプローチを採っているが、この考え方は、本研究が依拠してきた複合的カテゴリーの連続性に基づいた分析方法に通じる。ただし、前田が両表現の相違点の一つに挙げている「主体が意志的にコントロールできるか否か」という問題は、主体を、描写される事態に対して、どのように位置づけるかということであり、さらに議論の可能性が残されているところであろう。

「～のに」は、前田(1995)が「必要・使用・有用を表わす」と記述しているが、実際、あ

る対象が、人間にとってどのように有用であるかということに用いられるという使用上の特徴が認められる。これは認知言語学で広く受け入れられている百科事典的意味観による、意味を構成する4つの観点のうち、「内在性」に関わると考えられるため、この意味観に基づいた意味の記述が必要であろう。というのも、「～のに」という表現は、内在性の程度が劣る特徴(=「人間」という外在性の程度が高い特徴)が、主体の意味に関わっているということを表明する表現形式だと思われるからである³。

「～べく」は、用いられる場面が限定的であると想定されることから、國廣(1982a:81-84)で意味(「意義素」)を構成する特徴の一つに挙げられている「含蓄的特徴」という点について見ていく必要があるだろう。

「付帯状況」の成員としては、本稿で取り上げた「～ながら」と「～つつ」以外に、「～まま」、「～きり」、「～て」および野呂(2010)の言う「動詞連用形重複構文」⁴などが挙げられる。

「～まま」、「～きり」は、<ある状態が継続する>というような意味においては確かにカテゴリーの成員になり得るが、それだけではなく、背景に、話者の経験、知識に由来する期待などが意味に関わっていると考えられる。

「～て」は、南(1993)では少なくとも4種が認められている。それらとの意味的な相関を記述することができたら、付帯状況の概念的なレベルを形式的な面から位置づけることができるかもしれない。

本稿で取り上げた「～ながら」と「～つつ」及び「～がてら」は、動詞に後続する場合は連用形に接続するという形式的な共通性があるが、連用形を反復させて従属句を成した場合も、同じように付帯状況を表す。動詞連用形重複構文は多くの場合、「～ながら」に言い換えられるが、いずれにしても、付帯状況を表すとき、動詞はなにゆえ連用形をとるのかという疑問は、形式と意味の関係を論じる上でも、非常に大きな問題をはらんでいると思われる。

以上のように、他にもカテゴリーの成員と成り得る表現形式は存在し、それらとの関係を分析していくことで、より一層、言語使用の実態に即した意味の記述が可能になる。こ

³ 「百科事典的意味観」および意味を構成する4つの観点については、初山(2010)を参照されたい。

⁴ 「汗を拭き拭き土にまみれて作業に熱中していました」(野呂 2010:127 の例(1)の一部)のような、[動詞連用形+動詞連用形]の構文を指す。なお、野呂(2010)はこの構文の意味を<行為(V)を相当回数反復すると同時に、後件の行為を行う>と記述している。本稿で示した記述と照らして、その意味的関連性は、さらに追究することができるだろう。

れがカテゴリーに基づいた意味研究の一つの方向性とする、もう一つ、意味の研究の方向性が想定できる。すなわち、他のカテゴリーへの拡張である。

前田(2006:47)は、「目的」の「～ために」の意味について、「原因・理由」の「～ために」との関連から考える必要があると述べている。本研究において検討した「目的」の「～ために」の意味は、奇しくも、前田のこの見通しに沿って導いたことになる。そして「目的」と「原因」の共通の意味として見出された〈あるべき状態との隔たり〉というのは、言うなれば、人間が、ある事態とある事態との間に因果関係を想起させる動機となるものである。それでは、話者の事態認識の背景にある、この〈あるべき状態〉というものは、どのような過程を経て形成されるのだろうか。この問題に関しては、さらに議論を必要とするだろう。

他にも本稿で検討した形式の中で、別のカテゴリーへの拡張がされているものがある。それが「～ながら」である。「～ながら」は付帯状況を表す形式であるが、いわゆる「逆接」を表す形式としても一般的に用いられている。

- (3) 松井大輔、香川真司、酒井高德、槇野智章の4人はドーハに来ながら、けがで途中離脱した。(朝日新聞、2011年1月31日)

ところが、以下の「～ながら」は「付帯状況」として解されるか、「逆接」として解されるか、判断は分かれる。

- (4) 「まずい」と言いながら、食べている。

「まずい」の発言時、口の中で食べ物を咀嚼している状況であれば、「付帯状況」であろう。一方、「まずい」という発言から通常、「食事を中断する」という行為が予想されるが、実際に行っているのは「食べている」という、予想とは相反する行為であり、このような解釈では「逆接」となる。このように、同形式であるにもかかわらず、文脈によって異なる意味が考えられるが、「付帯状況」と「逆接」の連続性は、すでに先行研究でも盛んに議論されている(川越(2002)、江原(2003)、村木(2006)など)。興味深いことに、同様の現象は「～つつ」の場合も並行して見られる。

- (5) 河村は騙されるかもしれないと思いつつ話を受けたんだよね。

(AERA、2011年5月30日号)

そう考えると、「逆接」の「～ながら」、「～つつ」の違いに、本稿で導出した意味的相違が

何らかの形で関わっていると思われる。この意味的相違が、逆接カテゴリーにおける他のメンバーとの示差的な「～ながら」、「～つつ」の特徴だとすると、人間がある事態間に抱く「逆接」という感覚の多様性を描き出すことができるだろう。

以上のように、「目的」、「付帯状況」に端を発して、他のカテゴリーとの関連性を発展的に考えていくことが可能である。

最後に、他言語との対照研究についても、有意義な研究が可能であると考えられる。本稿では日本語の「～ために」の「目的」と「原因」の共通性を探ったが、國廣(1982b:110)は「英語の for、フランス語の pour、中国語の wèi も「目的・理由・原因」を意味する」としている。この指摘は確かに以下の例からも支持される。

(6) Also, fight for having written contracts and agreements.

(契約書または契約を取るために奮闘してください)

(<http://eow.alc.co.jp/%e3%82%8b%e3%81%9f%e3%82%81%e3%81%ab+for/UTF-8/?pg=5>)

(7) The journalist has been imprisoned for expressing his political beliefs.

(そのジャーナリストは、政治的信念を表明したために拘禁されている)

(<http://eow.alc.co.jp/%e3%81%9f%e3%81%9f%e3%82%81%e3%81%ab/UTF-8/?pg=2>)

(8) J'ecoute de la musique pour m'endormir. (私は眠りにつくために音楽を聴きます)

(9) Il a été exclu de la classe pour avoir parle trop fort.

(彼は大きな声で話したために、教室から出された)

(10) 为了中三亿园的彩票、每次都在名古屋站前排队。(为: wèi)

(宝くじで3億円当てるために、いつも名古屋駅前で並んでいます)

(11) 因为中了三亿园的彩票、造成一家人支离分散。(为: wèi)

(宝くじで3億円当たったために、家族が離散することになった)

このように、複数の言語で「目的」と「原因」を同一の言語形式によって(あるいはその一部として)表現することができる。この形態的な共通性を単なる偶然ではないとすると、「目的」と「原因」の共通性は、汎言語的に人間が持つ事態認知のあり方を表しているという仮説が成り立つ。しかし一方で、「付帯状況」を表す形式を以って「逆接」を表したり、「目的」と「付帯状況」との中間に位置する形式「～がてら」が存在するなど、日本語独特とも思える言語現象がある。これらは日本語母語話者に通底する、言語以前の何らかの思考

的傾向が反映されていると考えられ、学習者にとっては習得が難しい項目となるだろう。

本研究で扱った各表現形式は、以前より様々な角度から盛んに議論されてきたものであったが、本稿の分析によって、それらが表す意味の実態の新たな一面を明らかにすることができたのではないだろうか。これは取りも直さず、認知言語学のカテゴリ一観の有効性を示したことにほかならない。そして、この考え方により、複文表現が表す意味の本来の姿を描き出すことにつながるだろう。

用例の出典

朝日新聞：朝日新聞オンラインデータベース『聞蔵Ⅱビジュアル』.

asahi.com：朝日新聞デジタル(<http://www.asahi.com/>)

毎日新聞：CD-ROM版 毎日新聞.

中日新聞、東京新聞：『中日新聞・東京新聞データベースサービス』.

読売新聞：YOMIURI ONLINE(<http://www.yomiuri.co.jp/>)

日本経済新聞、日経プラスワン：オンラインデータベース『日経テレコン21』.

AERA：朝日新聞社.

週刊朝日：朝日新聞社.

『エディプス』：筒井康隆『エディプスの恋人』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『一瞬』：沢木耕太郎『一瞬の夏』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『女社長』：赤川次郎『女社長に乾杯！』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『風』：五木寛之『風に吹かれて』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『錦繡』：宮本輝『錦繡』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『こころ』：夏目漱石『こころ』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『砂の女』：安部公房『砂の女』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『太郎』：曾野綾子『太郎物語』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『照柿』：高村薫『照柿』、講談社文庫.

『点と線』：松本清張『点と線』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『日輪』：浅田次郎『日輪の遺産』、徳間文庫.

『楡家』：北杜夫『楡家の人びと』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『鼠』：井上ひさし『黄色い鼠』、文春文庫.

『晩秋』：志賀直哉『晩秋』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『ブン』：井上ひさし『ブンとフン』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『冬』：立原正秋『冬の旅』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『ト居』：堀辰雄『ト居 津村信夫に』、青空文庫.

『雪国』：川端康成『雪国』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『約束』：宮本輝『約束の冬』、文春文庫.

『山本』：阿川弘之『山本五十六』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『路傍』：山本有三『路傍の石』、CD-ROM版 新潮文庫の100冊.

『李歐』：高村薫『李歐』、講談社文庫.

『テーマ別 中級』：荒井礼子・太田純子・亀田美保・木川和子・桑原直子・長田龍典・
松田浩志(2003)『テーマ別 中級から学ぶ日本語 改訂版』、研究社.

『日経おとなのOFF』：日経BP社、2009年11月6日号.

インターネット検索エンジン：Yahoo! JAPAN (<http://www.yahoo.co.jp/>)

参考文献

- 石川守 (1988) 「目的の「ために」と「ように」、及び既定条件の「たら」、と「て」における自己の意志の問題」『語学研究』第 54 号、拓殖大学.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏広 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク.
- 江原由美子 (2003) 「付帯状況と逆接」『岡大國文論稿』31、pp.57-66、岡山大学.
- 岡本牧子・氏原庸子 (2008) 『くらべてわかる 日本語表現文型辞典』、Jリサーチ出版.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』、くろしお出版.
- 梶川克哉 (2009) 「現代日本語における「散歩」の意味分析」『日本語・日本文化論集』第 16 号、pp.1-26、名古屋大学留学生センター.
- 梶川克哉 (2010a) 「働く」の意味分析」『言葉と文化』第 11 号、pp.285-302、名古屋大学国際言語文化研究科.
- 梶川克哉 (2010b) 「動詞「おす」の意味分析」『日本語・日本文化論集』第 17 号、pp.21-39、名古屋大学留学生センター.
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』、研究社.
- 川越菜穂子 (2002) 「ながら」節の用法の記述について—付帯状況・様態・逆接」『人間文化学部研究年報』第 4 号、pp.53-62、帝塚山学院大学.
- 國廣哲彌 (1982a) 『意味論の方法』、大修館書店.
- 國廣哲彌 (1982b) 「タメニ・ヨウニ」國廣哲彌・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子(編) 『ことばの意味 3』、pp.104-111、平凡社.
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』、大修館書店.
- 窪菌晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』、くろしお出版.
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』、くろしお出版.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』、ひつじ書房.
- 阪倉篤義 (1966) 『語構成の研究』、角川書店.
- 佐治圭三 (1984) 「類義表現分析の一方法—目的を表す言い方を例として—」『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻 言語編』、pp.9-21、三省堂.
- ジョン R. テイラー・瀬戸賢一 (2008) 『認知文法のエッセンス』、大修館書店.
- 鈴木智美 (2008) 「事態に対する話者の期待と感情・評価の意味—理想化認知モデルの観点

- からの考察一』『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第34号、pp.27-42、東京外国語大学.
- 田中寛 (2004) 『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』、白帝社.
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』、ひつじ書房.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学キーワード事典』、研究社.
- 寺村秀夫 (1983) 「「付帯状況」表現の成立の条件—「XヲYニ…スル」という文型をめぐる—」 『日本語学』2巻10号、pp.38-46、明治書院.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』第二巻、くろしお出版.
- 寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』、くろしお出版.
- 中畠孝幸 (2000) 「目的を表す構文について—ヨウニとタメニ—」 『甲南大學紀要(文学編)』115号、甲南大學.
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6 第11部複文』、くろしお出版.
- 野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『複文と談話』、岩波書店.
- 野呂健一 (2010) 「現代日本語の動詞連用形重複構文」 『日本語文法』10巻2号、pp.126-142、くろしお出版.
- 服部四郎 (1968) 『ELEC 言語叢書 英語基礎語彙の研究』、三省堂.
- 前田直子 (1995) 「スルタメ(ニ)、スルヨウ(ニ)、シニ、スルノニ」 宮島達夫・仁田義雄(編) 『日本語類義表現の文法 (下)複文、連文編』、pp.451-459、くろしお出版.
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』、笠間書院.
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』、くろしお出版.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』、くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』、くろしお出版.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』、くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 「「ながら」とその周辺」 『日本語文法の諸相』、pp.201-214、くろしお出版.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」 中右実(編) 『空間と移動の表現』、pp.126-229、研究社出版.
- 松本曜 (2003) 『認知意味論』、大修館書店.
- 南不二男 (1964) 「複文」 森岡健二他(編) 『講座現代語 6 口語文法の問題点』、pp.71-89、明治書院.

- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』、大修館書店.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』、大修館書店.
- 三宅知宏 (1995) 「～ナガラと～タママと～テ」 宮島達夫・仁田義雄(編) 『日本語類義表現の文法(下)』、pp.441-450、くろしお出版.
- 舩山洋介 (2002) 『認知意味論のしくみ』、研究社.
- 舩山洋介 (2006) 「1-8 認知言語学」 鈴木良次(編) 『言語科学の百科事典』、pp.157-178、丸善株式会社.
- 舩山洋介 (2010) 「百科事典的意味観」 山梨正明(編) 『認知言語学論考』 no.9、pp.1-37、ひつじ書房.
- 村木新次郎 (2006) 「「一ながら」の諸用法」 益岡隆志・野田尚史・森本卓郎(編) 『日本語文法の新地平 3 複文・談話編』、pp.1-23、くろしお出版.
- 山田進 (1982) 「ワタル・コエル・コス」 國廣哲彌・柴田武・長嶋善郎・山田進・浅野百合子(編) 『ことばの意味 3』、pp.20-28、平凡社.
- Berlin, B., and Paul Kay. (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*. Berkeley: University of California Press.
- Croft, W. (2006) “The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies”, *Cognitive Linguistics: Basic Readings*, ed. Geeraerts. D., pp.269-301. Mouton de Gruyter.
- Fillmore, C. J. (1968) ‘The Case for Case’. In E. Bach and R. T. Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, pp.1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Labov, W. (1973) ‘The boundaries of words and their meanings’. In Bailey and Shuy (eds.), *New Ways of Analyzing Variation in English*, pp.340-373. Washington, D.C.: Georgetown University Press.(Bas Aarts (eds.), (2004) *Fuzzy Grammar: A Reader*, pp.67-89. Oxford University Press.)
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press. (池上嘉彦・河上誓作・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎・梅原大輔・大森文子・岡田貞之訳 (1993) 『認知意味論—言語から見た人間の心』、紀伊國屋書店)
- Langacker, R.W. (1987) *Foundations of cognitive grammar* Vol.1: Theoretical prerequisites. Stanford: Stanford University Press.

- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*.
Cognitive Linguistics Research 1. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R.W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: Oxford
University Press.
- Rosch, E. (1978) "Principles in Categorization." In Rosch and Lloyd (eds.), *Cognition and
Categorization*. pp.27-48. Hillsdale,NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Taylor, J. R. (2003³) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford:
Oxford Univ. Press. (辻幸夫・鍋島弘治朗・篠原俊吾・菅井三実訳 (2008) 『認知言語学
のための14章』(第三版)、紀伊國屋書店)
- Wittgenstein, L. (1953) *Philosophical Investigations*. Oxford: Basil Blackwell & Mott.

【辞典、辞書類】

- 『日本文法大辞典』、松村明編(1971)、明治書院。
- 『国語大辞典』、尚学図書編(1981)、小学館。
- 『角川国語大辞典』、時枝誠記・吉田精一編(1983)、角川書店。
- 『広辞林』(第六版)、三省堂編修所編(1984)、三省堂。
- 『岩波国語辞典』(第六版)、西尾実他編(2000)、岩波書店。
- 『学研国語大辞典』(第二版)、金田一春彦・池田弥三郎編(1988)、学習研究社。
- 『新明解国語辞典』(第六版)、山田忠雄他編(2005)、三省堂。
- 『大辞林』(第三版)、松村明・三省堂編修所編(2006)、三省堂。
- 『日本語大辞典』(第二版)、梅棹忠夫他監修(1995)、講談社。
- 『広辞苑』(第五版)、新村出編(1998)、岩波書店。
- 『日本語文法大辞典』山口明穂・秋本守英編(2001)、明治書院。
- 『日本国語大辞典』(第二版)、日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編
(2001)、小学館。
- 『小学館日本語新辞典』、松井栄一編(2005)、小学館。

謝辞

本論文は、筆者が名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程在籍中に行った研究の成果をまとめたものです。同研究科教授の靱山洋介先生からは、博士前期課程に入学して以来、基本的な知識から研究の方法論まで、多岐にわたってご指導賜りました。このように論文として形にすることができたのは、何よりも先生の的確な導きあってこそです。ここに深く感謝申し上げます。

また、本論文の審査においては、同研究科の堀江薫教授、李澤熊准教授より、今後の研究の発展につながる非常に有益なご助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

本論文の重要なテーマの一つとも言える、従属句の階層性についての理解は、南不二男先生からの私信によって大いに援けられました。一介の大学院生に過ぎない筆者からの疑問に、一つ一つご丁寧にお答えくださり、非常にありがたく感じました。ここに深く感謝申し上げます。

同研究科現代日本語学講座の先輩諸氏は、常に研究の高みを目指す姿勢を示してください、筆者の励みとなりました。中でも、現在東北学院大学専任講師の野田大志氏からは研究に役立つ多くの情報をいただきました。また、同講座の大西美穂氏は、同期生ではありますが、いつも研究の先鞭をつけ、筆者にとっては、いわば研究の道標でした。諸氏のおかげで、ここまで研究を続けていくことができました。心より感謝いたします。

そして、現代日本語学研究会、認知言語学勉強会に参加された方々、在校生の皆様は、拙論発表の際に、貴重なご意見を多数くださいました。ここに深く感謝申し上げます。

第6章のフランス語の *pour* の用例は、友人であるシリル ペルノ・京子夫妻に、中国語の *wèi* の用例は、大学院の先輩である許永蘭氏からいただきました。心よりお礼申し上げます。

最後に、在職のまま大学院へ送り出してください、くださった名古屋 SKY 日本語学校の皆様、そして、研究に専心できるよう心身ともに支えてくれた家族に心から感謝いたします。